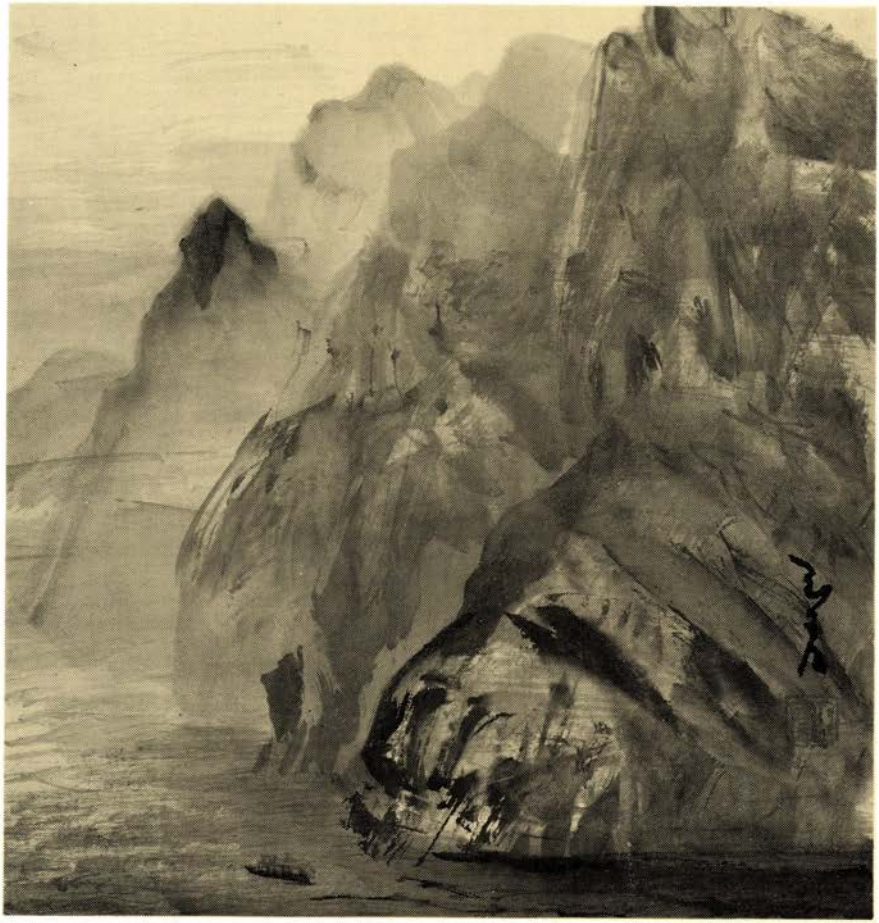
川柳塔

昭和六十一年九月二十五日印刷
昭和六十一年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七一三号



日川協加盟

61年度 二賞発表

No. 713

十月号

61年度 同人総会と二賞表彰10月句会

日　時　昭和61年10月5日（日）午後一時開場

会　場　メンズファッションセンター3階
地下鉄谷町線「谷町4丁目」下車2号出口
谷町3丁目交差点西南角
電話　06（941）1918

▼同人総会　午後2時～3時30分
〔議事〕①会計報告―高杉鬼遊　②事業経過報告―
樫谷寿馬　③役員改選　④質疑応答

▼二賞表彰句会　午後5時30分から
おはなし　西尾栞
路郎賞・川柳塔賞表彰
兼　題　「青」　西山幸選
「深い」　里小路選
「魔法」　岩本雀蹄子選
「苦心」　黒川紫香選
席　題　二題　各題3句　締切6後30分
会　費　五百円

川柳塔社

社告

昭和62年1月号誌上から
女性コーナー「茴香（ういきょう）の花」欄を新設します。
振ってご応募下さい。

選者　小出智子（昭和62年度）
八木千代（昭和63年度）

投句規定
☆ハガキに雑詠3句、住所氏名明記
☆女性作家に限る
☆昭和61年11月10日締切り（第1回）
以後毎月10日に締切ります
☆投句先　〒544 大阪市生野区勝山南1丁目10―18
小出智子宛

川柳塔社

木偏の漢字

西尾　栞

㈱中川木材店社長であり三重大学の講師であった中川藤一氏より木偏の漢字実用事典一〇〇選という本をもらった。はしがき、序、はじめに、を読んでみるとなかなか面白いので紹介してみよう。

外国の家紋は、自分の家が如何に侵略的で強かったかを誇示して、剣や盾やライオンをあしらった模様を使っているのに反して、日本の家紋はすべて植物を抽象化したものである。外国ではこの日本の紋章が大変うけている。それは美しい日本、自然を愛する日本人の心根が受けているのであろう。

戦後木の名前は仮名文字で片づけられ、味気ないことである。それで漢字一字で木を現わす字を調べて一〇〇字を得た。そして和歌、俳句、川柳、詩でそれぞれの木をうまく言い現していることに感動した。川柳は、柳に縁があるから柳の木の頁をくってみる。

いっそ逢って帰へろうかしら柳の芽　（鋳谷京糸）

やわらかに柳あをめる北山の岸辺　目に見ゆ泣けとごとくに　（石川啄木）

横に降る雨なき京の柳かな　（蕪村）

始めに二句一首をあげて、柳の木の性質を感得せしめ、次に、落葉高木、雌雄異株、高さ10―15m直径60cm時に1mにもなる。（柳腰）（柳態）（柳眉）（柳髪）等、柳は美女の表現に多い。お正月の目出度い箸は柳箸である。柳の炭は漆器、うるしのとぎ出しに最高である。揚子江畔に多い柳は楊の字であるが、日本にあるのは、しだれている柳の方が多い。銀座の柳であり、蛙飛びつく柳である。等々と載っている。余り長くなるので、川柳で引用されたのを抽出すると、

嵯峨野ゆく一幅の絵と樫落葉　（奥田白虎）

初恋は杏子の花の匂いする　（小寺燕子花）

紅梅へ動きそめたる池の鯉　（西尾　栞）

からたち（枳）の新芽も伸びてまだ空家　（金川佳鳴）

桐の花所詮人恋う彩に咲く　（田中好啓）

くに境栗は丹波か能勢へ落ち　（山添眉水）

分譲地桜が咲けばみんな売れ　（深尾吉則）

持って死ねなんだらしい銀行から榕　（西尾　栞）

悲しみの中で榕の数をよみ　（中尾飛鳥）

最後に榕の字をあげて稿を終る

座右の句

足跡を残そう砂のある限り　（恵二朗）

私の句

大海へびくともしない島が好き　小林妻子

川柳塔　十月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

木偏の漢字……西尾　栞…（1）
縞……小出智子…（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…（4）
自選集……（27）
■川柳太平記(101)　川柳の群像　佐藤冬児……東野大八…（30）
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（二十七～二十八丁）……（32）
61年度路郎賞・川柳塔賞決まる……（34）
水煙抄……黒川紫香選…（38）
秀句鑑賞「同人吟……野村太茂津…（55）
　　「水煙抄……津守柳伸…（59）

縞

小出智子

七月四日第一回勉強会ということで、鳥羽への吟行に参加した。その時の兼題が「縞」私にとっては忘れることのできない題で、十年前のことを鮮明に思い出させてくれた。

その頃、あちこちの句会にこまめに足を運んでいて、適当に句も抜けて、結構楽しんでいた。それなのにどうしたことか、何のために川柳をしているのか、意味のないことをしているのではないかと、作句に疑問を持つようになった。面白いためにのみ、無闇に作句しているような時代であった。川柳がちっぽけなもののように思えてきて、どうしても川柳を続けてゆく気にはなれないようになっていた。今思い返えしても、何故あのように思い詰めたのか不思議でならない。

その年、長男が結婚をして、私にも一つの人生の節目を迎えたということもあったからかもしれない。

五十一年一月から、ぷっつりとどこの句会へも出ず、友達にも「川柳はやめた」と言い切る程さっぱりとして、本棚の整理をし、清

愛染帖……橘高薫風選…(56)
句中の切れ目……竹内紫錆…(60)
初歩教室……阿萬萬的…(62)
「嵐」……河合茂雄選…(64)
一路集「急ぐ」……原田メイシュン選…(64)
「全力」……飯田悦郎選…(65)
柳界展望……(66)
本社九月句会……(70)
各地柳壇（佳句地10選／行吉照路）……(74)
■10月各地句会案内　87　■編集後記　89

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか　（薫風）

私の句

七人の敵から守る妻の酌

渡部さと美

々したつもりでいた。

そうして、桜の便りにもまだ早い頃、作句しなくなってどれ程も経っていないのに、どういうことか、無意識の内に句を口ずさんでいる。私の心から川柳が離れていないのだ、それどころか、日が経つに従って句の事ばかり思っている自分に気付き、これは大変なことになったと思った。私の生活に川柳は、切り離せないものになっていることを知った。ちょくちょく句をノートに書いていたのが、それでは句が可哀そうだと思いはじめ、ぽつぽつ投句も始めたことは、私としては勇気のいることであった。そうして、とうとう五月から本社句会へも出席するようになった。

その年の十一月、正本水客選の兼題が「縞」であった。「縞馬に生れ死ぬまで縞を着る」が天の句で、二度目の月間賞を得て永久保持のカップを戴いた。

あれほどやめようと決心をしたのに、どうしても川柳を忘れることができないのなら、どんなに辛くても、心を籠めて、自分の作品を書くより外はないとの思いに至った。そうして、最も大切なことは、情熱を持ち続けることであると知った。

川柳から逃げ出そうとした軽卒な日もあったが、器用に生きられぬ身であれば、これも仕方がない。月日の経つのは実に早い。これからの十年を思い、自分への戒めとしたい。

川柳塔

西尾栞選

岡山県　嘉数兆代賀

生きざまをさらしたくない寺詣り
橋桁の一つとなっている余生
拡大鏡で読みなおしてるいい便り
病葉いちまい風の情けの中で舞い
西陽射す窓で書いてる私小説
出会いよアリガトウ今日の陽が沈む

松原市　谷垣史好

サーロインステーキにも秋の深まり
原点は野菜に土が付いている
芋虫に期待されても困ります
ウォークマン孤独地獄か法悦か
方程式を解けば答えは雌と雄
静脈の青く浮き出た手で愛し

八尾市　高杉鬼遊

形影相同やさしき人の詩やよし
紆余曲折ひとこと好きとなぜ言えぬ
合縁奇縁いまさら愚痴をいうでない
虎視眈眈総理の椅子は一つなり
栄枯盛衰福耳なれど裏住まい
光陰流水読みたき本を積みしまま

桜井市　岩本雀踊子

変り栄えしない朝の洗面器
うれしいな私を敵と見てくれた
朗らかな朝の返事をくれる妻
気ぜわしいほどなが生きをほめられる
椅子取りゲーム出来ぬ年になりました
誰にも見せぬ二の矢三の矢持っている

和歌山市　福本英子

コスモスが咲く亡弟へ八月十五日
蟹缶を何時開けようか女独り
空席へ坐ればクーラー効きすぎる

贅沢と亡舅叱るかも盆の花
盆三日家族へ遠慮せぬ読経
冷蔵庫開けて麦茶の減り具合

竹原市　小島蘭幸

街よ光れみんな田舎に帰ったぞ
野の広さおまえにやると言われても
妻と手をつないで父の墓へ行く
乾杯の明日から酒はやめましょう
泣き虫の私の部屋が欲しくなる
コンクリートの柱で鳴かぬ蟬となる

岡山県　土居耕花

とうふ屋で糖尿病のひとくさり
ワープロで馬と鹿とは直ぐ引ける
考えを絶対変えぬヒキガエル
八月にはいると怖い雲の峰
コマーシャル老いの食べたい物が無い
天国があったら何か落ちるだろ

島根県　小砂白汀

血の色でトマトしきりに唆す
鬼一匹その日のために飼っておく
噂からうわさをもらい逃げきれぬ
台風へ竹はしなって見せただけ
いい話ですねと相槌打っただけ
以下余白何か足りない気もするが
酸漿(ほうずき)が鳴らぬ祭を寂しがる

富田林市　岩田美代

痛いとこつつくコーヒを注文す
考えの甘さに傾くむし暑さ
針千本飲んで極楽行きらしい
又ひとりメモから消えた虫時雨
弱虫で昨日とばかり話する

平田市　久家代仕男

路郎忌やあの炯眼はまのあたり
地下足袋が今年も届く父の日に
口こみに耳は貸すなと風の私語
玄関に淋しがりやの忘れ傘
咽喉もとを美味では済まぬ鯛の骨
人間の海には疑似餌ばかり浮く

松原市　玉置重人

秋深し橋の袂のたこやき屋
熱心なヤツがいて会議渉らず
マンションへ曰くありげに来たベンツ
いらんもの又バーゲンで買うてくる
妊った報せ嫁の瞳が眩し
しっかりと生きねばならぬ蟬しぐれ

和歌山市　西山幸

甘い言葉がやっぱり好きな耳飾り
わたくしに向いた人差し指がある
募金箱さても鬼心と仏心と
きりん草耐えることのみ多かりき
横糸の呼吸がテーマだと思う
私とわたしの今日の妥協点

大阪市　津守柳伸

なによりの馳走は風呂が沸いている
かぶりつく西瓜他人の顔でない
児をだしに十連発を打ち揚げる
萩桔梗好む女で隙がない
水害の街に一番乗りの水
花詩集酔えるものありまだ五十

八尾市　宮西弥生

カナダの旅

コロンビアの氷河にふるえて熱い夏
人口の数だけ湖エメラルド
湖と森と花にとけこむ乙女はも
片言の英語で通るふか情け
夢ならば醒めるな世界の花の園
汗のない国です花のハンカチ碧い湖

鳥取県　川崎秋女

暑中見舞十枚書いて昼にする
これでいいこれでいいサと天の声
私に刻をくださいほとけさま
気狂いの血はこの辺でちょん切ろか
結局は血の繋がりに負けました
一匹の鬼追い出せぬままに秋

大阪市　西森花村

色盲の立場で紅葉美しい
布袋さんよりはすらりとうちの人
止めるまで待ってるお経もソプラノも
俄雨娘のコートが気に入って
秋近し何か借りてる処無いか
近所でも付合いはない医者と寺

大阪市　西出楓楽

旧人類で高倉健と通じ合う
七人の敵は女にもある市場籠
青春をお金で買うているバイト
おてんとさんが公平だとは言い切れぬ
舌一枚増やすと気楽に生きられる
苦い薬が必ず利くと限らない

尼崎市　春城年代

味のある亡母のことばは祖母仕込み
言わずもがなのことを手紙で追っかける
風鈴のおしゃべり夜が深くなる
鏡に向いお前この頃背がまるい
テレビ無情遭難記事や阿波踊り
散歩する時間も大切な日課

米子市　菅井とも子

夏休みまだかまだかとくにの老父
お笑いの種を探しに街に出る
明るさに紛れて見えぬ森の鍵
生き仏今日も好物食べている
ながらえて地獄の底も見てしまう
吊橋のゆれに合わせて老いてゆく

唐津市　浜本義美

城下町錆びた昔を売りたがり

盆栽のようにはゆかぬ子の躾
お先にと言われただけで嬉しがり
下積みの汗で社長が振るクラブ
静然と眼鏡を拭けば湧く闘志
強がりを言えば虚しさだけ残り

寝屋川市　稲葉冬葉

おんなまだ取り越し苦労買うてくる
自画像の瞳が泣いている画廊
同居中私の部屋にカギがない
一匹の蚊と熱帯夜共にする
犬小屋に網戸わたしが安眠す
鼻息の荒い眠りを知っている

近江八幡市　前川千賀子

そうめんの白さを母の夏とする
ユーモアで別れる言葉飾らねば
Xの夢Yの夢月見草
朝顔が旅発つ燕見送りぬ
真夏日にことさらあおき菜を刻む
仄白く夕顔昔語りする

西宮市　奥田みつ子

夏の陽が生まれ変われと焼きつくす
パリ帰りフランス人になれもせず
乱視です沢山います好きな人
八十になれば告白したいこと
スランプに家中の窓あけ放つ
ためらいを少うし見せてペアルック

和歌山市　福井桂香

閉ざされた窓が悔しい夏木立
円高へOL夏の旅を買う
阪神も巨人もほめて握るネタ
相性がいいなあマヨネーズとトマト
リーダーは帽子の徽に気付かない
悪性でないから瘤をいとおしむ

岡山県　山本玉恵

倖せにかけたつもりの橋ゆれる
少うし狂うて女の生きる道探す
鬼と住む覚悟を定めて鍵捨てる
泣き上手になって女は牙を研ぐ
ひぐらしが鳴くから逢い度うなって来る
焦点に一人を置いている安堵

兵庫県　遠山可住

混んでいる店でうどんを待っている
上品にしてなと浴衣着せられる
地味に着てみても浴衣にある噂
切れすぎる男に安らぐ椅子が無い
親指を出して出直しして来よか

伊丹市　樫谷寿馬

玉音と雑音八月十五日
叱られてみたくて軽い嘘をつく
OKの返事は馬車に乗ってくる
下手なユーモア引っ込みつかなくしてしまう
厄介なことになったと伯父が来る

倉敷市　小野克枝

墓石へ御無沙汰続く幸続く
怒るよりほめて育てた朝の花
嫁してより他人行儀な瞳となりぬ
孫褒めてから本題に入る客
本当の客です値切り上手です

弘前市　波多野五楽庵

花時計心やさしき人に逢う
酒場から出れば夜霧の淡い街
美辞麗句借金したいだけのこと
オウムまで津軽訛りになる津軽
オルガンに合わない足も輪の中に

倉吉市　奥谷弘朗

不安でも恩があるから押した印
人柄が明るい性で親しまれ
金婚を潮時にして出す句集
人様の肚を読むことだけに長け
古稀の我叱ってくれる妻が居る

柳井市　弘津柳慶

腹割った話し合いにも陰があり
会社から帰ってむっつりと上衣投げ
大正子教育勅語が空で言え
協賛金前へ倣えの記名帳
町名の法被で山車の気勢上げ

堺市　中川滋雀

筆ペンのかすれ身の程知っている
ほとんどは妻が喋った電話料
絵日記のモデルへ孫に呼び出され
タバコ屋を辞めてタバコ屋ふり返り
痴漢にはなれぬ靴音高うする

倉敷市　野田素身郎

オイそこの蟻よこれから出勤だ
この仏にはこんなお世話になった過去
腹突きだして歩く女の自己主張
通院五年顔見知りがまた一人減り
通院五年看護婦さんも母になり

呉市　林野甦光

旅帰りのアドリブハンガーに吊られ
泥水の俯瞰へ走る救急車
忙中閑カモメも来てる舟溜り
公園で貧乏ゆすりをして戻り
景品場の前で内気なボンネット

堺市　高橋千万子

逢うまでは足し算ばかりしてたのし
西瓜一舟暑中見舞へ描きそえる
風鈴の絶え間をつなぐキリギリス
引きぎわを軽いめまいに教えられ
くだらない事がたまった耳の垢

米子市　小西雄々

足跡を残す年金ありがたい
サスペンスばかりを追って森へ行く
遠花火男のだまし言葉聞く

函数を開き疑い深くなる
霊峰へ優しい言葉かけに行く

米子市　林　瑞枝

重心を高いかかとにまだ未婚
俎板の指がルンバの曲に乗り
デパートの私にも要る迷子札
情報を先ずはわが家で煮て見よう
夕映えが悩みを過去にしてしまう

米子市　青戸田鶴

上がる程道が小さくなってきた
桔梗おみなえし亡母のたどった道に出る
百日を咲いて休めぬさるすべり
本買って心豊かにたそがれる
お笑いの底のペーソスやるせない

米子市　田中亜弥

へその緒を切られてからの生きる道
強がりのくせに尻尾ふってくる
浮草よいちど目標もちたまえ
かくれんぼ勝っているのになぜ出ない
豊作で運び疲れたいいはなし

米子市　林荒介

隣から昼寝もさせぬ蟬時雨
山は秋萩の一朶と濡れている
夕顔の白を手繰っている浴衣
絵曼荼羅しばらく呼吸を整える
蓮の露今稜線に陽が昇る

京都市　松川杜的

墜落の夏忘れたように蟬しぐれ
負け戦だったがビデオはとってある
御先祖の声がしそうに蓮開く
雅号の方で郵便屋に覚えられ
過去形の話は少うし大げさに

高槻市　辻白渓子

二次会も続いて世話やき幹事する
石置いて生活のゆとりを見せる庭
励ましの言葉のけじめに手を握る
ジョギングをすすめる医者は走らない
阪神が負けてもスポーツ紙は売れる

京都市　都倉求芽

風の道風に舞ってる花の私語
汗流し今日も自分を欺さない
テレビの奴反論届かぬ距離守る
雷にも直情径行や思案型
ヒヨが来て雀の学校を追い散らす

仙台市　川村映輝

豊作を一夜の夢にした豪雨
医の進歩高額医療費がふえる
北方領土取り巻く海に魅力あり
妻の留守補聴器外して清々し
金儲けするにもやっぱり金が要る

大阪市　河井庸佑

石橋を叩いて儲けまた逃がす

先見える男にあった勘違い
まざまざと歩の根性を見せつける
気が付かぬ振りして気配り知っている
難問を解く鍵身近に落ちていた

大阪市　江城修史

ちぎれ雲君も暮しに疲れたか
ままならぬ浮世を器用に生きるひと
正確に時計が合うて腹が立ち
愛される老いでありたい踏台で
溜息を雨に聞かせる小商い

東大阪市　森下愛論

客帰った後の西瓜をぬるう食べ
風鈴のとこに風あり座をかえる
口だけは恐縮がって楽天家
胸算用して飲む酒は酔って来ず
運勢欄見てパチンコにまた出かけ

大阪市　黒田真砂

知らぬ間にリズム取ってるうれしい日
再開を約して雨の戎橋
未だ似合うもう似合わない派手な服
植え替えて花は知らない鳥の私語
ちっぽけな義理が果せぬ夏帽子

松江市　恒松叮紅

梅雨空に坂で別れた人を恋う
乱伐がたたって森の不整脈
ねだる子が居て茶の間まだ老けられず
みんなよく食べる子ばかり里帰り
説く事を忘れた袈裟の胸算用

松江市　柳楽鶴丸

神様が寸法間違えたダックスフンド
絵のない絵葉書には自分の絵を
日本語で洋食皿の割れる音
宝石で着飾る筆頭扶養家族
安心しています夫はブーメラン

松江市　舟木与根一

ロボットの均等法も急ぐなり
母の味ちゃんと持ってる冷や奴
笑うたときいっそ淋しい泣きぼくろ
制服の釦一個も隙見せぬ
坐り心地悪くて代理では酔えぬ

島根県　西村早苗

火に狂う蛾からいのちをおしえられ
しあわせをたしかめる日の風の向き
庄助といかぬが疲れとる朝湯
秋茄子のうまさを嫁が盛った皿
もう逢わぬ理性に負けたのは男

熊本市　有働芳仙

Lですねメジャー悲しいことを言う
黒猫と北極星を抱いて寝る
ワコールが浴衣の下で崩れてる
モノクロの半生古き良き時代
贋物が本物に見える応接間

東京都　増田次章

どこかにある落し穴健康も平和も
良いものは良いかたくなと言われても
無冠になってからいろいろ見えてくる
やるだけはやったという顔左遷地へ
言い訳がくどくどつづく許すまい

玉野市　小谷仙山

老いの坂自分の外はみな他人
コスモスにないしょ話はつつぬける
生きているただそれだけで肩がこり
どの花もみな散りぎわの風を待ち
馬鹿野郎とどなった方が三分負け

倉敷市　小幡里風

言葉尻大きな波にして別れ
くちなしの花の甘さに鼻を寄せ
さわやかにおむつが乾く蟬が鳴く
ひたむきの愛です妻と六十年
よく釣れて弁当食べる暇がない

寝屋川市　柴田英壬子

ウム美味しいグルメの旅の一つ言葉
考える頭は持たぬ柳葉魚です
熊ぜみの合唱大阪に樹がもどり
帰郷せぬ世代となって盆の街
九月まだ日焼けの位置が居坐って

倉敷市　稲田豊作

買い手のない高年層のエネルギー
序列あり頭もたげて叩かれる
ちょっぴりの黒字が心和ませる
たまさかの帰郷に妻は見栄多し
世の不幸ひとり背負うた顔でいる

大田市　藤田軒太楼

大仰な花火景色につながらず
電話ベルまさか裸と知らずまい
お人好嘘までどこかぎこちない
遺言ですと保証印を押さず
万歩計街も立秋のたたずまい

和歌山市　若宮武雄

それなりに楽しく遊ぶ空財布
一流のピエロの裏は哲学者
真夜中のしぶといベルへ立つ覚悟
冷やかに喝采うけているピエロ
奇術師の仕掛けを暴いてはならぬ

和歌山市　堀端三男

花言葉移り気だったとは知らず
夜逃げした章が光った立志伝
雑音も聞えぬ部屋で落ちつかぬ
当日になると言い訳ばかりする
帰省した子は一日も家に居ず

和歌山市　内芝登志代

天国にもいじめ居るのか流れ星
誰よりも亭主大事となる娘
好物を買って待ってる老母が居る

花咲けば咲いたで哀し忌が巡る
裏方が天職誇り持っている

和歌山市　松原寿子

逢える日の胸おおらかな海鳴りよ
赦されぬ約束をする秋の橋
愛の瞳に遮断機ふえてゆこうとも
あなたの橋渡れば火の粉ふるだろう
言い分が掟の壁につき当り

和歌山市　神平狂虎

メリーゴーランドの馬よ逃げ出すのは今だ
死ねば死んだで鳥も騒ぐ事だろう
街灯の下では詩人対詩人
港を離れて秋はだんだん深くなる
観世音菩薩よ花は散ったとて

奈良市　森田カズエ

マンションは嫌いよ高所恐怖症
自動ドアー時どき拗ねてみたくなる
マンションに住んで孤独に馴れました
丸髷もパンチパーマも似合う妻
看護婦の記憶を老母が離れない

鳥取県　林露杖

涼やかにヤンマが朝の風と来る
義理一つ果たして月の戻り道
均等法波長合わないまま夫婦
盆提灯みな柔かな灯が点り
炎天下燃えたつカンナ原爆忌

寝屋川市　江口度

古里に女の職場ばかり増え
くまぜみへフル回転の洗濯機
み仏と血を分かち合う灯をともす
旅先の花火この岩が丁度よい
忍耐力をつけて古里から帰る

鳥取市　森田熊生

各停の止まった駅でせみを聞く
ふるさとが近づいて来た秋の風
ライバルもほめてゆとりの汗を拭く
乾杯のビール戦果にこだわらず
アイスコーヒー氷をかんでまだねばり

下関市　石川侃流洞

オブラート本音は知らず喉を過ぎ
あこがれの都会は砂漠Uターン
補聴器はなくともかげ口なら聞え
二十一世紀孫へ憩いの樹を植える
真似だけを酌いでと妻のうれしい日

美祢市　安平次弘道

中学の子にシナリオを狂わされ
都市計画直線を引く机上論
感情論おんなに道理無視される
神話には妥協ができぬ尾骶骨
マネキンの裸わたしが恥かしい

鳥取市　両川洋々

雲よ雲俺の裏切り見ていたか

枕木をめくりゃ無念の血が匂い
のた打ってレール安楽死ができぬ
満員の夢で枕木今朝も覚め
枕木の意地だレールは錆させぬ

島根県　堀江正朗

闇無限眠くなるとき寝ればいい
オイッチニの速さとまどう足になり
ひとことの中に溢れている幸よ
もの想いほのかに匂うバラの花
手に触れる位置にいてさえ勘のずれ

島根県　榊原秀子

軽い趣味のつもりだんだん重くなり
石仏草のいきれをきく日照り
おかっぱの子と絵にしたいほたる草
逆らうてならぬならぬの糸紡ぐ
禁煙をして客へ灰皿出し忘れ

兵庫県　辻文平

道草が僕の血になり肉になる
愛されて一つが折れるバラの刺
父と子の尺度が合わぬ未来絵図
素朴なる民話を燻す自在鉤
小細工で隠せぬ老後がそこにある

浜田市　中川幸一

男の値打ち又下げる気の均等法
診断に病名もなくお齢です
焼酎もオールドパーもくだを巻く
政治家の春夏秋冬四月バカ
薄い髭生えた息子の親離れ

守口市　野呂右近

耳遠い人と判って腹立たず
無学だが曲った道は通らない
虫干の中に父居る母も居る
米二合炊いて味わう孤独感
弱虫になる分別があり過ぎて

西宮市　野呂鵜汀

忌の木魚庭に鬼灯花が咲く
哀れみをかけると人は弱くなり
愛欲しや庭に柘榴の実が割れる
袋路地宵待草が一人住み
学校に行かぬ目高と水澄まし

呉市　槇田英詩

補聴器で聞く喝采はさみしいね
両成敗相手も不足らしい顔
老母の掌は拝む相手に事欠かぬ
輪の中へ篩にかけた婿を入れ
うす紅で内気女を主張する

西宮市　林はつ絵

無人駅出るとわたしの海がある
若者に助けられては鐘を撞く
ある時はシャガールの絵と翔んでみる
王冠よ重い歴史が辛かろう
過去の灯に溺れてしまう星の使者

神戸市　山口美穂

カナカナの声山峡の湯にひたる
朝顔の微笑み今日も元気でと
朝顔へ咲いたお札の水をやる
涼風は亡父のみやげかうら盆会
自己主張して紙風船はたたかれる

大阪市　神夏磯道子

事なかれ主義で薬にもなれず
味付けの潮時を知る母の豆
思考力0で孫と気が揃う
パラソルをさして女をとり戻す
強者の宴お城の蟬しぐれ

富田林市　藤田泰子

賑わいが私一人を置き去りに
もう元に戻らぬつもり花氷
雑音に気が付いたのは覚めてから
短かさも月下美人に悔いはない
賑やかなうちに脱皮の準備など

松原市　佐藤藤子

炎天に五重の塔は寡黙なり
雑踏のかたすみにある仏壇屋
SLが走る私もはしらねば
ライバルに川の深さを教えられ
銀行の金魚はとてもフェミニスト

唐津市　仁部四郎

累卵を見下し朝陽また昇る
止まり木の向こうも嘘を温めてる
兵を引く潮時ですと倉庫番
ボーナス日養殖鯛の特売日
披露宴愚妻の足袋を探してる

唐津市　浜本久仁於

八月の暦が足りぬ子の課題
繋錨の基地で妥結のニュース聴く
ふる里を遠くに見せる雲の峰
旅人の衣にふれる草の風
産み分けへ親よりまさる子を願い

唐津市　田口虹汀

蟬時雨又碁敵が一人減り
孫の世辞聞きつつ作る肉団子
貰うたらやはり嬉しい暑気見舞
蠅をとる蜘蛛の呼吸をじっと見る
欲のない人は乗らない騙し舟

唐津市　久保正敏

万葉の不倫を語る相聞歌
止り木については来ないキューピット
騙されてだんだんふえる夜の酒
遮断機の向うにツケが笑ってる
また一つ内緒を買った紅珊瑚

高知県　松岡三吉

たかが豆腐なれど包丁みがかねば
知らん顔して蚊の一匹がまい戻り
グラビヤの裸婦悪しからずあしからず

八月の充電とろろ芋などいかが
双六の上りを知らぬお人好し　高知県　赤川菊野

竜馬展土佐の男の血を沸かす
内職がやりくり上手な妻にする
終章はどうあろうともマイペース
片えくぼ煮ても焼いても食えぬ女
マネキンのようにはゆかぬ試着室　守口市　羽原静歩

吉備団子ニューリーダーが犇めいて
沖縄の海に昭和の遺書がある
たとう紙に匂う亡母の子守歌
神前でゆっくりかえる紙おむつ
武士道を骨董品の中に見る　今治市　矢野佳雲

鬼の面被ると影が深くなる
餌付けした狸妻子を連れてくる
筆先を揃え生命の瞳を入れる
悩んでる顔は好かんと鏡いう
ケチだから知ってる物の有難味　大阪市　中西兼治郎

離婚していたと仲人後できき
帯結ぶ男の力先斗町
困りました助かりました梅雨のこと
連休の答を家計簿が答え
あちこちに人待つ姿戎橋　出雲市　園山多賀子

旅二句

京料理彩と器に涼を招ぶ
炎えるだけ炎えて若狭の太陽が尽きる
除湿器が心の鬱は吸わぬだろう
火中の栗拾う破目にもなる律義
あざみ咲く殺し文句を聞き捨てに　川西市　氏林洋敏

子はみんな妻につくから別れない
別荘のつもり連泊して帰り
ボーナスの本流妻に握られる
送り火の朝は秋の風になり
クーラーがないのを自慢にして暮らし　弘前市　田中叶

昼の月リハビリ中の父に似る
風鈴が鳴り霊魂が通り抜け
見合した教師についている綽名
いい月となり半鐘の上に来る
父病んで睾丸の見える時がある　高知県　曽我部裕

消し忘れテレビを妻に二度言われ
高倉健に妻の心を盗られそう
きざっぽい奴と鏡もそう思う
お役目にこだわり過ぎた孤独感
尾を振れば少しは楽になるのだが　八尾市　宮崎シマ子

朝顔も私も朝のうち元気
見る阿呆の娘も踊り出し阿波の夏
あの日あの時小さい恋の糸が切れ
打水に恋の余熱がおさまらぬ
泥舟に乗った息子へブイを投げ

和歌山市　寺田裕美

中流の錯覚で読む領収書
昼寝する足の裏から秋がくる
そっくりに撮っているのが気に入らず
水盗む同士が闇にいき当たり
蟬ほどに泣けばすっきりするものを

尼崎市　春城武庫坊

円高の風があたらぬ無料パス
炎天に影も凜々しくついて来る
蜩が鳴いて鳴いて喜ぶお地蔵さん
葬列の嗚咽に続く私語の群
夏雲の威容正しく原爆忌

豊中市　田中正坊

CTという名で脳味噌覗かれる
捨てる神拾う神あり粗大ゴミ
面倒な箱だと亀は知っている
つじつまが合いすぎるので勘ぐられ
マンションの八階終の栖とし

尼崎市　奥山美智子

わたしとはなにかをふいに問いかける
遠花火思い出したい人がいる
厄介な話を背負う床柱
やる気慨下手の横好きだってよい
ひとつ星あしたはきっと会えるだろう

岸和田市　島崎冨志子

円高で旅に出たがる夫が居て
大あくびうつして二人お茶にする
日曜は休息日ですゴロ寝する
入院は薬の副作用という不運
十万円金貨で思案の老い二人

堺市　藤井一二三

土に還る儚さ今日の蟬しぐれ
心経をあげ子としての盂蘭盆会
還暦を迎えて亡父の齢(歳)を繰る
野良犬の欠伸をほっとして眺め

東大阪市　斉藤三十四

退職の喉おしまれるお立酒
老人会野崎参りを唄にする
櫓太鼓河内娘は胸おどり
盆三日鬼の親子は昼寝する

鳥取県　清水一保

人間を責める蛍の貧しい灯
大の字に寝て気を晴らす兎小屋
僕の胃に敢闘賞をやる佳き日

東北平泉にて

中世の声此処かしこ金色堂

今治市　越智一水

路郎忌や籐椅子に深く深くかけ
路郎忌にただただ仰ぐ雲の峰
ほどほどのぜいたく茶の間の灯があかい
嫁った娘が茶の間で早も婿をほめ

寝屋川市　宮尾　あいき

夾竹桃真盛り夏も真盛り
立秋をちゃんと知ってる虫の声
お昼寝はしないかわりに朝寝する
金はおへん白髪と痛いとこが増え

名古屋市　越村　枯梢

天国という看板もありネオン街
美顔術なかなか美人にしてくれぬ
一本杉に似合うか知れぬベレー帽
鬼が出る蛇が出る壺を持て余す

笠岡市　松本　忠三

寝たきりへ空の青さも佗しかろ
公僕の欠伸大目で見てやろか
両親の墓にお詫びの盆帰省
日本列島どこへ逃げてもこの暑さ

竹原市　森井　菁居

夏休み後半ママの出番なり
万葉の心大事に過疎貧し
新人類掟を破るのが愉し
自信持つ限りかからぬプレッシャー

町田市　竹内　紫錆

子の代は電光板で選手名
外人に直された語句得々と
コンタクト入れ歯と洗い仕事欲
返信は来ず笑覧はしたらしい

岸和田市　福浦　勝晴

陽中天カンナは炎える無人駅
次郎長と忠治が嗤う暴力団
ワープロでゲテモノ食いのラブレター
爪を剪る古女房の丸い背な

岸和田市　古野　ひで

えも言えぬ肌の感触青畳
暑さにも寒さにも負け老いを知る
眠られぬ夜へ暴走が輪をかける
そのかみを偲ぶ春日の万灯会

岸和田市　原　さよ子

怪我の子へ遠く感じる診療所
ラーメンやパンを喜ぶ子を案じ
むきになり過ぎた自分が恥ずかしい

泉州高甲子園出場

泉州高郷土の期待しかと受け

岸和田市　清野　こう

教え説く僧がもめてる京の寺
帰る娘を見送る空に遠花火
越境の蔓に南瓜の実が熟れる
気のあせる親を尻目にまだ一人

岸和田市　芳地　狸村

仏壇のメロン熟れてる熱帯夜

ためらいをダイヤルだけが知っている
男下駄女ひとりの城守る
前立腺次はお前と言う義兄

大阪市　天正千梢

がむしゃらにはしり思わぬ壁に突当たり
毒気まんまん会社の生きじびき
「妻に勝てない」なんて言わないで
ゲーテーの詩集泥舟へ積み上げる

大阪市　本間満津子

遠い子へ大阪弁で手紙書く
人の世や有為転変の座りだこ
猫が居て金魚の鉢の置きどころ
忘れてた傘取りに行くもどり梅雨

大阪市　藤田頂留子

もう一寸下手といわずに惜しかった
シワのばし直せと自販機つきかえし
円高還元ダイヤモンドの値下げビラ
内職ではばを聞かせる銭単位

大阪市　北勝美

先生の素顔見ぬまま歯の治療
クーラーの冷で揉めてる老夫婦
万灯供養ローソク一つにある和み
見上げれば雲の流れに塔動く

大阪市　長谷川春蘭

色のない墨濃淡で色を見せ
狂い咲く花の気儘にある風情
御厚意に甘えお礼を言いそびれ
台風の気ままにあった海と山

米子市　石垣花子

花道でもう能面は脱ぎすてる
肩の凝る飾りはつけぬことに決め
人情にとってももろいへチマ棚
子に貸した肩の先から老いて来る

米子市　沢田千春

野仏もお盆はあそぶ花いちもんめ
何もかも流し出なおす朝の靴
明日の詩信じて花の種をまく
父母の恩想うて祈る蟬時雨

米子市　茂理高代

吊橋の水が奇麗で死にきれず
秋がくる少し冷たい風が好き
ビー玉が思い出そっとくれました
破れ太鼓根性だけの音で鳴る

橿原市　岩井本蔭棒

追風の中で不善を考える
名将の退く潮時を心得る
夫人には頭上らぬ疵をもち
圧勝へ謙虚になどと言やよし

京都市　山本規不風

人違いとは今更言えぬ深い仲
潮どきにやさしく絆を突き離す
生返事大人の話にして仕舞う

方角のよい病院が脳にある　富田林市　田形美緒

一日中短気の竿が鮒を待つ
賑やかな座にいて晴れぬ胃の痛み
賑やかな病室明日が見えている
泳ぐのが苦手な父の菊作り　大和高田市　岸本豊平次

初盆に笑って話せることもあり
自動巻の時計が止まった日曜日
友達に勉強中と母が言い
伝言板金釘流で会っている　姫路市　人見翠記

鳴戸大橋を渡り讃岐入り

鳴戸大橋渡れば異国にゆく如し
ふる里に近づく町の国訛り
ふる里の風吹き抜ける夏座敷
赤とんぼ故里をほめ風をほめ　箕面市　坪田紅葉

雨ながし犬を相手にひとり言
聞かすのはそこまで後は胸の奥
老いる事計算なしで今日も生き
虫干しでへそくりみつけて祝い酒　宝塚市　丸山よし津

外遊後妻の荷物を持つ夫
ローン残る家白蟻に蝕まれ
待つ人に噴水リズム崩さない

生き延びた身に極楽の余り風　高石市　浅野房子

一粒の真珠どん底を知っている
本心を軽くいなされうつになる
幾つ目の墓穴を掘るか子猫逝く
冗談が過ぎて空気が冷えてくる　大阪市　大塚節子

お七夜（二句）

抱きぐせがつくと言いつつ手を伸ばし
寝ついた子そっと一人抜け二人抜け
夕風に来年約す盆送り
頂上へ後三丁の長いこと　東大阪市　崎山美子

根も葉もない噂と知った泣き笑い
ふる里の妻子を想う夜店の灯
湯上りのビールの味を知らぬ下戸
甘党は下戸だと勝手に決められる　宇部市　平田実男

下書きのときは伸び伸びしてた筆
点滴と寿命根くらべが続く
焼酎が好きです値段には触れず
ハンケチの汚れ嬉しい子の育ち　河内長野市　井上喜酔

溺れると目先が見えぬ血のめぐり
公園の朝が楽しい鳩の私語
あっという心の隅に妻が居る

香水の色気へ負けぬ固い意志

岡山市　川端柳子

十人十色ひとりに言葉かけにくい
涙もろい男を許すサングラス
どなたかの目に触れていた野のすみれ
仏飯の丸さ嫁の座根を生やし

大阪市　坂口公子

平和の像信じて憩う鳩の群
天草五橋三つ四つは知らぬまま
旅に来て仲間に入る盆踊り
錯覚で或る日女は強くなる

島根県　堀江芳子

妻の座に均等法はいりません
訳もなく空しさ走る目のやりば
白桃の香り神棚からさがり
真実を見つめてくれる大茜

島根県　栂みどり

盆踊りよりそう浴衣の袖をひく
盆の月スイスイ仏間へ舞うとんぼ
四季とわず風邪を貰うも年のせい
中一になって途端に手こずらせ

島根県　石田清泉

キャリアリスト限界の紅をひく
足早い古稀が脳髄あわてさせ
楢山へ一人でゆける自彊術
花道の台詞ないまま古稀迎え

西条市　片上明水

お相手の酔いの度合にあわす酔い
二死満塁ここでヒットの打てぬ父
別々に財布は夫婦仕舞う場所
無為無策尻尾はだけど振っている

羽咋市　三宅ろ亭

久びさに曝書川雑も出して見る
路郎師の温情駆け出しの句も抜いて
素麺と西瓜の好きな客でよし
建前の家掛矢の音ととびの声

諫早市　原田メイシュン

父の日に頼もしい婿達の顔並ぶ
老人会植木屋がいつもひねくれる
三期四期の図太さ議席で居眠りし
花嫁が来てカーテンの色変り

福岡県　横地雅風

ぎこちないゲートボールの左利き
シートベルト歩行者防弾チョッキかな
飲めば出る意見の会場に酒がない
バス代の老人連れに暇どられ

浜田市　佐々木裕

触角の鋭さ男の武器とする
人間の弱さ仏典を暗誦す
世をすねるもとを正せば針の穴
指切りも遠い過去の反古となり

七尾市　松高秀峰

お世辞でもやっぱりうれし耳当たり
七人の敵なく貧乏神と住み
影法師踏んで坂道墓参り
叱られてマイク片手にひとり酔い　神戸市　仲　どんたく

野仏へ諸行無常の蟬時雨
中世のウェッディングを描く新人類
ピラミッド古代の声を熟成す
片減りの靴のピエロの父の像　羽曳野市　佐野白水

浮気女どのグループからも外される
強引にもろうた妻が夭逝し
日記帳去年を読んで今日を書き
朝顔をボッと見ている低血遅動型　桜井市　河合茂雄

ほどほどに酔えば極楽そこにある
逃げ道がそこにあるから昼寝する
どの亀も兎に勝ちそう亀の池
丸々と生きてる過疎のカブト虫　和泉市　西岡洛酔

心の火静めて女帯を締め
台所のリズムに母の詩があり
八月の祭りに夾竹桃が映え
民営化国鉄一家に分離劇　倉吉市　渡辺菩句

おちょぼ口して自己暗示かけている
老人性痴呆症になる暑さ
涼風に訳せない好い顔をする
と言うからこのからだ虫干しています　岡山市　井上柳五郎

クーラーも暑さも弱い齢となり
生返事へどうしますかと妻の語気
冷水を浴びせることも妻が言い
ノモンハンの死に残りだよ戦友(とも)は言う　岡山県　二宗吟平

金遣い株の噂が目に刺さる
砂遊びこの子よワルになりそうだ
良寛碑園児の笑顔Vサイン
ソーメン流しお不動様の味がする　岡山県　荻野鮫虎狼

病院へ入れば妻は別の顔
こっそりと日本へ帰る戻り梅雨
散髪をすれば何処かへ行く話
寝る頃になってピアノが鳴り始め　岡山県　岩道博友

ジョッキ持つ手が震えてる負け戦
旅をする話に円高触れてみる
盆送り川に流した変化球
台風の無策鼻毛でも切るか　岡山県　小林妻子

何喰わぬ顔で留守居の酒をくむ
的を射る矢は一本にしておこう

立話お迎えも来て座り込み
どっこいしょまぎれもなくて老人語
姫路市　大原葉香

夏の陽に広さを誇る寺の屋根
二度とない今日の日課をふみ外す
甲羅に似た穴を掘ろうよ年金者
ハガキより安い電話でする打算
八尾市　山下みつる

咲き初めは南にゆずる北の花
さからわぬ煙は風に流される
職安が相手にしない元部長
忙しい売店嬢へ鳴る電話
鳥取県　新家完司

人生がうつらうつらと過ぎてゆく
風景の隅でどぶ板ふみ外す
金で済む事でどうにもならぬこと
善という石をきっちり積み上げる
鳥取県　土橋蛍

入道雲よ俺は暑さに弱いんだ
敗戦の日はサングラスかけて出る
涼しさやただ雑草の花なれど
盆の月口笛で呼ぶ友がある
鳥取県　羽津川公乃

浮雲や唯我独尊大ジョッキ
枕木のリズム確かなブルートレイン
楢山のはだしに触れる土が病み

思い出もそれぞれ違う兄いもと
和歌山市　細川稚代

きっかけはどうあれ乗った泥の舟
夜に咲く花は哀しい運命持つ
一言が図星となってとじた貝
今ここで会えば叱言の二つ三つ
和歌山市　坂部紀久子

月のない夜に怯える月見草
それぞれの個性で食べるかき氷
焼く役に回ってしまったバーベキュー
氏神もカラオケ聞かされ夏祭り
和歌山市　山川克子

ライバルに勝つ事だけが目的か
惚気にもならん別れた人の事
心眼が開いて女はもう泣かぬ
約束の場所に来たのは別の人
寝屋川市　平松かすみ

工場見学
説明は世界一です社のレンジ
人間もロボット並に手が動き
炎天日濡れているのは鹿の鼻
息とめて掛けているのは鍵ホック
出雲市　吉岡きみえ

秋風に塩辛うまい酒美味い
振り向かぬ風にわたしは恋い焦がれ
ドーランをぬってこの世の坂急ぐ

やさしさは月の雫に繻れながら　大阪市　吐田公一

愚痴一つ聞いたことない父の汗
鍋釜の一つ一つに母の影
決心がついたら条件変り出し
気心の知れた相手と旅の風

米子市　金山夕子

未練捨てこころは軽い鳩時計
月見草夜を摑んで化粧する
八月の声の重みと流れゆく
百の橋明るい顔で逢いにゆく

米子市　光井玲子

夕ぐれて耳の小箱が空になる
歩道橋わたし一人が歩いてる
時刻表通りの汽車に乗って出る
しがらみもみんな許した川の音

姫路市　丁坪サワ子

奉仕品のちらしが好きなお国柄
母となる娘に語り継ぐ母の詩
寒暖に堪えて六十路の小商い
三、四軒医院巡りで長寿です

境港市　細木歳栄

うきうきと畳む単衣のいとおしや
失ったものが尊く見える今
古日記命をかけた恋の殻
今日も雨いっそすべてを流しちゃえ

幕引きが昼寝している生きている　島根県　松本はるみ

夫の背にくすぐったいこと言おうかな
自在鉤理屈も言わずぶら下り
笹舟を流した川がみつからぬ

堺市　柿花紀美女

ふる里の老いた従姉に会いに行く
中二階の家並が続く郷の家
遠花火小さな後悔ふと思う
新学期我が家のリズム取り戻す

出雲市　石倉芙佐子

帽子掛け一度は送って見たい人
わたくしを一人で帰す三日月よ
玄関ですまし顔する木の根っ子
女は無口野分けの風が吹いてから

西宮市　西口いわゑ

くどき方下手だったのでついて来た
下手ながらあなたのセーター編んでます
厄介をかけずに逝った亡母の足袋
また逢う日待てず手紙を書いている

松原市　小池しげお

海賊船奪ったもので沈みかけ
サンダルにしても京都の暑い夏
ふとスリへ駅の便所の勾うこと
厄介な話へ蟬が泣き止まず

富田林市　片岡智恵子

許す気は無いのに溶けてゆく氷
洗濯の泡の多さを信じ切る
鍋底を洗うて罪をひとつ消す
美辞麗句ならべ心は宙に浮き

高槻市　竹内花代子

ミニが好き亡夫に似て来た私も
さぎ草が盛夏見舞に咲いてくれ
環境良それでもやっぱし錠をかけ
半丁のやっこで老母と朝の膳

島根県　松本文子

美しきもの失いし老いたりし
責任半分戸主の子に移す
空の青阿呆はこんな色かとも
キッチンと言えば輝く台所

大阪市　古川美津枝

道づれが粋だとすずめかしましい
おもろいことこっちがききとおまんがな
留守番を仏にたのみ珈琲館
又しても例の話をききたがり

岡山市　行吉照路

呆けられぬ六十路ワープロたたいてる
三振に二度の職場は冷たい眼
歯車は妻の時計に合わしとき

兵庫県　中田白李

先々は一人で暮らすと妻が言う
宝くじはずれをせめて枝折にし
葬儀社のマイクに泣き声入らない

姫路市　松浦輝月

波に乗った人生だったデスマスク
バーのママの素顔を男知ってるか
腕組んで歩きたかったと墓に言う

神戸市　山片紀雄

ここで拍手強要されて式おわる
乗る人があるのではずむ口車
関白の糸ひく妻が裏に居る

鳥取県　金川満春

山へ来て邪念を払う滝に会う
遠花火手繰る遙かな日の記憶
温泉の旅で少し脱線したくなる

大阪市　塩田新一郎

足らない方が良いされど足らなすぎ
差別して暑中見舞と年賀状
金持は一番あとで声が出る

豊中市　上田登志実

争いの埒外に居て鐘を撞く
病床で祭ばやしを遠く聞く
誘われて爺婆も行くキャンプ村

出雲市　板垣夢酔

噛まれると思ってた犬に尾を振られ
小鳥鳴く雨が上がったよと知らす

程ほどの程に迷った二日酔　羽曳野市　中村優

終電の尾灯に淡い罪一つ
だんじりの太鼓に稲穂波を立て
どん臭い男で亀がとても好き　倉敷市　藤井春日

ひたすらに人生汚さず生きる老い
咲き映えもせず一隅に枯れる身ぞ
豊かなる自然を愛でて湯治客　羽曳野市　田中隆二

気がつけば母とおんなじことを言い
確実に定年の日がやってくる
わらび餅母の童話がまだ続く　兵庫県　藤後実男

栄転の切符で友と梯子酒
楢山へ片道切符が濡れている
もう一本追加してから愚痴がもれ　大阪市　寺井東雲

此の膳に祖母にも箸を持たせたい
有段者と知らずに挑む平手戦
天職という一つ覚えとも言う　和歌山市　玉井豊太

跳び飽きた蛙が戻る古い池
焼け石に承知の友へ今の水
落し穴に男がかかるウイスキー

病床の気儘も想い出盂蘭盆会　川西市　松本ただし

姿見の自分に甘えが少しある
嘘少し混ぜると話盛り上る　芦屋市　竹中綾珠

顔色を読んで口数減らしとく
高校野球茶の間のクーラーよく効いて
炎天の応援席も勝つかまえ　鳥取県　広本文子

人形師の指から落ちてくる情
糸車なんど回せば母になる
衝撃をかくす術ない手の震え　大阪市　渡部さと美

鐘が鳴る一つの悔いの背なに鳴る
試着室私以外は皆似合う
夏がゆくカラリと短かい恋を捨て　交野市　山本テルミ

夏休み泣き声笑い声しかる声
風鈴の詩情を捨てぬ母の部屋
ヘソクリを猫が見ていたかくし場所　和歌山市　後藤正子

小さい秋へ生きる思案をまとめよう
答ひとつ絵になることもない明日
合せ鏡におんなを写す母はおんな　富田林市　松本今日子

捨てるまでふた思案もいる戦中派
日進月歩あなたも私も中年に
想い出はみんなつめ込むみかん箱
倉吉市　淡路ゆり子

妥協する小さな骨の折れる音
一線を退いて虚ろな日々昏れる
楢山の行く先ざきの水呑み場
島根県　北川民子

蘭の鉢割ったを見ていた昼の月
嫁った娘を憶い金魚を買い足しぬ
梅漬けの重石ごときにあなどられ
寝屋川市　岸野あやめ

単身赴任せっせと通うお茶漬屋
紫蘇茶漬遊び尽くした果てという
ツインビル入道雲の大壁画
大阪市　町田達子

お賽銭はずみひと時善女振る
盛り上る積乱雲にふと悪夢
楽器持つ秘仏にまみえる花の寺
吹田市　茂見よ志子

盆休み厨ペチャクチャ活気づき
逝く夏に虫籠残し孫は去ぬ
待つことに慣らされ慣れて一人箸
寝屋川市　堀江光子

傘のうち人考える顔に見え
達筆の伝言みなが読んでゆく
母のもの着ると弱音が消えてゆく
大阪市　坂本仙吉郎

中国路、四国の旅

瀬戸内に昔話の鬼ヶ島
早朝に着いて町はまだ眠り
豊中市　奥田満女

エレベーター働き通しだまってる
大きな耳くそこれも私の一部分
島根県　藤原鈴江

涼風が萩をこぼした露の朝
さわやかな風にまかせる洗い髪
鳥取県　さえきやえ

マネキンが早目に秋を着て見せる
広がった噂がもどる秋の風
大阪市　北山悟郎

鉢巻きが団結の輪に血が通い
剣難の相有り外科のメス幾度か
吹田市　園田文子

白い杖先に通して無事祈る
追いかけて石焼芋の秋の暮
岡山県　直原七面山

雪蹴って蹴って労働歌を歌い
刻々と碧さを増してゆく湖底

自選集

平均寿命わたしもやっと越しました
これからは儲けのいのち長らえん
うれいなく余生を生きるだけの欲
齢並の健康あれば欲言わぬ
新人類のこころは理解出来ぬ齢

金井文秋

鏡台と私も共に年を取り
老母ふと修羅越えて来た過去にふれ
悲しみの深さは親子だけが知る
お百度の一歩一歩にある願い
生きてゆく大地しっかと蟻の視野

藤村〆女

十月に採れる西瓜はトルマリン
西瓜食う席へ団扇で招かれる
冷房の汗は団扇の力借り
病院へ来てから時計急がない
苦しみが減ると哀しみ増すベッド

川口弘生

妥協せぬ自分が許せなくなってくる
軽いジョークで後姿を見送ろう
口閉じて独り相撲を意識する
止り木で疲れた顔は見せられぬ
以下同文聞き流すことに馴れている

正本水客

子の夢を広げる積木高く積む
倦怠期そんな小波にゆさぶられ
こけし買うお金ポシェットから拾う
雑草の意地は真夏に根を広げ
雲低くたれて決断さまたげる

小林由多香

叱られるたびになついてくる小猫
女ひとり男一人なんでもない話
恋しゅうていつも連絡船を追う
万札をこまかく折ってくれる祖母
二番目に手強い奴が走ってる

黒川紫香

紙カブト位で父は酒が好き
巣作りの妻勲章は欲しがらぬ
父は大樹追い越す坂は深い霧
この辺で妥協めがねを拭く男
一枚の割符愛たりにぎりしめ

市川鈴魚

老友と立板に水流し合い
見解の相違をビールに溶かしあい
以心伝心金婚なればこその味
郷愁の心の壁に亡母を描く
余生街道心ゆたかに漫歩する

本田恵二朗

三分の一で生き抜いている悩み
幸せはとことんもっと信じ合い
今更に欲など捨てて居る生活
それぞれの悩みを持った歳のこと
気短になるから歳かなと思い

児島与呂志

原水禁　原水協を核嗤い
歯ぎしりの音が靖国から聞え
初恋の人に白髪をほめられる
薄幸の佳人と聞けば尚愛し
タラバ蟹君とは握手出来んワイ

工藤甲吉

倖せの絶頂核がふと怖い
秘書さえも知らぬ祝電から披露
男の子産んで先取点とする
玉音もひと節聞かす終戦日
泣かすため書いた弔辞へ泣いてくれ

大矢十郎

惜しい人耳朶に深々と星が降る
満天の星に咽び泣くうろたえて
脆く崩れて男一匹自嘲する
したたかに生きねばならぬ数珠を繰り
ずっしり応える一言はもう聞けぬ

野村太茂津

国会のいじめは予算委員会
国鉄の売物人材資材不動産
標札の文字は立派な兎小屋
対策を坐り直して碁に向う
まつ毛だけは男の中の男なり

長野文庫

くさっても鯛本陣は手離せぬ
ちょっと休暇孫と人形や花かいて
川柳の本が本屋で見あたらぬ
惜しまれる内にまだ出る太い声
花道をいまなら六方踏めそうで

山内静水

盆の灯へ面影ゆらゆら笑みかける（故木村はじめ氏新盆）
神は二物あたえず健康でしあわせ
敬老日の案内が来て出席を迷っている
子や孫と別れが早い盆踊り
秋が来るとこころの疲れひとを恋う

藤井明朗

影ふたつひとつに洗う波の花
ゆうすげのあしたのさだめ黄にうるむ
分け合えるお茶に尽きせぬものがたり
つつがない今日へ朝顔咲き揃い
雷へ脱ぎっ放しの臍を追い

水粉千翁

前髪もかすかにゆれて思春期か
噂くらいへっちゃら男の道を行く
久々の帰郷きれいな天の川
裏のない話長屋はいつも春
とめられた酒おずおずと止められる

米澤暁明

かみなりを連れて大雨戻り梅雨
組閣なるいい人許りだなと思う
甲子園球児を守る青い空
抱かれた猫へ犬ははらはら気を使い
飼い犬の行儀御主人恐いから

高橋操子

空の深さへ心あずけている一樹
櫓から踊りじょうずを見くらべる
秋の足あとは湖水になりやすい
てのひらの海とあそんで船に乗る
一行にしても私の書きおろし

八木千代

夫婦にも黄門さんの来る時間
お彼岸が来たら涼しくしてあげる
母の老い庇うカーテン替えている
座りだこようやく弟子にしてもらう
ガード添いに歩くと秋が伴いてくる

小出智子

満腹が押してしまっためくら判
路地裏は年中喜劇の幕が開き
螺旋階段ドラマめいてる靴の音
空缶の音で良心捨ててゆく
シグナルの赤へ咄嗟に気が変り

月原宵明

川柳太平記（101）

川柳の群像

佐藤冬児

東野大八

○冬のばら兇器の如く横たわる　冬　児

この「冬のばら」とは、私の臥たきりの状態や生活の状況。またその思想感情などを、比喩暗喩象徴した言葉であり、文学的表現である。一般的に冬のばらには花がない。棘だらけの姿で寒風に吹きさらされているか、雪の中に埋没しているかである。しかし季節がくれば馥郁とした香りと美しい花をつける。この「冬のばら」の句は、いまでは私のトレードマークとして川柳界では通っている。

○半世紀　人間の襤褸　冬のばら　冬　児

私の臥床生活はすでに半世紀を超えた。持病の一つである膀胱炎結石と共存しながら、昭和四十六年に提訴した在宅投票制度廃止の違憲訴訟。この、国を相手の裁判に対する最高裁の判決を待っている処である。まるで廃朽った丸太の如くベッドに投げ出されている私は、もはや余命いくばくの感であるが、体力・気力・文章力をふりしぼり、在宅投票の主な訴訟記録に添えて、拙ない手記を綴ってみようという次第である―。

右は「冬のばらは棘だらけ（自叙伝）佐藤冬児著」（札幌市・アカシヤ会本部叢書第3巻・昭和60年刊）の書き出しである。

本名佐藤享如。明治45年1月山形県飽海郡北俣村に生れたが、自作と小作合わせて七反歩ばかりの水呑み百姓だった。父母は小樽に働きに出ていて、家は曽祖母と祖父と二人の叔父と一人の叔母（元芸妓）、享如と兄や妹の八人暮し。叔父の一人は気がふれて座敷牢に入っていた。一家は年貢を収めた後の飯米を売って、南京米にイモや菜っ葉を入れた「かてめし」を食う暮しだった。

高等科一年十二歳の折、製麺業をやっている小樽の父母の許に引とられ、家業を手伝っていた冬児は、昭和6年3月屋根の雪下ろし中に誤って転落した。〝呪われた十九の春〟だったと冬児は述懐している。

「猿は木から落ちても猿だという。私は屋根から落ちてモルモットになった」

○手術台生命の限りモルモット　冬　児

この事故から脊髄腫瘍に侵され、七十三歳で死去するまでの五十四年間、半身不随の重度障害者としてベッドに呻吟する身となった。

冬児が川柳とのかかわりは、ベッドで聴いていたラジオ川柳と当時の大衆娯楽雑誌「キング」や「日の出」の文芸欄に「退屈しのぎと若干のすけべえ根性で詩と川柳を投稿してみた。詩は殆んど空振りだったが、川柳の方は時々活字になり、賞品の書籍をもらった」のが縁になった。

彼のながいベッド生活の慰めは、川柳と擦筆画で、この画の方はみる間に上達し、他人の肖像画を描いてお心づけを頂くようになったが、このことが図らずも冬児の人生に春を

招きよせたのである。

○臥たっきりこれこそ奇跡嫁がくる　冬　児

嫁の話の橋渡しは天理教布教師のTさんだった。その花嫁候補の女性の名はハツ。十四歳の折、母を亡くし父や男兄弟の一家を切り盛りしてきたしっかり者であったが、彼女は少女の頃、高熱で足腰が立たなくなり約三年間寝た切りの生活をした経験があるという。その折から絵に親しんで相当の腕だという。以上のことが冬児と結びつけたのである。

昭和16年1月「私たちは極めて簡素な結婚式を挙げた。私が二十九歳、彼女は二十五歳であった」夫婦の交りもできないこの新婚夫婦を人々はどんな想いと眼を、この二人にそそいでいたことであろうか。

冬児の兄や弟二人は、いずれも南方戦線で戦死した。兄がガダルカナルで戦死した時

○天も哭けガダルカナルの兵猛し　冬　児

の「天も哭け」が特高が問題にして調べられた。この悲愴感が怪しからんというのである。しかし先輩柳人のとりなしでコトなきを得た。「こんな戦争は負けだと思った」

冬児が佐藤享如の名で、重度身障者の在宅投票制度に関する訴訟を札幌地裁小樽支部に起したのは昭和46年6月であった。この訴えは立件上、選挙権侵害賠償請求事件の形をとったため、一票を金にするためだろう、とのイヤがらせもうけたが、全国重度身障者四百万の人々から熱い期待の視線を浴びた。

この問題提起の大きな反響は、政府を動かし、49年春「郵便による在宅投票制度」の部分復活をみたため、一審においては全面勝訴となったが国側はこれを不服として上告。その判決が53年5月札幌地裁から「選挙権は憲法上国民の有する最も基本的な権利である。投票の機会の保証もこれに含まれ、投票所に行けない在宅身障者らの関係で選挙権を侵害しており違法だ。然しそのような違憲状態が生じることを当時の国会議員はあらかじめ知り得なかったから、国会議員に故意、過失はなかった」という内容の言い渡しであった。

これに対し冬児らは「違憲状態をはっきり認定しておきながら、国会の過失を認めないのは不当だ」と53年6月最高裁へ上告した。

○在宅裁判最高裁で棚ざらし　冬　児

提訴して14年、最高裁に上告して七年。

○最高裁おれの死ぬのを待っている　冬　児

この句を最後に、冬児は昭和60年4月2日死去した。享年七三。

まさに冬児の死を待っていたように、60年11月21日最高裁から原告の上告を棄却する旨の言い渡しがあった。NHKテレビで、このニュースが流され、ベッド上の故冬児のワンカットが映し出されたが、筆者にはその顔はこころなしか泣いているように見えた。

冬児は昭和10年川柳に入門してから、小樽川柳社が創立以来の「川柳こなゆき」に欠かさず投稿。札幌の身障者アカシア本部機関誌に時局批判論文や時事吟の投稿をはじめ、東京の川柳研究など各柳誌に主として時事吟を主力に作品を発表し続けた。このため川上三太郎も渡道の際、小樽の病院まで冬児を見舞っている。

こうした活発な川柳活動により、死の前年の昭和59年〝北海道川柳連盟功労章〟が贈られているが、冬児の自叙伝「冬のばらは棘だらけ」は、冬児の死と一足ちがいで間にあわなかった。しかし「佐藤冬児作品集・川柳冬のばら」は遺されている。

○ふるさとも月も遠きにありてこそ　冬　児

の句が両親と夫人の父の墓に刻まれて残っている。

★次回は「吉田機司」

誹風柳多留廿六篇研究（二十七丁）

石田晋一・南　得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木　黄・多田　光
故岡田　甫

460　**餅花を買にやらせて飯を喰**

石田晋＝目黒不動縁日に行った証拠の餅花を若いものに買いにやらせて、品川の飯盛女郎のもとにしけこむ意。

餅花は承知〳〵と若いもの　拾八18

八木＝「飯を食う」で「飯盛を買う」をあらわす。

鈴木＝賛。「飯を喰う」は洒落た表現である。

多田＝賛。**岡田**＝同。

461　**信玄と道鬼相求めに軍師**

石田晋＝武田信玄とその軍師道鬼入道山本勘助晴行。二人は気が合い互いに親しんだという。同気相求む（易経、乾文言伝九五）と勘助の道鬼との秀句。

信玄の武勇に道鬼相求め　宝二義2

多田＝賛。石田さんの解の中に「秀句」とありますが、これなども一般にはわからない言葉になってしまいました。

岡田＝同。

462　**片乳房握るが欲の出来はじめ**

石田晋＝句解は必要ないと思うが、実景を川柳的に見ているもの。

南＝この句、湖月点にあり、また、

片乳ぶさにぎるが欲のはつ霞　雲鼓選享保十四

片乳ぶさにぎるが欲の初桜　季岐撰延享四

までさかのぼって見える。

多田＝賛。**岡田**＝同。

463　**郭公聞〳〵二人リ討に行**

石田晋＝ほととぎすの季節は夏。夏の敵討は建久四年五月二十八日工藤祐経を討った曽我兄弟のもの。但し、雨が降っていて時鳥は鳴くものかどうか。

この降りじゃ明日も休みと工藤寝る

安四亀1

多田＝賛。季節物との組合せ。**岡田**＝同。

464 **ぬけて出る啌を息子ハ工風する**

石田晋＝放蕩息子の抜け出す口実は、

へェけェに行くとむすこハ内を出る　拾四22

謡本親父を化かす道具なり　安四礼

四人リで土手をくるのハまりくづれ　一七15

その他、神仏・伊勢講・葬礼等々あろう。**南**＝賛。工風することといえば、いかに親をたぶらかして家を抜けでるかということのみ、他の苦労は知らないどら息子。**多田**＝賛。**岡田**＝同。

465 **藪にも功の者明智をころし**

石田晋＝天正十年六月本能寺の変後、山崎で敗れた明智光秀、小栗栖で竹藪の中よりの土民の竹槍の傷にて死。

せめて藪からほうなれハ落ちのびる　安四亀2

鎗の出た藪ハ小栗栖ばかり也　拾四27

藪にも功の者（野巫にも功の者、野夫にも功者あり、藪にも剛の者、藪にも香のもの等）その出所は明確ではないが、馬鹿にしていた中に、案外役に立つものがまじっているの意で、ここでは小栗栖の竹藪をかけてある。**多田**＝賛。**岡田**＝同。

二十八丁

466 **毛を剃るととんだ大キな物に見へ**

南＝性毛を剃ると、かくれていた性器の全貌があらわれて、意外に大きく見えるとのこと。男女いずれの場合にもいえる句で、作者の実感であろう。毛を剃るのは、川柳では蔦虱の場合が多く、本句もそう限定してよいと思う。**石田成**＝江戸時代に、妙薬有りや御教示下さい。**八木**＝江戸期には特効薬はなかったのではなかろうか。**多田**＝賛。**岡田**＝江戸時代の特効薬知らず。読んだ記憶なし。

467 **下女が部屋大一座とはむごひ事**

南＝「大一座」とは、集会その他の崩れに打ち連れて遊所へ繰込む大勢の客のこと。川柳ではそうした句が多いのですが、首題句の場合は単に多人数の一座という程の意と思います。

「むごひ事」とありますから、無理矢理に下女の部屋を多人数で襲って犯すのでしょう。

しゃうちせぬ下女どこぞでハ大一座　二三42

鈴木＝賛。実際にはこんな馬鹿な話はないんでしょうけれど……。**多田**＝賛。**岡田**＝同。

468 **旅の留守別条たった一ッあり**

南＝主人が旅に出ての留守中、別段変った所が見えないのだが、たった一つ変った事がある。それは留守中に女房が、間夫を引き入れていたというのが川柳ではおきまり。

旅のるす何をしようとままな事　一〇8

旅のるす間男の外子細なし　三九5

まおとこの外に留守中別義なし　一四3

小野＝亭主にとっての一大事を軽く詠んだ所に句の面白味があるような気がする。

もっとしたがるはづだがと旅帰り　末四19

多田＝賛。**岡田**＝同。

61年度路郎賞

聞かせとこ
九官鳥が喋るから

堺市　高橋　千万子

高橋千万子　柳歴
川柳を始めて二十五年。
川柳塔同人
「川柳堺」同人

路郎賞候補作品

正本水客

追いぬいた分だけ敵が多くなる　宮西　弥生
すぐ寝つく妻よお前は幸せか　塩満　敏
風呂敷へ米を包むと円くなり　片上　明水
日の当たる道が続いてゆく怖さ　奥田みつ子
夏帽子川に流れて嬉しそう　落合　正江
ひたすらに歩いて川に突き当る　福本　英子
不器用に生きればもっと楽なのに　高杉　鬼遊

〈準推薦句〉

二人居るから喧嘩まだ出来る　菅井とも子
いのちふたつあれば悪人にもなろう　小島　蘭幸

〈推薦句〉

愛すると聞いた気がする風の中　春城　年代

黒川紫香

モナリザの向いの席にいる苦痛　林　はつ絵
困らせる手紙ばかりを書いている　榊原　秀子
ひたすらに歩いて川に突当る　福本　英子
勝負勝負と妻が花札出してくる　小島　蘭幸
友達になりたい人が敵にいる　西口いわゑ

路郎賞準優秀作第一席

月の砂漠を妻と歌ったことがない

弘前市　波多野　五楽庵

路郎賞準優秀作第二席

裏切りの話はしない手話仲間

高槻市　辻　白渓子

真夜中に鉛筆一本尖らせる　光井　玲子
窃して山は悩みを吐くところ　林　瑞枝

〈準推薦句〉

ボタン一つ取れたぐらいの人が好き　鈴木　節子
次女の背が伸びて長女の服を買う　久保　正敏

〈推薦句〉

聞かせとこ九官鳥が喋るから　高橋千万子

橘　高　薫　風

レントゲン我が酒ガメの偉なるかな　工藤　甲吉
旦那のお尻たたくに手頃のしゃもじ買う　宮尾あいき
口笛で自分を呼んで見てごらん　神平　狂虎
老妻と同性愛になりました　土居　耕花
離婚したのにも一枚おめでとう　山根いつを
裸木の一つが火柱に見えた　八木　千代
フィクションとノンフィクションのはざまに
妻　柳楽　鶴丸
禅寺を禅寺にする石の道　松川　杜的
これこそはロマン人体解剖図　谷垣　史好

〈推薦句〉

月の砂漠を妻と歌ったことがない　波多野五楽庵

◇推薦のことば

川柳の大切な味のユーモア、社会批判の作品が、数と質の点で稀薄になって来たので、ここ数年、推薦句にその味を強調して来た。

だが今回は平明さを推すことにした。この句、平明の中に川柳的屈折を備え、乾いたユーモアを感得する。

野　村　太茂津

友達になりたい人が敵にいる　西口いわゑ
雑踏にまぎれて妻と手をつなぎ　河内　天笑
初恋の女を忘れるほどに呆け　原　独仙
妻の手に夢も命もまかせきる　牛尾　緑良
雨が降るから赤い花束買ってくる
春城武庫坊
弁当に無理な愛情詰めてある　樫谷　寿馬
掌の痛みわかってくれるまで叩く　寺田　裕美
弔いの鉦を迂闊に七拍子　土居　耕花
こんにゃくの馬鹿正直は生れつき　谷垣　史好

〈推薦句〉

受け流すための台詞がととのわぬ　西山　幸

西　田　柳宏子

泣き笑い笑いの方が悲しくて　福本　英子
仏にも鬼にもなれず米をとぐ　赤川　菊野
月の砂漠を妻と歌ったことがない
波多野五楽庵
土曜日はギョーザが好きな共稼ぎ　小池しげお
好きずきに生きて近道まわり道　藤田頂留子
だまし舟母は何ども乗ってやる　丸山よし津
聞かせとこ九官鳥が喋るから　高橋千万子
ほほえみをひとつ明日のため残す
牛尾　緑良
天に星地に花わたしに五人の子　嘉数兆代賀

〈推薦句〉

裏切りの話はしない手話仲間　辻　白渓子

喜びの言葉

高　橋　千　万　子

今まで何回か巻頭にのせていただき、それで満足しておりました。この度思いもよらぬ路郎賞をいただき、びっくりいたしました。ただうれしく感激で胸が一ぱいです。川柳をつづけ沢山の柳友が出来、本当によかったのひと言です。

先生方や先輩の皆さんのおかげと感謝いたしております。ありがとうございました。

鶴の瞑想
或は人より深からん

熊本市　永田　俊子

永田俊子　柳歴
昭和二十八年より熊本川柳研究会に加入。熊大教授田中辰二先生及び美喜子先生に師事。昭和五十八年十一月川柳塔に加入。

川柳塔賞候補作品

板尾　岳人

花屋まで情を買いに行く女　千原　理恵
遮断機がゆっくり降りて長い冬　赤木　和子
凧の糸切れてかすれる子守唄　舟渡　杏花
嘘一つ作ってのぼる縄ばしご　山本　玉恵
投げられぬ小石をひとつ持ち歩く　清水　康恵
死後のことながが語る昼の月　高杉　千歩
ロボットにお伽噺を教えとく　森脇　和子
木の芽和えしばらく母に会っていず　福田　礼子

小出　智子

定退のどの服着てもみな軽い　八塚三五島
まだ直しますかと靴屋念を押し　山田　宝保
父の日がこそばかゆくて酒に酔い　青柳　金吾
本当の話へ誰も寄って来ず　高杉　千歩
行商の老婆に桜美しい　秋田　茂
出稼ぎが帰り白鳥落ち着かず　斎藤　劦
子がくれた風邪がなかなか治らない　赤木　和子

〈準推薦句〉
寡黙なる大樹の下の思いやり　桜沢あか里

〈推薦句〉
鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子

川柳塔賞準優秀作第一席

投げられぬ小石をひとつ持ち歩く

大阪市　清水　康恵

川柳塔賞準優秀作第二席

寡黙なる大樹の下の思いやり

堺市　桜沢　あか里

何時来ても特別防犯期間中　福元みのる
徹夜して二倍生きてる訳でなし　福田　礼子

〈推薦句〉

うゐのおくやま越えて来ました坐りだこ　永田　俊子

谷垣史好

私の話聞いてきいてと水中花　野村　京子
解決になってはいない一人の死　田中　叶
河鹿鳴くと男は離婚考える　鶴久百万両
冬花火まさかの時を話し合う　田中　晴子

二賞雑感

西尾　栞

昨年の二賞は男女と仲良く分け合うたが、又々今年は一昨年同様、女性軍の獲得するところとなった。路郎賞の高橋千万子さんは、堺でこの人ありと知られた好作家で、受賞は遅きに失した感なきにしもあらずである。彼女は切絵も上手で塔社の部屋に二つの額があげられている。

川柳塔賞の永田俊子さんの句は、五人の選者のうち三人まで最優秀作として推薦し、候補作品の時は四人の選者の選に入った文句なしの立派な句であった。およろこび申上げる。おめでとう。

拠り所欲しいと思うぼたん雪　桜井　千秀
昔読んだ本を見ている冬の夜　森川まさお
王朝の崩れる音をしかと聴く　河瀬　芳子
敵に塩　天地無用の函に入れ　吉川　寿美
寡黙なる大樹の下の思いやり　桜沢あか里

〈推薦句〉

鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子

高杉鬼遊

喜びも悲しみも又菊の花　安田　志津
一人になった時の二人のはなし　高尾よし子
ならば今狂気の沙汰を見せましょう　赤木　和子
夜の川真暗がりの音を立て　植村　喜代
樹から落ちても猿は猿だと主張する　藤井　高子
爪切っただけで体が軽くなる　福士　トキ
人の上に人をつくったお立ち台　鈴木　良征
我が家にも英霊在わす神ならず　高杉　千歩
六尺の高さに母は背負われる　太田　幸枝

〈推薦句〉

鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子

河内天笑

男女同権パパにお乳は出ませぬが　乾　喜与志
嫁が来てサラダオイルの減る早さ　矢倉　五月
爪切っただけで体が軽くなる　福士　トキ

永田俊子

この度は思いがけなくも川柳塔賞を受賞させて頂きますこと身に余る光栄で一地方の未熟者の私のことを思いますと全く幸運なことでして、諸先生方のお蔭と心から感謝申し上げます。御縁がありまして御社に加入させて頂き先生方のお優しいお便りや御指導を頂きまして川柳につながる幸せをかみしめております。どうか今後ともよろしく御指導下さいますようにお願い申し上げます。

本当にありがとうございました。

坊さんがホルモン屋から出ていった　土橋はるお
冬の寺赤いヒールが脱いである　福田　礼子
スーパーで逢う先生はママの顔　灘尾　民子
浪曲が好きやなんてと酌いでくれ　山本　半銭
情熱をかけたピアーが邪魔になり　木村貴代子

〈準推薦句〉

年金の首に手頃なループタイ　吉永伊三郎

〈推薦句〉

投げられぬ小石をひとつ持ち歩く　清水　康恵

黒川紫香選

尼崎市　田中晴子

疵痕が消える十月の雨の音
考えが甘かったかな秋の風
いわくある握手をさりげなくはずす
ささやかな抵抗発言いたしません
流れ星秘めた願いがあったのに

藤井寺市　赤木和子

かばってくれる人が後ろの正面に
人が集まるとピラミッドができる
つながれて連帯感のない真珠
ふところの魔性がときどき顔を出す
向きを変えよう勢いのあるうちに

八尾市　高杉千歩

落陽へあとずさりする泣羅漢
いい夢へつづいてほしいスペアキー
絵ばかりを描いてと亡母に叱られる
そっぽ向いてても気になる夫の咳
和解などしてやるものか野分雲

岡山県　福原悦子

晒し首されて芽吹く葱坊主
ヘチマ伸び花が揃った夏の陣
日傘くるくる噂話も風に乗る
合掌の手から悔いまでこぼれ出る
生涯を働き亡父のちびた靴

高槻市　笠松高子

柿の実がピンポン玉になって秋
お腹へこましてのる体重計
浅漬の茄子でお茶漬などおもい
コマーシャル急に音声高くなり
秋うらら老いの背筋ものばさねば

高槻市　河瀬芳子

小利口の積木つんだり壊したり
梅雨明け宣言雨ぶっちゃける程に降り
お喋り好きな庭師手元は確かかな
指切りの指から抜けて来た噂
草臥れた亡父の帽子が郷里を恋い

ウエストを削る職人さがしてる　尼崎市　山田保蔵

借りのある店から届くお中元
氷やに官許の旗が立っていた
市場カゴロースも入れる給料日
迷うたら出口で待てと言うてある　大阪市　山田妙子

生真面目なコンピューターを憎みきる
ワンクッションおいて見ると馬が合い
悪女と呼ばれてからが肥えはじめ
洋風のリビングルームもキンチョール
バーゲンになんとしまりのない財布　富山市　舟渡杏花

たたみ忘れた傘が夜風に誘われる
老いのおにぎり転がるときも西へ向く
口惜しさを丸めてつくる紙つぶて
涙腺の甘さ男をあわてさせ
目玉焼に果てるあわれや無精卵　羽曳野市　吉川寿美

犬馬の労厭わぬ女の襷がけ
曲線は描けぬ男の既往症
幸せをこぼしてならぬ紙コップ
子離れの海の広さよ佗しさよ
ひたすらに日にち薬と秋を待つ　竹原市　信本博子

夏菊が見舞ってくれる墓帰り

病室の蘭はため息吸って咲き
外出を止めにしたのは或る予感
愚痴一つシャム猫じっと聞いている
ひょうひょうとひょうたんぶらり蟬しぐれ　名古屋市　藤井高子

ファンファーレ老いの胸にもたぎるもの
駄馬立って眠る小銭の夢を見る
花言葉銀のスプーンで試しましょ
ことさらにほめれば消えるかすみ草
傷忘れたいから四肢をこき使う　佐賀県　寺中三枝子

ハイビスカスに吐息もらった日の微熱
ジーンとくる熱い指切してしまう
妻の目がうるむと弱い僕の嘘
かげ口の端っこにいつもいる小鬼
沈む陽に頼りない自画像を見た　西宮市　紀市郁栄

髪ととのえるそのとき人妻の匂い
夏の墓参にうれしいものをとりもどす
病人に雑音ひとつつきまとう
喪の家の高さで蟬が鳴きやまぬ
片手で太陽をさえぎっている不遜　長岡京市　木本如洲

コスモスが別な話を持っている
つじつまの合わぬ伝説だから聞く
挑戦へ地図の一枚海渡る

逢いにゆく顔口紅が濡れている
企みへ口裏合わす妻がいる　久留米市　鶴久百万両

海の家に遁げても暑さ追ってくる
打てば響く男に背なは向けられぬ
平家村に残る哀話の打は消せぬ
火遊びを猿に見られた日のピエロ
俺が逝く日はウミネコよ啼いてくれ　今治市　野村京子

酸欠にある日金魚の自閉症
聞きに来て何にも答えぬ石地蔵
日傘くるくる女童女の貌をして
恋の花ひたすら摘んで夏帽子
遠雷へ許した肩が甘え切る　和歌山市　桜井千秀

定年へおためごかしと思う世辞
鬼の首もう欲しくない般若経
思い出の一つに九月の蟬しぐれ
小心で善意もなかなか捗らず
否定する強さで踏ん切りつけて置く　熊本市　宇野昭代

客去ったあとの一人がふとわびし
ヨチヨチの手へ四方から手が伸びる
退院の実感夕餉の指定席
おばさんの訛りにほっと初下宿
箱一つ買いに連れ立ついい夫婦　熊本県　大川幸子

輪の中に調子合わせた顔でいる
踊りたくなるよな笛を吹いてくる
チェックした意味を思い出さずいる
女はおんな夫あればこそ生きてゆく
一生の不作とこぼし二人酒　熊本市　永田俊子

大胆な仮面を恋がつけさせる
背伸びする足をねらっている吹き矢
誰もいない時にたしかめる正礼
古傷へ他人は尾ひれつけたがり
言うべきことあってうちわを持ちかえる　東予市　小山悠泉

スポーツに国境はないキャンプ村
気疲れは見せぬ総理のスケジュール
義理一つ果し気疲れ脱ぎ捨てる
裏切りのつけか男が泣かされる
逢えぬ日の曇りガラスを拭く慕情　吹田市　井上照子

スケッチの波が奏でる海の歌
精霊を流して友の句がよぎる
足痛む母に肩かす石の段
うたた寝の姑に若やぐ浴衣かけ
八十の母の手さげに化粧品　京都市　松川芳子

ハワイ行く顔して水着買うて来る

参道の茶店で女の缶ビール
肝心な時に無口を通す意地
まる優に一喜一憂して老後
ポスターが旅情を誘う待合所

新発田市　上鈴木　春枝

仲人をしたい上司を持て余す
帰省娘が母の立場でする話
スーパーをゆっくり回る主婦の避暑
カメラからわが子見ている運動会

高槻市　笠嶋　恵美子

皆んなみんな輝いている夏帽子
いい訳を考えているおんなの指
影踏みの影一人消え二人消え
石段の中程にいて風を読む

唐津市　相葉　あき

台風の目となる孫が集合し
特急の停まらぬ町で安住し
子が卵立て終るまで父は待ち
どよめきも無くカーテン下りて来る

大阪市　上田　柳影

それぞれの生き様今日の陽が上る
妻と子とローンに息がつまりそう
陽から灯に影がぽかんと待っている
持って死ぬ金でもないに出しおしむ

岡山県　矢内　寿恵子

手をあげるバスが停った里の道
無愛想に開いて閉じる役所ドア
国生みのやしろの前でとるカメラ
盆回向みんな優しい花手桶

兵庫県　脇田　米朝

紐つけて男を少うし泳がせる
女権すぐ芽を吹きそうな角隠し
あこがれた椅子で孤独を噛みしめる
切札を抱いて涼しい顔してる

尼崎市　丹下　玉子

手にあまる土産をさげた母の旅
御祝と書いて心に妬心這う
雑草が挫折の心を戒める
白足袋を汚して帰る内緒事

西宮市　松本　一郎

退いた社の株価の動き気にかかる
たっぷりと乳飲んだ子のいい寝顔
硯摺る朝の日課が板につき
雑踏に男ストレス捨てて来る

尼崎市　鈴木　良征

梅雨明け十日山荘からの誘い状
虫喰いのリンゴが落ちる昼下り
アウトコースの好きな男が一人居る
お情けでやっとつかんだ課長の座

倉敷市　田辺　炙六

こわいのは他人頼れるのも他人
言い過ぎた仮面に団扇風をあて

小さい字が見えない焦り熱帯夜
生きざまは違うが三度飯は食い
大阪市　井上白峰

ショーウインドー女の足に釘を打つ
女房の自画像紅を加筆する
旅支度女房は爪を切っている
鈍行の旅を楽しむ途中下車
寝屋川市　太田藍子

山門を抜けて余韻の残る町
退屈へ丁度来た来た飲み仲間
使えそうな大型ゴミが出してある
猫にまでただいまと言う機嫌良さ
尼崎市　森安夢之助

賽銭の音だけ聞いた仏さま
下手なりにカラオケに凝る老いた妻
摑んだら大きな棘のある女
太っていて心配事はないらしい
京都市　木村たけし

雑踏の窓にコーヒーの椅子で待ち
夕暮れの森へ帰ってゆくカラス
石になるおんなは神の声になる
あんまりな言葉にコーヒー冷めていて
伊丹市　山崎君子

少しだけ心を残す別れみち
雨音が次の開花を呼んでいる
主婦の座がゆれると大きな音がする

蟬しぐれ針を持つ手がねむくなる
大津市　安田志津

名ばかりの秋が炎暑につき出され
実をつけぬ花ほど華麗に自己主張
自転車を止め愚痴ばなし聞いてあげ
抽出しの隅っこ過去のふきだまり
兵庫県　東浦砥代

煩悩がまだ残ってる飾り棚
和服の美袱紗さばきにある気品
たとう紙にまた繰り言をたたみ込む
もしかしてと街へ出てみるおぼろ月
高槻市　川島諷云児

反り返る椅子は僕に似合わない
飛ばされることは覚悟の反旗振る
長尻の客に通じぬ生あくび
白旗を振っているのに石礫
守口市　森川まさお

碁盤目の街でおなかが空いてくる
好きな店の買物袋を持ち歩く
倉庫ばかり続き立ち小便をする
座る位置代わると社内がよく見える
富田林市　楠美子

胸うつより舌うつ記事の多いこと
ひとり言きこえることを意識して
合格で親の負担は重くなり
不揃いの娘の作った梅にぎり

冷蔵庫冷える暇ない子沢山　　十和田市　阿部　進

寝たきりも数に入って長寿国
肩書をはずし屋台で飲んでいる
戦争がいやで平和の鳩を飼う　　米子市　小村てい子

大漁の船が女を浜に呼び寄せる
さわやかな花の木植える境界線
どたん場ではだしになった運動会
馬穴の底を叩いて気分変えてみる　　静岡市　渥美弧舟

妻も老い話題もなくて日々忙し
風の子が風と一しょに塾に来る
夕陽ふところに明日を信じとく
冷奴の味につられてもう一杯　　熊本県　高野宵草

我が家の灯見えたにタクシー値があがり
造花ではないかと思う程満開
疲れてる僕に布団のやさしさよ
紳士録めくって孫の名考える　　堺市　矢倉五月

60円切手で孝行しています
子を叱るついでに妻も叱っとく
助手席に座り運転口でする
甘い声出して母さん酔うている　　守口市　結城君子

老眼鏡で見抜かれました自尊心
緞帳の下からのぞく男の子
乗りついで美味しい寿司を食べに行く
フランス料理に飽きあきしてる紙ナフキン　　福岡市　吉川一郎

実印を持って男は朝をでる
自己主張持たぬ男はピエロ向き
アングルを変えると風も和いでくる
流行を着れば青空広くなる　　熊本市　黒田緑

傍観者ある日怯懦なふところ手
桎梏がとれて戸迷う青い空
サンバしか踊らぬ若い盆おどり
庭に来て虫はしきりに秋の声　　大州市　横田放人

七人の敵と飲んでもうまい酒
ぐい呑みの似合う男で頼られる
父子家庭汗の臭いで子を育て
ままごとに母の口調が真似られる　　岡山県　黒住美穂子

白い樹の夢見て心凪いでくる
珍客に女心の灯がともり
鳳仙花はじけて娘からの電話くる
鍵を持ち少年大人になってゆく　　大阪市　亀井円女

新盆の亡母一番乗りで御到着

じっと瞳を見つめてくれる犬が居る
偏見だろうか白い花なら総て好き
お犬様四人抱えてひる寝する　静岡市　永倉僕川

過疎の里妻と戻れば苦にならず
必勝の鉢巻今度こそ勝とう
叱ってはみたが戻らぬ娘を案じ
呆け防止嫁はしつこく出したがる　米子市　木村富美子

少しずつ傘に別れを言って置く
国なまり里の小川も山彦も
地図にない山で無心に紅葉散る
花屋から蝶の歌など聞えない　吹田市　栗谷春子

すだれにも風紋のあり秋立つ頃
カラフルを着てみて弾む朝の風
表情に変わりはないが耳の色
カラジウムの赤が重くて目をそらす　貝塚市　池田寿美子

夾竹桃あれやこれやの物語り
名月に生れ来る児を名づけてる
距離おいて少うし風を通す仲
緑蔭に赤信号がもどかしい　尼崎市　吉永伊三郎

橋出来て港の灯り一つ消え
ジョニ黒の氷に負けた横の美女

長生きをおだてられてる吹き溜り
七色の傘が嬉しい園児バス　尼崎市　木下義嗣

愛人の家に一本傘を置く
へそくりと知りつつ妻から金を借る
呼び捨てに言い合う友が転居する
海水浴泳げぬ我が子もてあまし　高槻市　芦田静江

月を見る離れ座敷の一人言
電話口やっと通じた話下手
雉鳩の愛確かめる深みどり
一つの訃神が知ってた盆の風　唐津市　上田花代

煙草の輪吸わない人の方へゆき
槌の音一しきり止む午後三時
錆びた家訓掲げ亡父の轍を踏む
馴れ馴れしい顔で督促状が来る　広島市　流奈美子

傘の輪が並ぶ団地の雨あがり
ひと夏の体験蝶になる少女
遠い日をダムの麓の碑が語り　泉南市　坂根流水

国訛り帰省列車は満載す
雲上の機内も浮き世の風はらみ
汗の手でビンズルさんの頭なで　和歌山市　北山凡太

小げら来てコツコツ叩く柿の幹
弱腰を見せたばかりに付け込まれ
差出口なければ可愛いお婆あちゃん
竹原市　石原淑子

不揃いな蔬菜が夕餉を賑やかす
旅に寝て家族の絆確かめる
コスモスの風に任せて信じ切り
和歌山市　森敏子

夕ぐれて沈んだ街に赤いばら
叱られに行く人がいる遠花火
ひそやかな暮しへ蜻蛉むれて訪う
河内長野市　大西文次

年齢に制限がない紅一点
窓毎にクーラーがある雑居ビル
手品師とおんなじ帽子買って来る
尼崎市　尾宮弘治

バス降りて土産袋を持て余し
子の割った皿なら祖母は叱らない
紙コップ中味が減ると転びだす
島根県　菅田かつ子

秋の天痛いのいたいのとんでゆけ
のろいからきっと後から来るんだぞ
二番手にピタリと付けている怖さ
羽曳野市　麻野幽玄

女盛りへあらぬ噂が先走り
もう一度墓碑振り返り降りる坂
受話器取り度い孫へまかせる夜の電話
広島県　田村新造

幻の艦隊墓地に勢揃い
最終便島陰に消え瀬戸暮れる
豊漁の民宿朝も魚攻め
唐津市　浜本ちよ

御在位の金貨は何処へしまおうか
ライオンに似たる隣の犬が死に
割り箸の食事にも倦き家を恋う
鳥取県　黒田くに子

気ままとは楽しきものよ旅ひとり
耐えて来て頷くだけの老母である
妻今日のドラマをほぐすしまい風呂
箕面市　椎江清

香水の売場ゆっくり通り抜け
ハイハイと返事だけよいお手伝い
北風が吹いて無冠の首を撫で
寝屋川市　井上すみれ

手術日に耐えると窓に書いて立つ
「兄の馬鹿」生家の壁に残る傷
明日の夢抱いて旅立つ子の眩し
熊本市　北川一進

美人肌泡に包んだコマーシャル
半分は追加出す気の飲みっ振り
逆さから見れば上手な筆の跡
茨木市　堀良江

敷いたハンカチ忘れられてるベンチ
アルバイト売り場でなくて配送部
化粧して見せる水着が浜歩く
兵庫県　森脇和子

左手の怪我でよかった経机
模様替えしても古傷痛みます
受け答えする人もなく爪をかむ
堺市　桜沢あか里

やりくりの腕は確かな五つ玉
鼻先を掠めていった変化球
性急な靴に小石が跳ね返り
吹田市　山田里子

痛くない歯まで抜くというカルテ
再婚で互いに位牌持っている
バーゲンへ母の習性無駄を買い
弘前市　斎藤劦

顔立ちの優しい犬が先に死に
ねぶた絵のどの目も太く勇壮で
天井が煤ける頃は二人きり
出雲市　竹治ちかし

故里のニュースに想う母の背な
食卓に妻は小さな夏を盛り
辻々に懐かしい顔あり里帰り
尼崎市　佐藤美代子

ＩＢＭへ入社コンピューターに管理され
積ん読の背文字に或る日目を引かれ
目分量だけの料理で旨味出し
京都市　森川春子

障害児編物の手は休まない
まぎれ込んだ部屋の蝙蝠たくましく
病院もマンションみたいと看護婦が
旭川市　朝倉大柏

円高を気づかうほどは商わず
お忙しいことでとパチンコとも知らず
貧乏な家でも大の字に寝れる
愛媛県　八塚三五島

新人類と言わねばならぬ離婚沙汰
洗うほど藍はいのちの藍になる
自由席みんな座れて旅終る
川西市　野村静雄

病室の窓から見えるだけの夢
幽霊の季節咄を聞きに行く
もみ手する敵にはいつか騙される
寝屋川市　立床晴風

金借りる言葉に神経すり減らし
もう少しですよと母の手内職
矢印と足が妥協をせず迷い
静岡市　丹羽定次

約束のオモチャの値段知らなすぎ
派手すぎる広告来るは店仕舞
健康が日々楽しくすぎて行く
豊中市　辻川慶子

風船の行くあてもなしひとり旅
アルバムを繰ると軍服の兄がいる
お墓にも日除けがほしい炎天下
米子市　川上より子

母ありて清水寺を添い歩く
迎え火を帰省子にさせ炊きおこわ
どんじりの客が帰って広い庭
岡山県　牧野秀香

風鈴が本音に馴れて夏の午後
浴衣がけ温泉街に下駄の音
一坪の土に楽しむ花盗られ
山口県　高崎雀声

両親をおんぶしている少女スター
失業中ミスに選ばれ忙しい
子の自慢つめて出てゆく同窓会
青森県　福士トキ

高砂をお腹のベビーと聞いている
一度着て写してみたい海水着
指一本怪我して五体ままならず
今治市　渡辺伊津志

柏子木でカバーしている揃い踏み
納得をした子は夢で笑ってる
つむぎ織る機械は舞い出す音を立て
西宮市　秋元てる

寝たきりの耳に故郷の祭り笛
眼を閉じるねぶた囃子の中にいる

宝石に眼のない姉で楽天家
尼崎市　小熊江美

話の種無くても和やか夫婦です
爽やかに笑う少女の歯の白さ
影ぼうしスリムな私がついてくる
岡山市　中嶋千恵子

かずら橋ゆれて寒々汗をかき
月並みに肩をよせ合う影法師
ほめられて自信が出来た孫の顔
島根県　小田川智重子

会釈されただけの事です軽い足
気を抜いた隙にカメラに写される
ワンテンポ置かねば涙がひっかかる
ロスアンゼルス市　加藤明美

故郷へ思い託してエアメール
好き嫌いなくして母となる自覚
不安多々異国で出産母恋し
大阪市　秋田茂

生き方の下手な奴だが俺は好き
決心がゆらぐ日もあり月給日
握手したぬくもりだけは裏切れず
岡山県　杉本伊久栄

アスファルトの中に小石はかくれんぼ
ベレー帽おしゃれな父に良く似合い
洗面所女かしましコンパクト
弘前市　真喜内實

下積みの生活を妻に支えられ
全力投球した甲斐がある玉の汗
艶のない児を研ぐ父の鉋屑
鳥取県　津村八重子

任務終えかがし胴上げされ帰る
奉仕の手ゆっくり車椅子を押す
台本のままで終らぬ夫婦坂
鳥取県　太田幸枝

まだまだの未熟ですがと嫁にやり
女ながら男気のある海女の笛
紋白蝶は香りよい花知っている
静岡市　三浦つね

螺子巻くと父の時計が話しかけ
正直に生きてお金たまらない
四季の花咲かせ豊かな老いの庭
尼崎市　的場十四郎

素通りの夜店あとはコップ酒
花火にも人にも酔うて帰る道
風鈴よ御苦労さんと拭いている
出雲市　小玉満江

くず餅が涼しくのどを通り越し
北の街星のきれいな窓があり
年なのよと言いつつ女は髪染める
鳥取県　西川和子

軽口がだんだん重たくなって来る
いつか来た道もすっかり舗装され

新しい畳に古い妻と寝る
大阪市　桝本蕗児

赤とんぼ孫とならんで立小便
無礼講でも席順はおのずから
応援は勝っても負けてもやかましい
唐津市　山口高明

巣造りが出来ぬ女の乗馬服
孤独感隠して男風を斬る
ニコニコと苦労話をする社長
島根県　森山英子

無駄足を踏んだが面子は立ちました
ボーナスで買ったと孫の宅配便
安もののめがね意外なほど見える
静岡市　青柳金吾

正確に三時知らせる孫の腹
調子良い話の好きな耳を持ち
苦労した過去も美化するこの暮し
高槻市　津田スミ子

夕立ちとピアノが競う雨宿り
故郷で逢いたい友が一人欠け
白い靴夏の歩道を闊歩する
鳥取県　鈴木ふみ子

鈴虫の闇のリズムが消えた宵
さわやかに別れたはずの人想い
夕焼けて男は静か帆を下ろし
岡山県　後安ふさえ

バイトして我子にかける母の夢
山の子が海ではしゃぐ夏休み
足跡の大きさ句碑が物語り
唐津市　浜本治幸

父の日にパイポを贈る孫可愛い
扇風機暑さが室をかき廻す
御無沙汰も暑中見舞で逃げている
唐津市　米倉彩女

映画館出てしばらくの靴の音
七人の敵へ夫の化粧水
好きな娘の声をたよりに西瓜割り
島根県　喜島ノブ

病床の朝も結構いそがしい
病院より外泊を貰う
懐かしい顔は元気な人ばかり
山道はすでに秋だよ栗のいが
京都市　小林英子

待ちぼうけ駅も広うになりました
情人と言われてもいい炎を抱く
あふれくる涙に偲ぶ一心寺
唐津市　筒井朴竜

丹田へ精魂を込め弓弦張る
一呼吸的へ二の矢を継ぐ余裕
過疎里へトンネル抜ける亡父偲ぶ
大阪市　川原章久

孫に似た土産こけしはおちょぼ口
自分史に酒と女が多過ぎる
雑音と思うな中に神の声
米子市　三好寿々子

道化師に似ると振袖きらう娘で
鬼の方が泣きだしたくなるかくれんぼ
この土にしか出ぬ色のあじさいで
大阪市　今西静子

議員さんの挨拶をきく盆踊り
死んだかとびっくりさせた睡眠薬
そっくりな人に出会った待ち合せ
和歌山県　田中隆積

ついていくだけの器量が情無い
しかたなくテントの中でゴロ寝する
やれやれと思えばはるかにいわし雲
益田市　里本たかし

花火の跡綺麗に老母が片づける
修正をするとリズム感が消え
一人居へ新聞めくる風が吹く
八尾市　鷲見章

冷蔵庫一杯にして置手紙
一輪差しカタカナの名はすぐ忘れ
良く笑う女が好きなイヤリング
寝屋川市　宮崎菜月

夕立へポストのお口拭いてやる
左手で握手している好きな人
函館の夜景を飲んで終わる旅

嫁姑均等法で握手する　鳥取県　土橋はるお

歩行者天国を撒水車が通る

縄跳びにいじめの波を寄せている　鳥取県　乾喜与志

歯が抜けて丸いトマトがかみ切れぬ

きのこ雲夾竹桃はまっ盛り

男気で庇うと星が明くなり　豊中市　一瀬福一

一円を拾わず靴がけって行く

ぜいたくな職が合わぬと言うなまけ

お日様を探して干した濡布とん　藤井寺市　菊地繁男

トントンとまりは弾んで恋歌う

掃除機で女の罵詈も吸いこませ

威勢よい鉢巻き見れば我が女房　岡山県　後安江山

雑談の中で安堵の鼾かき

大声で昂ぶる心静める吟

校則を曲げぬ教師が固いのか　吹田市　西岡豊

酒のみのレッテル張って酒談義

館長が範を示した舞扇

成り行きを知りたいために奢る酒　愛媛県　藤原無想

才女がしゃべる男黙って目をつむる

口説かれてみたい気になりちょっと酔い　鳥取県　福田あや子

主役からねぎらわれてる馬の足

デパートを吊り上げているアドバルン　高石市　宮田純一

宅急便がきたぞ田舎の乾し蕨

期末試験まあまあという娘が帰り　鳥取県　乾隆風

妻にちと具合いの悪い嫁庇う

しまいまで聞けよと口に栓をされ　鳥取県　田村きみ子

親と子の遠足少し雨が降り

飲み仲間いつも女を一人連れ　八尾市　向井しづ子

遊覧船しぶきに虹もついてくる

竹生島自家発電の寺と店　大阪市　島路太郎

地獄でもよい再会をしたい人

都市砂漠化粧しているネオン街　岡山県　富坂志重

制服を案山子に着せて娘を偲ぶ

地蔵様の前で話したナイショ事　堺市　山本半銭

南瓜が土にどっしり胡座かく

金魚にもつかまり上手と逃げ上手　岡山県　戸田種子

絵を描く人になりたい夢描く
名物を配って廻る旅帰り
岡山県　平田　たけよ

夏休みも受検の孫は帰省せず
帯芯のかたさに亡母の過去を知る
富田林市　大澤　三四子

短くも蕨の拳天を突く
同窓会始めも終わりも賑やかに
鳴門市　八木　芳水

妥協する術を覚えて円く住む
家計簿の赤字を埋める妻バイト
大阪市　横山　為子

お茶漬けも三食足りて恙なし
夏ばての犬も食ってる鮭茶漬け
青森県　波　ただお

長生きがしたくて入歯取り替える
紫のキキョウの花に空が澄み
鹿児島市　吉永　尚

長男はええかっこしいながら頼もしい
鹿児島はナウくきめても灰まみれ
静岡市　安本　孝平

普段着の暮らしで世間広くなり
老いの身を削ってまでも尽す妻
岡山県　江口　有一朗

名園の借景けがすビルが建ち
無学だが人ひきつける知恵をもち
富田林市　新開　千代女

おみくじを信じて空の旅に出る
嫁入りを反対した父孫の守り
今治市　山田　宝保

ヘルスメーター胃袋だけの目方だな
雨風へ無理に力むな鬼瓦
静岡市　久保　きぬ

孫が来て閑居に笑い花が咲き
つまみ喰い口の廻りに書いてある
島根県　岩田　三和

しいたけを採りに長男つれて行く
生きいきと港まつりだ！いわしの目
呉市　蔵重　成人

ヒロシマの文字から平和始まりぬ
流れ星拾ってくれる星もある
静岡市　澤田　きん

窓口の一輪挿しへ安らぐ日
母さんが旅行家中天手古舞
鳥取県　久野　野草

草野球父ホームラン子等弾む
引き際がきれいな父の背が淋し
堺市　江辺　天鳳

就職の初月給は皆で飲み
大声で叱った悔いをしまい風呂
大阪市　吐田　純子

若い色干して息子の里帰り

本能が嫁と娘を区別する　大阪市　渡部トキワ

ボーナスで赤字埋めたと言う若さ
子は楽し親うんざりの夏休み　八尾市　松下蕉露

一かどの詩人に見せるベレー帽
三人に相談二人に背く破目　高松市　竹川憲一

革命とテロで覚える世界地図
ポストまで来て手持無沙汰の休刊日　岡山県　池田半仙

世話役が引退すると又もごね
年金の軽い財布も包む義理　川西市　田中喜俊

老夫婦ナイターに合せ夕食す
ラケットの重さ感じる年になり　橿原市　西本保夫

CMの商品いつの間にか買う
妻はすぐ楽しい夢に切り替える　八戸市　島田昭治

貧乏に慣れた親子の笑い声
待合室哲学めいてるお婆さん　高知県　北川竹萌

真夏日を果してまわる盆の義理
スリッパで妻の温みを貰う朝　大阪市　堀口欣一

藁屋根の下で行水した戦後
老いらくのおなら一発しまい風呂　広島市　望月はるひこ

周倒な用意へ紐を結び付け
てっぺんに着こうとしない猿で生き　西宮市　上嶋ふさ子

夏バテをゆっくりさせぬ孫が来る
盆おどり恋のうちわが楽しげに　愛媛県　西山えつ美

開けすぎて冷える間のない冷蔵庫
無医村へ宝のような医者が来る　大阪市　新井川青舟

付添いへいたわりの声回復期
セールスのノルマ果せず夏の午後　藤井寺市　福元みのる

病院でホンモノ婆さん居たと孫
一生の履歴書顔に書いてある　岡山県　伏見すみれ

心持恥じらい初潮祝われる
道化師も笑いたくない日もあろう　八尾市　椎尾公子

一日中電気がついた化粧部屋
急勾配道長く無表情　唐津市　福島紀一

ためらわず南瓜の花は黄に咲けり
掬いたるばかりに金魚との縁　豊中市　額田明吉

孫に買う天体鏡で見た銀河
夏休みボーナス貯金も底がつき　河内長野市　植村喜代

自然が怒ると手だて何もなし
駅へ行く夜景が出来た山向い　兵庫県　奥野テル

華燭への客となる日の袋帯
ねぎらいの言葉うれしい齢となり　西宮市　飯森泰世

それぞれに年輪のあるグループの和
床の上起きても寝ても熱帯夜　唐津市　入江喜久夫

この皺はみんな貴方の故なのよ
ヘソクリを挟んだ本を妻が読み　大阪市　平井露芳

王子様南の島で星になり
昇進でしこ名がついた北尾保志　茨木市　井上盛雄

胡瓜さえつるであしたを模索する
日本のあれもこれもの和の心　島根県　坂本雪路

台所嫁とならんで味をみる

知恵袋ひとそれぞれにだしきれず　新宮市　船越正

吹き降りは不便な傘よワンタッチ
娘まだ帰らぬ夜半救急車　大阪市　宮下とし

栄養はどうあろうと夏は茶づけです
四人目が又も男で双生児　泉佐野市　真崎浪速子

選手宣誓終わると敵になる試合
鱧今宵鉾の脅威に身構える　大阪市　喜多佐津乃

夜の蜘蛛そっと戸外に朝おいで
留守番の猫が遊んだ毛糸玉　出雲市　小白金房子

見通しがついたと明かるい電話ベル
神様を起こす母の願い事　愛媛県　石手武

仰向けになって煮つめてみる思案
つまずいた女それから金に生き　大阪市　冨岡温子

二階まで急ぎあがって用忘れ
親だぬき子だぬきみんな海がえり　泉佐野市　大工静子

紫一色咲競う朝一ばん
下に太郎と名付く友許り生き

山坂を越えてよき日が訪れる　呉市　岡田寿美礼

北国はまだ長袖よと秋田より　大阪市　田中節子

一〇〇パーセント雨の予報に行くゴルフ
霧徐々にはれゆく鞍馬は山の中　奈良県　山村有佳

汗をふく眼に夏のれん吹き上り
昼寝する場所もそれぞれ指定席　大阪市　工藤陽子

暑さ飛ぶ大ジョッキをイッキ飲み
急ぎ仕事電話のベルがいらだって　島根県　園山世似

風鈴も黙しておれぬ風もらう
猛暑です届けられたる鮎二匹　大阪市　朝田晃世

行水で暑気払いして一句でる
待ちに待つ香り文のラベンダー　西宮市　待田麻黄

大急ぎ名物駅弁買いに降り
スパゲッティ作りに娘ら懸命な　和歌山市　三谷周三

神風を待って昭和史変り果て
一本の煙草貰って火も借りる　大阪市　野村八重

参道を歩む心は善意なり
惜しみなく働く蜂に気を取られ　堺市　安西カネ

母の日も父の日もない独り居て
港の灯裏も表も照らしてる　米子市　宮本佳女男

鍵っ子にせぬしゅうと有り共稼ぎ
夕餉どき一家団欒三世代　兵庫県　浅川とし江

急いでも親の年には追いつけず
食欲ともう一つの欲消えぬ老い　熊本県　立道善太郎

昭和十四年盛夏の日召集

虫干しに軍隊手帖顔を出し　大阪市　松岡久留美

お人好し蔭日なたない良さもあり　広島県　花田繁子

子育ての親馬鹿の味もう一度

◈ジュニアの部

深みどり心を染める黒部川　いわき市　新井朋子（中一）

足ぶみも行進のうちあせらずに　いわき市　新井晶子（小三）

ふえふいていろんな曲がつくれたよ
ミニトマト赤くなったようれしいな

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

野村　太茂津

美しく別れてたぎるものを秘め　高橋　千万子

六月号に路郎賞候補作品として作者の句を掲げたが、八月号に「日記には書けぬ六十の出来心」が私の目に止まった。若々しく滾るものを、打ちあけてほしいものです。

芋虫に毛虫がとても偉く見え　谷垣　史好

いまに見ろ芋虫だって蝶になる　波多野　五楽庵

川柳人は芋虫にまで、人間の心を投影していく、しかも詩性とユーモアを忘れない。

紙おむつ違和感あるのは祖母ばかり　安藤　寿美子

赤ちゃんの意見は聞かぬ紙おむつ　玉置　重人

紙おむつの機能は、研究実験されているのだろう。それは大人の目では都合よく出来ているが、さて着用者は赤ちゃんです

授乳するおんなの隙は見逃そう　林　はつ絵

電車の中で最近この光景に出会わないが、私なら見逃すどころか美しい絵だナと見守る。

非常ボタンを一度は押してみたいのだ　小島　蘭幸

人間の心理を捉えた。ニヤッと笑える。

低い腰一本背負いでくる気かも　有働　芳仙

初対面から笑顔で、低姿勢でくる人を、作者は警戒している。気を許せないという。

妻の背が温かそうな壺坂路　樫谷　寿馬

奥さんの後に従いて壺坂寺の坂道を上る作者は、さしずめ沢市の心境か。

五線譜より僕にはぴったりロツレチハ　松川　杜的

都山流尺八の師匠としては、譜面は確かにロツレチハでなければぴったりこない。

遺言が上手に書けた日の安堵　小西　雄々

そんなに上手く書けるものだろうか。私も書いたが、まだ悟れないので、書き変えてばかりで。生への執着が強くて照れくさい。

以下次号妻が怒ったまま眠る　土居　耕花

掲出の五句、前々号の作品も読み、いつも須崎豆秋を連想させてくれて楽しい。

腕を組むそんな度胸もないままに　松原　寿子

ちと過ぎた愛語の後が続かない　辻　文平

熱あげているのに振り向いてもくれぬ　福本　英子

目が合うと好きになるので目を伏せる　新家　完司

当らなくても愛の矢をひきしぼる　土橋　蛍

いろいろと愛の表現に個性があり、五句を続けて音読、残暑厳しい汗をかいています。

降りやめばもう父の手に傘がない　石垣　花子

旅に出て古いわたしに手を振ろう　西山　幸

逃げ込むのは、いつも大きい父の傘の下である。父は庇ってくれるが、いつまでも甘えさせない。雨風の世間に出て、新しく旅で脱皮させたいのです。

夢の中でも離さない夫の掌よ　堀江　芳子

妻の掌に夫が縋る。しっかりと全身で頼りきっているから放さないのです。夫婦愛。

半分は亡夫に聞かす独り言　赤川　菊野

ご主人を失くしたひとでなければ、この句の本音は胸を打たないだろう。所詮は「独り」だと、私はいつも思っています。

人生は試行錯誤の繰り返しであると思います。どうか、開き直って生きようではないか。

鑑賞したい秀吟はまだまだありますが、肩肘張った、作意が見え過ぎる句は敬遠し、殊に「道句」のような教訓句は避けました。

愛染帖

橘高薫風選

松江市　竹内　寿美子
善とすれすれに私も生きている
わたしでなかったラストダンス見ている

笠岡市　木山　遠二
寝たきりの俺と妻とにある仁義
寝たきりが少々ぼけて愛される

青森市　工藤　甲吉
旅芸人「津軽じょんがら」一筋に
旅芸人盆も他郷の空にいる

鳥取県　土橋　蛍
水飲んで咳ひとつする秋の人
藁人形よ米代を上げてくれ

弘前市　波多野　五楽庵
紫陽花に雪のドラマは見せられぬ
稲になる心わすれた農夫です

尼崎市　春城　武庫坊
霊柩車あと透明な箱続く
大夕焼け背に足どりは確かなり

岡山県　土居　耕花
ベランダのビアガーデンで妻と足る
日曜のない日めくりを妻が持つ

岡山県　藤井　春日
ペット肥え仏の花は水が涸れ
キッチンに真心のあり妻の道

岡山県　荻野　鮫虎狼
本心が喉から覗くほどしゃべり
目覚しを止め退職の朝静か

岡山県　矢内　寿恵子
紫がとてもお好きな仏様
紋服をたたむ揚羽の悲をたたむ

今治市　月原　宵明
単パンの女おんなを忘れかけ
旗二つ持って流れに身をゆだね

和歌山市　後藤　正子
信じるものを一つあなたの掌に残す
思い通りにならぬ明日は雨になれ

吹田市　後藤　火鳥
梅雨晴間雑草宴ある如く
九十六歳の母の看護に妻疲れ
恍惚の老母いとおしや妻愛し

弘前市　斎藤　劦
産声に伴奏のごとねぶた笛
おもちゃ屋に幸福の木を植えておく

茨木市　堀　良江
お下りの浴衣の地味が粋になり
今日だけの浴衣集まるフェスティバル

米子市　青戸田　鶴
橋渡る人間らしい貌をして
裸婦の絵にバラ一輪が美しい

高石市　宮田　純一
高音も低音もあり虫の声
ささやかな抵抗よく食う四十八

米子市　八木　千代
アルバムを剝がした痕の水たまり

鳥取県　新家　完司
ラーメンの汁戦場は遙かなり

藤井寺市　赤木　和子
箸を逃げるは愛しい人か自然薯か

大阪市　小出　智子
明日のこと思うと救急車が走る

和歌山市　神平　狂虎
もう少しもぐると明日が見えるかも

近江八幡市　前川　千賀子
積乱雲我が人生の折り返し

川西市　野村　静雄
引き潮に力をためる冬の海

愛媛県　高見沢　健介
暑気払い鰻一ぴき婆の酌

西宮市　草刈　堕駄
核シェルター宝石箱を抱いて入り

唐津市　久保　正敏
梅雨晴間舌の根を干す当選者

唐津市　相葉　あき
あの世から旦那呼ぼうか五十年（金婚）

唐津市　筒井　朴竜
玉砕より瓦全を選ぶ伊野波の舞

和歌山市　西山　幸
讃美歌をもう長いことうたわない

西宮市　奥田　みつ子
立直るきっかけ故郷の大花火

寝屋川市　宮尾　あいき
ママになる嫁よ我がままをしておき

富田林市　岩田　美代

いぶし銀昔の光見つけたり　笠岡市　松本忠三
考えてみろと言われただけの鞭　今治市　矢野佳雲
口紅の濃さは影には表われぬ　藤井寺市　福元稔
叱られて残りの飯を茶漬けにす　唐津市　福島紀一
水中花水のベールは美しい　唐津市　福地よしみ
結納がきて弱虫になった父　米子市　川上より子
裏山を尋ねて父の根にふれる　浜田市　佐々木裕
寄せ書に一人本音を書いて寄す　茅ヶ崎市　山上元孝
政治ショー役者もうなる早替り　鳥取市　森田熊生
わからないままに反対して帰り　寝屋川市　堀江光子
ぶどう食べては考えている返事　堺市　桜沢あか里
一匹の蟻が捉えた水の漏れ　吹田市　栗谷春子
肥後守父と息子は仲が良い　寝屋川市　岸野あやめ
人の気も知らぬ茶漬けの食べっぷり　米子市　金山夕子
ポシェットにいつでも出せる笑い声　米子市　沢田千春
夕やみにバラのため息聞きました　伊丹市　樫谷寿馬

向日葵と瓦礫八月十五日　守口市　結城君子
種なしの葡萄に馴れてきた恐さ　守口市　森川まさお
形見にと日曜画家の画を貰い　和泉市　西岡洛酔
夾竹桃北の旅でも出て見よか　米子市　小村てい子
終着駅でふと現実の顔になる　京都市　森川春子
梅雨さなか都会の蟬は早く鳴く　大阪市　北勝美
女傑など呼ばれて女愛に飢え　倉吉市　田中亜弥
風もないあの音なんの音ですか　唐津市　仁部四郎
パンストの柄革命を占うか　唐津市　田口虹汀
今出来た卵もやがて卵産む　唐津市　山口高明
鏡台の奥に女の過去眠り　唐津市　浜本義美
寄生虫よお前借家で終る気か　茨木市　井上盛雄
かか様は軽く小さく八十路夏　箕面市　椎江清
相合傘ちょうど程よい雨となり　大阪市　大塚節子
人間が赤裸々となるお葬式　静岡市　渥美弧舟

慶にもこのたびは弔にもこのたびは　西宮市　松本一郎
決断を下し迷いを深くする　米子市　小西雄々
おしゃれして心が満ちる真珠たち　豊中市　辻川慶子
紫陽花の枯れてドラマが切りとなり　岡山県　山本玉恵
一人占めしたい人ありカンナ燃ゆ　和歌山市　森敏子
すきだらけの女がうつる湯の鏡　尼崎市　春城年代
人妻の恋を昼顔見たという　弘前市　真喜内實
不信の眼に裸の胸の汗を見せ　倉吉市　奥谷弘朗
寄附帳へ男の見栄を一つ足し　宝塚市　丸山よし津
宿の名がうすれてタオル使い馴れ　竹原市　信本博子
泥舟もいいじゃないの二人なら　大阪市　桝本露児
黒い服好きな女で熟れている　名古屋市　越村枯梢
極彩色に梟首台の絵を描く　和歌山市　桜井千秀
善人の嘘つまずいてつまずいて　岡山県　江口有一朗
青青とよく拭われた今朝の空　高槻市　笠嶋恵美子
向き合って無を知らされる屏風岩

子の夢に親もぬりたい彩があり　出雲市　竹治ちかし

悩殺のほほえみたんと毒を溜め　岡山市　井上柳五郎

不信感なくしてくれた花一輪　米子市　茂理高代

核兵器ロザリオ強く握る夏　大阪市　新井川青舟

今もって亡姑に及ばぬ茄子の彩　羽曳野市　吉川寿美

絵日記におこりんぼうのお母さん　高知県　松岡三吉

嫉妬している缶切りがよく尖る　倉敷市　田辺炙六

生きている証の貝は潮を吹く　唐津市　入江喜久夫

納得をしているように枇杷が落ち　今治市　渡辺伊津志

反対の立場に立つと鳴る時報　益田市　里本たかし

片減りの靴にくらしの影を見る　大阪市　上江洌勝子

胸の襞ゆるんで想い深くなる　和歌山市　松原寿子

未だ若い妻に婆あ婆あと甘えてる　唐津市　浜本ちよ

スナックも屋台も酒は変りやせぬ　唐津市　浜本治幸

場違いの遠出悔いてるカタツムリ　広島市　流奈美子

父の書架著者の分らぬ本があり　羽曳野市　田中隆二

サギ草に語りかけてる過疎の村　広島市　田村新造

人情に甘えて熟れた水蜜桃　川西市　松本ただし

通り雨待っていたのはきりぎりす　河内長野市　植村喜代

匿名の手紙の女知るポスト　堺市　高橋千万子

紫蘇の葉が伸びる猛暑に負けはせぬ　鳥取県　乾喜与志

愚妻愚妻と呼んで男の瞳が優し　高槻市　河瀬芳子

老いた船繋ぐ港の狭いこと　福岡市　吉川一郎

てきぱきと妻には命令するけれど　寝屋川市　平松かすみ

打算などない秋空の青が好き　佐賀県　寺中三枝子

消えかけた火種を煽るメロドラマ　大阪市　井上白峰

笑い合うしかない老いの物忘れ　鳴門市　八木芳水

立つ位置を変えれば明かり差してくる　和歌山県　北山凡太

孫が来て昼寝乗られたり蹴られたり　八尾市　向井しづ子

振り向けば思い出多い杖の艶　兵庫県　北川とみ子

み仏の慈眼に開く白い百合　岡山県　黒住美穂子

派手を着る老いの歯止めのように着る　大阪市　今西静子

底辺で波長の合わぬ標準語　今治市　月原つくし

皺かくすためにかけてるサングラス　豊中市　上田登志実

暑さかな豆腐が売り切れないうちに　島根県　榊原秀子

夏の絵に還らぬ子らの年を読む　鳥取県　さえきやえ

頂上の岩へ石積み末想う　羽曳野市　麻野幽玄

サングラス私服まばたき一つせず　松原市　小池しげお

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「カード」選者　**森中恵美子**

締切　**10月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK
大阪放送局〝さわやか広場〟係

発表　10月26日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

津守柳伸

大変な大役をおおせつかりました。素晴らしい句の中から誰方にも解って頂ける楽しい句を選ばせていただきました。

まっすぐに見たいものあり瞳を洗う　福田礼子

とかく色眼鏡で物を見たがる世の中で、こんなに美しい気持できれいに物事を見ようとされる努力に感心させられました。

塩分を控え気弱な老いの箸　高杉千歩

塩分控え目低カロリーもマンネリ化しつつありますが、老若を問わず健康でありますように、気弱では一寸困ります。

身におぼえあって相談すぐに乗る　井上照子

とても素直な表現。明るい世話好きでお人好しなお方なのでしょうね。

太刀打ちはできぬが足は引っ張れる　赤木和子

とてもそんな事のできるお方とは思えませんが、これくらい明るく切り込んだ句に出逢いますと拍手を送りたくなります。

仕事場を出ると優しい父である　木本如洲

誰方でも優しい父であり夫である事を望んでおられますが、仕事に関しては近寄り難いきびしさ、これが本当の男なのでしょう。

折り鶴を千枚折ってから叛く　木村たけし

与えられたノルマをやり通して身軽になった所で自分の意志を貫く。根性に脱帽。

ベテランが一番先に出社する　上田柳影

一芸にすぐれた人は何をさせてもコナせる社長では平凡、楽しく働いて部下の面倒見もよいベテランなのでしょうね。

字足らずを埋めるやさしい送りがな　桜沢あか里

女性らしい思いやりのこもる、ほのぼのとした嬉しい抒情が感じられる。

最低の顔に撮れてる免許証　高野宵草

自惚れがあって世間に顔を出し。他人様は最低と思っていないですよ。自信を持って。

無理の利く若さ深夜の稼ぎだか　荒田つる

まさかソープランド？ではないでしょうね若さって素晴らしい。今日が一番若い日なんですから大切にしましょうね。

学歴はないが炎天下には強い　土橋はるお

真っ黒に陽焼けした逞しい男が浮びます。自信のある下五にすごく魅かれます。

露草のつゆのなさけを真に受けて　小村てい子

女とは愛らしい者です。夢二の絵を彷彿させる。人の世のはかなさを感じます。

医者変えてチョッピリ飲める酒煙草　川原章久

健康管理は自分自身のためです。医者かえての面白さですが、面白がっていては駄目ですよ。

母さんのパートで塾へ行かせられ　森山英子

親の心子知らず。母親の苦労は母親になって判るそうです。お互いに頑張って下さい。

大器晩成信じぬ妻となりはてる　蔵重成人

口でけなして心で褒める。永年共に暮らせば冗談も度が過ぎてくる。ひたすらすがりつく愛らしい奥さんのために頑張って下さい。

ファッションの秋です街へ出てみよう　田村きみ子

天高くさわやかな秋、外の空気を一杯吸って英気を養い見聞を広めましょう。

カラオケに行く日の妻は行き届き　竹川憲一

脛に傷を持つと優しいとか、でもないでしょうけど近頃の旦那様は優しいですね。用事だけはキッチリ済ませてウンとお二人で若返えり楽しんで下さい。

句中の切れ目

竹内紫鋳

今日、作文をするとき句点（。）や読点（、）を使わぬ人はないだろう。しかし、読点の打ち方については、人により差がかなりある。教育勅語をまだ頭に浮べられる年輩の人は、概して読点の打ち方が少ないようである。

戦後、仮名がきがふえた文章の中を親切に区切る習慣がついたせいか、近年、新聞社・出版社では方針が固まったらしい。私の友人の学者は、原稿に出版社で読点が追加され、それが不満だったと漏らしていたことがある。

ベストセラーだった『窓ぎわのトットちゃん』の一節を挙げてみる。原文中の句読点を全部外して出すから、読者は「自分ならここに打つ」と思う個所を考えてほしい。

トットちゃんが　きのう　校長先生から
教えていただいた　自分の教室である　電
車のドアに手をかけたとき　まだ校庭には
誰の姿も見えなかった　今と違って　昔
の電車は　外から開くように　ドアに取手
がついていた　両手で　その取手を持って
右に引くと　ドアは　すぐ開いた　トッ
トちゃんは　ドキドキしながら　そーっと
首をつっこんで　中を見てみた（原著P38）

以上は四文から成っている。私は知人三十人に見せて、マルの位置はすぐ知らせ、テンは各自の考えに従って打ってもらった。結果は、読点の数は、最大十一、最少二、平均七・四であった。なお、テンの打ち方で文意の変る可能性はないようだった。

ところで、原著では、読点はなんと十七個もある。つまり、右の出題文で句点以外のアキに、全部テンが付いていたのである。そこまで告げると、それは多いなあ、と皆がいう。発売時、原著を通読したが、そんなことに全く気づかなかった、という人もいた。『悪文の構造』の著者、千早耿一郎氏は、読点は八個（うち二個は略せるが）にしたいと言い、理由も示した。ある英語教師は、自分なら二個にするが、ルールのない日本語では、二個でも十七個でもそれは筆者の趣味の問題だ、という意見を述べた。

日ごろ長文（とくに翻訳文）を扱っていると、抜きさしならぬ大事な句読点があることに気づく。次に、付けても付けなくてもよいテンがあることを知り、さらには、付けすぎて文の骨組を見失うほどなのに本人は癖で多数打っていた原稿にも出会う。

以上は前置きの話だが、我々の手がける一行の章句は、切れ目を示さずに書いても十分なのであろうか。

×　×　×

上手下手は別として拙句を書いてみる。

記録者も相手も女性　棋士の汗

テレビのお好み対局の光景から――である。

門弟の名誉教授の追悼記

印刷はアキがなく、句評には「門弟の名誉」で切れるという断りがついて紙面に載っていた。しかし、これはケガの功名というもので

あったらしい。実は、作句した私の心積りは

「八十代の大学者の逝去……その直弟子で今は六十何歳の名誉教授が弔辞や追悼文を呈している……そういう長寿国の学者世界の断面がある」

というところであった。

読者も、ときどきとまどう句に出会うであろうが、何しろ短歌より短い句に、読点などは打たないもの、と俳界柳界では決まっていた。しかし大抵の句には切れ目がある。

俳人はこれにあまり問題を感じないらしい。何も一字分アキをとらなくても、切れ字の、「や」が大いに効果を発揮する。しかし、口語体中心で、常用漢字・新かなづかいを本旨とする川柳では「や」は軽い接続詞と思っているから、「古池や」と言わず、「○○池」という五音の体言を使う傾向がある。また、中七音の終りで切れているのに連体詞と受取られても困る、という心配を抱いたままだ。

そこで、テンを打つよりこぎれいに一字のアキを設ける案が生れた。人によっては、句集を作るときにそうする。例えば、橘高薫風の『肉眼』では

建国祭　寒の卵に血がまじり

横縞の雪となりたり　霊柩車

など、半数近くの句に一字アキをとっている。

× × ×

一方、初めにふれたように、一行詩以外の大衆向け文章には、読みやすいように読点をつける習慣が広がったように思う。各自は、自分の手帖に「テン抜き」で記入する癖がついているので、原稿にそれが現れ、私のような校閲者がテンを足す場合が多い。もちろん「ぎなた読み」をするような無知な読者を相手にしない――という態度もあろう。が、一秒でも二秒でもよけいな時間を費やさせない、という気配りも作文時には必要である。

句読点のほかに、両ダッシやカッコが評論文・翻訳文に必要になるものである。新聞では、長く続いた見解の一節の終りに片ダッシを入れ、さらに記者として言い継ぐことがある。私もこの手はやるが、拙句では

来客は表門へ――の不親切

が、あるにはある。十七音より少ない語数で川柳家（木村半文銭？）の作ったものに

元日――昏る

があり、印象に残っている。

会社の社内報には、ズブの素人がレイアウトするせいか、俳句といえば五七五と思い、上五、中七の次に一マスずつあけた形で十句もそろえて刷る例がかなりある。その編集者に、古川柳の

通りぬけ無用で通りぬけが知れ

を見せると、しばらくキョトンとしている。そこでカッコをつけてやると、ハハンと分かるらしい。要するに一般人は、十七音句に対する理解が浅いのである。一〇〇〇字の随筆は読んでくれても、句が続いて出るとたちまち本を閉じる、そういう友人が多い。

◇

川柳塔社常任理事会（9月1日）

出席者＝栞・薫風・形水・紫香・太茂津・与呂志・文秋・萬的・雀踊子・凡九郎・白渓子・杜的・庸佑・鬼遊・岳人・重人・小路・笛生・寿馬・智子・正坊・武庫坊・一二三・史好

〈議題並に報告事項〉

▽吉岡きみえ（出雲市）堀江芳子（島根県）両氏を新しく参事に選任。

▽近藤一途氏（寝屋川市）の同人推薦を了承。

▽本誌に女性コーナーを新設することになり62年1月号からスタートする。

▽61年度路郎賞・川柳塔賞を別稿（34P）の如く決定。

■**10月**の常任理事会は**1日**（水）

初歩教室

題 ― 城 ―

阿萬萬的

今月の課題「城」に対しまして、川柳塔社が企画している中国の旅の関係から万里の長城の句があるのかと想像していましたが残念ながら一句も見当りませんでした。ただ一句外国の城の句がありましたので、それから

謎秘めてラインの古城は聳え立つ　寿美子
そのあとは日本の城と我が家と女の城ばかりでした。そして城には哀話が秘められて

どの城も深い歴史の顔があり　悦子
籠城で果てて誇りを失なわず　輝月
この城のどこで女とたわむれし　周三
城奥で泣いた女のある城仰ぐ　テルミ
（大奥で泣いた女もいたお城）
城の石戦火の跡をとどめてる　太郎
（城の石の戦火の跡に松の影）
焼けおちた城趾に赤い陽が沈む　喜与志
落城とまごう夕陽の古城かな　やすお
（古城落日昔へつづく詩を綴る）
石垣に逆さ地蔵のおわす城　勝美
ははん、大和郡山のお城ですね。
㊥・×の印が語る城の石　信子
（何を語る印か城の石の謎）
城を訪ねるとカメラをかまえて見たく　慶子
城の花やはり桜がよく似合う
（日本のお城桜がよく似合う）
城入れて撮ると人間小さく撮れ　兼治郎
（城をバックに撮ると人間小さくなる）
ふる里の城には思い出が沢山詰まっていて　サワ子
故郷が近づき城を見た安堵　久子
なつかしい傷に出合った里の城
（なつかしい傷も残っていたお城）
仰ぎ見る城は苦労を知ってくれ　遊光
出稼ぎに故郷の城はあたたかく　輝月
（Uターンへ故郷の城のあたたかく）
天守閣は昔、殿が街を見はるかす所であり　温子
吾が街も箱庭にする天守閣　寿美子
白鷺城拡がる街を見つめてる　隆積
名城を仰ぎ天下をとった気に
（天守閣からの景色に男の詩）
城捨てて酒を枕の山頭火　一郎
（城捨てて酒と旅する山頭火）
ふる里は風光明媚な城下町　千代女
（ふる里は名君の居た城下町）
下駄の音格子戸開ける城下町　陽子
城下町絣が似合う娘が通る　房子
城下町しゃれたブティック守る女　てる
城下町古びたのれんに聞く歴史　白峰
（城下町に薬草問屋というのれん）
観光でそぞろ歩きの城下町　トキワ
（団体ぞろぞろ悲話も聞きつつ城下町）
バイパスですっかり変った城下町　明吉
面影を地名が残す城下町　春枝
料亭のお内儀の気品城下町　よし津
故里の城で初釜初お客　遊光
（城跡の野点茶へ梅の花薫る）
大阪落城の哀史につながるものに　新造
落城の悲運お茶茶につきまとい　すみれ
淀君の悔しさ軋む大阪城　繁男
空濠の抜け穴覆う夏の草　房子
城跡の雑草昔を語らない
だが名城も時の流れと共に　善太郎
名城も蟻に喰われて大手術　兼治郎
世の移り名城ビルに見下され　稔
ツインビルうつむく下に大阪城　露芳
ツインビル今太閤のナウイ城　実男
昔城今はビルには追いつけず
（古城落月ビルの谷間に追い込まれ）
平和ですねえ、カルガモお引越の句も
お巡りも出てカルガモのお引越し　純子
宮城のお堀へカルガモお引越し　トキワ
そして平和な市民たちのシンボルに
再建の城は平和のシンボルに　やすお
（平和のシンボルにしようよ城の白い壁）
宮城へ頭を下げる母の杖　純子
城の中今エレベーターで上り下り　千代女
復元の城エレベーターの天守閣　保夫
（復元の天守はエレベーターがつき）
原爆の街にもお城ひとつあり　奈美子
ではお城風景ETCとゆきますか。

城の鳩雀と一緒に餌をつつく　東　雲
雀の子お城の中でよく育ち　善太郎
城の橋風船売りを子が囲む　太　郎
気分転換誰と行きましょ大阪城　悦　子
お城までジョギングの足延ばす朝　温　子
国替えの城主慕って姉妹都市　喜与志
城壁のゆるきカーブに赤き蔦　久留美
照明に浮ぶ天守へ夕涼み　白　峰
下五〝夕涼み〟を遠花火としてみては如何。
城跡があの恋あの意地知っている　昭　治
（城跡が昔の恋を知っている）
城の灯は沖の漁船の道しるべ　新　造
（沖の漁船の舟うたお城までなびき）
夏ですよと城から先に蟬が啼き　東　雲
（夏を知らせる蟬が城から啼きはじめ）
明石城選抜戦とよく写り　喜　俊
（ホームランの行方に写る明石城）
これだけのものかと出口へ城の中　奈美子
（これだけのものかと城の出口へ来）
お城も出口まで来たので次は女の城。
本音吐く女の城の更衣室　保　夫
本丸はキッチンにある妻の城　義　男
台所でんと腰据え母の城　慶　子
（台所は母の城です腰の幅）
譲られた女の城が広すぎて　博　子
マイホーム城代家老がとりしきる　保
（マイホーム城代家老は妻がする）
年々に塀が高まる女城　信　子
四十年妻の城にも苔むしぬ　弧　舟

この城を離すものかと寡婦の意地　ただし
（寡婦の意地で護るこの城朽ちてくる）
城守る妻が時どき翔びたがり　春　枝
城守る母の背だんだんまるくなる　久　子
涙腺を突かれ落城する頑固　テルミ
（涙腺へ女の城の弱かりき）
女の城の次に男の城にこんなのが……
更生法届けて城の旗降ろす　章　久
ライバルへ城明け渡す日の誤算　弧　舟
小企業五人で守る城があり　金　吾
（小企業たった五人で護る城）
糸口は摑めた雨の天守閣　たかし
ローン残る城白蟻に蝕ばまれ　よし津
（ローンまだ残る我が城蝕ばまれ）
単身の城だんだんと色褪せる　里　子
不器用な男の城に堀がない　保
大の字に寝ても我が城遠慮なく　凡　太
本棚に淋しがり屋の城がある　一　郎
暖かいものに家庭の城がありますね。
抜け道も要らぬ夫婦の城がある　はるお
狭くとも我が城ビールの栓飛ばす　克　子
下五〝栓飛ばす〟は軽く〝栓を抜く〟としては。
ちっぽけな家でも我が家の城の味　実　男
ガタピシの城を持ってる倖せよ　昭　治
小さな城取柄はひとつ家族の輪　円　女
（家族の和が取柄小さな城ながら）
子宝と和気藹々の父の城　豊　太
狭くとも我に和める城があり　吟　平
ローンの城家族ニコニコ2DK　喜　俊

（ローンの城ながら家族の灯はぬくく）
だが子供が育って行くと……
一城の主となる子にほっとする　陽　子
城の鍵それぞれ持った核家族　里　子
誰にでも見せてられない城がある　姿　洋
三十年ガラスの城とは気付かない　博　子
（ガラスの城と気付かず三十年仕え）
城つくりの苦しさ知らぬ三代目　サワ子
ままごとに入れてくれない孫の城　姿　洋
わが城を孫の飾りのここかしこ　吟　平
夫の城次第に堀が埋められる　金　吾
年金の城は変化を好まない　芳　水
子のために城明け渡す退職後　芳　水
（老いては子に城明け渡す齢となり）
我が城と頑固に居すわる老いの性　久留美
石頭生きた字引きの城を持つ　一　郎
（石頭の角が目につく城を持ち）
改築は息子まかせの古い城　志　重
そして最後は
年金で南無阿弥陀仏の城守る　はるお
後尻を見てくれる子へ城ゆずる　八重子
（葬式出してくれそうな子へ城譲る）
ちと淋し過ぎましたかね。

◇

題「**屋根**」　**10月10日締切**（12月号発表）
ハガキに5句以内
「自立」　11月10日締切（1月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一―九九　阿萬萬的

嵐

河合茂雄選

青嵐嫁った娘の部屋通り抜け　紀美女
哲学の道に嵐と来る不倫　規不風
嵐吹く夜も同じ亡母の位置　寿恵子
嵐吹く夜灯台は慈父になる　本蔭棒
ライバルが嵐を呼ぶ雲連れて来る　悟郎
丸くなり嵐の街をくぐり抜け　ろ亭
夏帽子嵐に消えた甘い夢　森脇和子
悪友と嵐の中で飲んでいる宵　明
嵐呼ぶ男は親友を寄せつけぬ　朴竜
台風が過ぎて忙し看板屋　高明
離婚まで考えました嵐の夜　太郎
嵐の種蒔いていったのは美人　枯梢
嵐しずまって慰謝料がいるそうな　文平
嵐吹く皿のいちごの孤独感　大柏
この後は嵐になりそう席外す　保夫
不器用に生きて嵐にかこまれる　カズエ
先立たれ女嵐に立ち向う　鶏汀
残像が愛なら嵐の夜にも耐え　美穂子
嵐にも馴れて戦後をまだ生きる　与呂志
辛抱の胸を嵐がつっ走る　新一郎
地球儀を廻せばどこかで嵐吹く　白峰
根回しの一人が口火切る嵐　豊
吹きまくる嵐がチャンスかも知れぬ　一郎
人生の嵐へ漕ぎ出す夫婦舟　米朝
嵐までゆかぬ夫婦の隙間風　佳雲
もたもたとするから嵐に巻き込まれ　軒太楼
妻の眼を外して嵐避けている　凡太
嵐でも来ぬかと思う時もある　弘朗
美しく生れ嵐を抱いている　可住
八月になると嵐が胸に来る　里風
女には嬉しい嵐だったかも　三枝子
焼けぼっくいやがて嵐になるだろに　洛酔
民法の隙間に吹いてくる嵐　三五島
羅針盤だけが嵐に逆らわず　伊津志
喝采の嵐に自分見失い　テル
妻と腕組むと嵐が外れてゆく　明水
嵐にも亀は歩幅を崩さない　正敏
佳
嵐には素直に脱いだ登山靴　雄々
敗北の嵐に見えぬ旗じるし　勝美
石女の髪を嵐が吹き分ける　虹汀
裏切った女を想う嵐の夜　静子
いらいらとさせのろのろと来る嵐　右近
人
米びつの底に嵐の音がある　雀踊子
地
嵐になれば逃げ込む小屋が一つある　たず子
天
父の手を握れば嵐怖くない　ちかし
軸
城攻めに嵐が味方してくれる

急ぐ

原田メイシュン選

最初から急ぐ気のない生返事　劣
急がない気前が万年平社員　多駄子
鈍行で急かずあわてず旅の朝　久留美
立喰のうどんを急かす発車ベル　玉恵
急ぐとも言えず上司の盃を受け　和子
迎え傘急ぐ途中で止むにくさ　有佳
急ぐなら追い越し車線とんでゆけ　蛍
急ぎあわててステテコの裏表　妻子
娘の急く訳は母親だけが知る　白峰
結納を急かす女の岩田帯　高明
せっかちな夫に引かれて五十年　輝月
急用に遮断機ゆっくり降りてくる　たず子
急がない旅鈍行の温かさ　三五島
短か日を急ぐ夜道に張る乳房　砥代
幸せは帰りを急ぐ家があり　大柏
急がないお仕立物は祖母にさせ　よし津
初産を急ぎ知らせる母のもと　寿美礼
宅急便で届く故郷の母の味　悠泉
急患が来て順番を飛ばされる　新造
初心者の娘に急げとは言えず　素身郎
よい返事持って仲人急ぎ足　右近
忙しい時に煙草を点けたがり　花代

月末の早さへ急ぐ子の学資　みどり
夏の月家路を急ぐ野良帰り　章久
急ぐのに電話のベルが呼びとめる　晃世
急ぐからのけとは言えぬ白い杖　伊津志
エスカレーター二段飛びして何急ぐ　豊
紅落し愛児の許へ急ぐママ　義美
年甲斐もなく急ぐからけつまずき　諷云児
夫婦坂急ぐ事なくきた二人　美穂子
娘のお産キャンセル待ちで気が急ぐ　純子
夏休み皆忙しく西ひがし　智恵子
畦小径隣へ走る急な用　代仕男
秒針に追いかけられて朝の靴　カズエ
気がかりは急いだ朝の火の始末　本蔭棒
急くほど身体がついて来ない齢　灸六
佳
急ぐことないわよ長い夫婦坂　三枝子
つまみ喰い急いでのどに拒絶され　繁男
急ぎ読みしたいが老眼まならず　雅風
鍵っ子の灯に詫びながら急ぐ足　テル
エレベーターに出前が急ぐ昼のビル　保夫
急がずに漕いで行こうよ夫婦舟　進
人
急ぐのに玄関先で母の愚痴　一郎
地
子の舟よ急げ送り火消えぬ間に　久仁於
天
百点をもらって急ぐランドセル　みのる
軸
消防車が急ぎ弥次馬も走る火事現場

全力

飯田悦郎選

全力をかけて雛鳥飛ぶ準備　純子
獲物追う鷹は全力急降下　繁男
絵に彫刻全力みなぎる美しさ　有佳
全力で生きるおとこの太い指　紀雄
全力を尽して散った忠魂碑　保夫
全力のペンピストルを黙らせる　正敏
全力を挙げっぱなしの捜査陣　凡太
何事も全力出し切る父の背な　悟郎
窓際にいても全力出している　重人
全力を出したか肩がゆれている　あき
チームワーク全力あげる青春譜　輝月
全力で働くわりに報われず　鵜汀
持ち駒のない全力で幸摑む　実男
全力で生きよう仕事の唄がある　洛酔
全力の素直に疲れた顔をする　三五島
全力へ流した汗は惜しまない　軒太楼
全力であなたに廻す愛の独楽　砥代
全力を出さない中に時間来る　綾珠
全力のパパへ感謝の酌をする　芳水
全力の医術奇跡の夜が明ける　静子
全力投球かわく間がないユニホーム　京子
全力を集めて晴れの甲子園　たず子
全力の汗にテープが待っている　忠三
全力をこの一球にかけて投げ　喜久夫
その時へ出し切る力ためている　さと美
全力で波のり越えた夫婦船　美穂子
全力で樋つく子にもひと理屈　三枝子
全力で又も危い橋渡る　あやめ
エリートが全速力で追って来る　白峰
全力で来いと先輩胸を出し　本蔭棒
全力を懸けた男の矢が折れる　久仁於
全力を出してもライバルふり向かぬ　雀踊子
全力を出してもしあわせうしろむき　螢
有る丈けの力出し合う補回戦　虹汀
全力疾走後を振り向く暇がない　灸六
佳
全力のポーズで余力ためている　奈美子
全力を上手に使う変化球　雄々
全力夫に出さす妻の知恵　規不風
全力が仇となってる勇み足　勝美
全力の息が九回裏で切れ　明水
人
妻の目に俺の全力まだ足りず　木魚
地
全力で勝てぬと知った変化球　優
天
経験の腕に全力賭けて見る　はるお
軸
全力を歩で崩された関ヶ原

柳界展望

集録・板尾岳人

★第28回西日本川柳雲仙大会及び可宵句碑まつり
日・10月26日（日）10時
所・雲仙国立公園・有隣荘
いろづく　去来川巨城選
運　上杉　波路選
記念　久保田以兆選
個室　高谷　梵鐘選
ふくろう　西尾　栞選
割り箸　森　紫苑荘選
片便り　吉岡　龍城選
炎　斉藤　大雄選
舞　藤田きよし選
旅路　池田　可宵選
エッセイ　永田　帆船選
投句〆切り10月15日2句
投句料・千円
投句先〒850長崎市戸町二丁目一六七―一　坂本　柳峯
主催　長崎川柳社

長崎県川柳協会

★第一回渡辺銀雨賞・すずむし全国誌上川柳大会
課題　しあわせ　2句
選者　佐藤岳俊他15名共選
会費　千円〆切り10月30日
発表・62年1月
投句先＝〒018-17秋田県南秋田郡五城目町東磯の目町
菊地一竿方　川柳すずむし

★川柳都大路百号記念誌上川柳大会
題と選者
父　天根　夢草選
距離　伊藤　入仙選
吹く　橘高　薫風選
珈琲　保木　寿選
人魚　堀　豊次選
舞踏会　森中恵美子選
百　田中　秀果選
各題2句・締切り11月15日
必着・投句料千円
発表62年2月号
適当な用紙に2句連句・1枚毎に姓雅号を明記
宛先・〒603京都市北区紫野北舟岡町一　奥山晴生方
都大路川柳社誌上川柳大会係

★60余年川柳一筋の柳人・太田亀甲氏（本社同人）の句碑が建立された。
仁多郡横田町運動公園内にみごとな川石に雄渾な文字が彫られている。
船通山の
稲妻おろち
吐く火と見　亀甲

★愛情一筋、ひたすら生き抜く「二人三脚」の記録
月刊誌「山陰の手帳」八月号に右の標題でおしどり夫婦、堀江正朗・芳子夫妻の句集「二人三脚」が大きく紹介され、山陰の川柳を知らぬ人々にも大きな反響を呼んだ。

★お座敷列車で川柳の旅を
日・11月1日（土）11月2日（日）鳥取駅発8時
20分一泊二日
参加費・三九、五〇〇円
定員一〇〇名
申込み・鳥取県下各川柳会又は両川洋々宛
申込み〆切り10月20日
行先・津和野＝湯田温泉＝秋芳洞＝萩焼会館＝松陰神社＝東萩＝鳥取着2日PM8
時頃の予定
兼題＝畳・必殺・鯉・夜汽車・カラオケ
席題＝車中にて5題発表
各題2句・投句拝辞
主催　鳥取県川柳作家協会

★第10回茗人賞発表川柳大会を兼ね茗人忌が8月24日鳥取駅前鴻南閣で開催、本社から紫香・雀踊子・萬的・杜的・太茂津・寿馬・

堺まつり協賛　第40回　堺市民川柳の会

とき　**昭和61年10月19日**（日）
ところ　大阪府立堺労働セッツルメント
堺市熊野町西一丁二―33―六五三三）
（阪堺線大小路駅西三井銀行裏）
「私の川柳」　墨作二郎
講演
題と選者
「珈琲」　神平　狂虎選
「飾る」　西出　楓楽選
「大人」　河内　天笑選
「天」　竹山　逸郎選
「柿」　森中恵美子選
「セーター」　中尾　藻介選
「椅子」　礒野いさむ選
席題なし・投句拝辞
締切午後1時半（各題2句）
賞　各題秀句に呈賞
会費　一、〇〇〇円（記念品・作品集呈）
主催　堺川柳会
堺番傘川柳会

三男・紀雄・諷云児・正博　準茗人賞
佳秋・岳人・〆女・英子・　惜しみなく贈った愛の挽歌
登志代・幸。以上16名が参　聞く　由谷　貞子
加。　お喋りなボストンバッグと
茗人賞　帰省する　門脇　楓
ライバルの掌の中に歩がひ　佳作に小杉紀子、中曽冷岸
とつある　土橋　蛍　門脇かずお、中原諷人、小

新役員紹介

参事

出雲市　吉岡きみえ

島根県　堀江芳子

新同人紹介

近藤一途

―薫風・紫香・柳宏子・小路推薦

川島諷云児

―水客・紫香・杜的・白渓子推薦

椋深山5氏が入賞された。

▽**同人消息及びお便り**△

■第38回西日本（弓削）川柳大会へ本社同人多数参加総合第2位の議会議長賞に新家完司氏、第8位の山陽放送賞に水粉千翁氏がそれぞれ受賞された。

■8月26日再入院。9月3日右突発性肺気胸発見安静加療を命じられました。

（川口　弘生）

▽**訂正**△

9月号61P「英訳句」のサブタイトル―著者との話題→若者との話題

寺尾俊平句集「葦川」発刊記念川柳大会

日時　昭和61年11月2日（日）9時開場

会場　岡山ロイヤルホテル
岡山市絵図町2―4
電話（086２）54―1155
（岡山駅西口より徒歩10分）

会費　一、五〇〇円（昼食別・発表誌呈）

課題　柊馬40分・在野学　石田　柊馬氏
「疵（傷・創）」　藤川　良子選
「祷り（祈り）」　長町　一吠選
「諸　君」　小島　蘭幸選
「雲」　森本夷一郎選
「白い風景」　渡辺　和尾選
「燭」　八木　千代選
「蒼　天」　酒谷　愛郷選
「櫂」　森中恵美子選
各題2句・席題なし
11時半〆切・欠席投句拝辞

懇親会　五、〇〇〇円（当日受付）
宿泊申込み・お問合せは
〒709―04　岡山県和気郡和気町日室90―1
石部　明
電話（08699）2―0768

主催　「俊平さんのこころを覗いてみませんか」をすすめる会

俊平さんのこころを覗いてみませんか

第33回 八尾市文化祭

市民川柳大会

とき 昭和61年10月10日(祝)正午開場

ところ 八尾市商工会議所3階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南300m
八尾市役所向い側

題と選者

挨拶　墨　作二郎選
正しい　野村太茂津選
眉　平山　繁夫選
屋根　森中恵美子選
階段　室田　千尋選
親切　西尾　栞選
席題当日一題　宮西　弥生選
各題2句　締切午後1時30分

会費 一、〇〇〇円(作品集・鉢植花)

懇親会 三、〇〇〇円

主催　八尾市教育委員会
八尾市立公民館
後援　八尾菜の花句会

第20回 東大阪市文化祭参加

第14回 市民川柳大会

日時 昭和61年10月12日(日)正午開場

会場 東大阪市立社会教育センター
近鉄布施駅北へ5分
電話〇六―七八九―四一〇〇

おはなし 「歴史句あれこれ」　片岡　つとむ

宿題

手話　珍斉源次郎選
網　久保田元紀選
メガネ　塩満　敏選
人　榎本　信治選
灯　土田　欣之選
いのち　木野由紀子選
白い　高杉　鬼遊選
一題　井関　滋啓選
各題2句・締切一時半

席題

各題秀吟賞・賞状・楯

賞

会費 一、〇〇〇円

主催　東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

富田林市民文化祭

川柳大会

日時 昭和61年10月18日(土)12時開場

会場 富田林市立中央公民館・別館
(近鉄南大阪線富田林駅下車国道右へ三分左側・図書館内)

兼題及び選者 各題3句

「愛」　河内　月子選
「胃」　春城　年代選
「雨」　藤村　〆女選
「絵」　小出　智子選
「音」　池　森子選

席題 当日二題・〆切13時30分
席題選者　森中恵美子・橘高薫風

会費 無料

主催　富田柳会
後援　富田林市教育委員会
富田林市文化連盟

岸和田市文化祭参加

第36回市民川柳大会

日　時　**昭和61年10月26日**(日)正午開場
会　場　岸和田市民会館地下会議室
おはなし　西田　柳宏子
兼　題　揃う　中田たつお選
発　表　野村太茂津選
素　顔　森中恵美子選
調　子　榎本　聰夢選
真　似　中尾　藻介選
平　和　橘高　薫風選
席　題　高杉　鬼遊選
一題　各題2句（出席者に限る）
〆切2時
会　費　五百円（大会誌呈）
賞　市長賞・市会議長賞・教育委員会賞・文化協会賞・操子賞・きしせん賞
◇連絡先　岸和田市土生町一九八九―八
高橋　操子
電〇七二四㉒〇〇四九
主催　岸和田川柳会

寝屋川市民川柳大会

日　時　**昭和61年11月3日**(祝)開場12時半
会　場　寝屋川市立総合センター4階
寝屋川市駅より京阪バス・総合センター前下車すぐ
柳　話　山本　翠公
宿　題　「つなぐ」　里　小路選
「羽」　山本　礫選
「敵」　上田　佳風選
「タレント」　西田柳宏子選
「体温」　墨　作二郎選
「絵」　安井　久子選
「平和」　橘高　薫風選
席　題　なし
各題二句・締切1時半
会　費　七〇〇円
賞　各題秀吟賞と選者色紙・入選句集
主催　寝屋川市文化連盟
後援　川柳ねやがわ

61年度唐津市文化祭参加

川柳大会

日　時　**昭和61年11月9日**(日)11時開場
場　所　唐津市文化会館大会議室
（唐津神社横）
題と選者
錨　大城　俊文選
噂　古川　静江選
きまぐれ　撫尾　清明選
鬼　田口　虹汀選
油断　野村太茂津選
汗　西尾　栞選
欲　参加者で互選
◇各題とも事前投句（締切10月24日）
投句料一、〇〇〇円
（現金書留か小為替）
◇当日会費一、〇〇〇円
（昼食・大会誌呈）
◇投句先　〒847唐津市栄町二五七〇―四
川柳塔唐津支部
（久保　正敏）

本社　九月句会

九月八日(月)　午後六時
メンズファッションセンター

今月のおはなしは橘高薫風氏。近く第四句集「愛染」を出版されるが、「その編集にあたり、これまでの自分の句を改めて見て気づいたことは、最初の頃の句はみな先人の真似ごとをしている」と〝檻の鶴……〟など二、三の例をあげ、しかし「そうして先輩の気に入った句を真似して私は成長していったように思う。盗作はもちろん許すべからざる一線はあるが、厳格の中にも、やさしさをもって当ることも必要ではないか」と述べられた。

今月の呼名賞は波部白洋、山片紀雄、福浦勝晴の三氏。

月間賞は清水健司氏が獲得。　(S)

(進行—天笑)　(受付—月子・年代)
(記録—射月芳・健司・隆二)

出席者—春蘭・笛生・作二郎・凡九郎・千代三・重人・悦郎・一郎・紀雄・眉水・栞・あいき・美智子・はつ絵・いわる・鬼遊・杜的・幸・白渓子・諷云児・佳秋・太茂津・武庫坊・年代・紫香・三男・登志代・柳影・満津子・道子・白峰・佐津乃・勝美・隆二・英子・章久・英士子・狸村・白洋・月子・天笑・柳宏子・郁栄・三十四・岳人・寿馬・規不風・萬的・ただし・東雲・愛論・洋敏・池田寿美子・花村・喜風・正坊・白兎・射月芳・千賀子・与呂志・文秋・庸佑・柳右子・好子・勝晴・山久・外吉・冬葉・柳伸・八斗酵・形水・楓楽・智子・敏・小路・度・藤子・史好・和子・寿子・美代子・頂留子・寿美・光代・健司・泰子・吸江・薫風・雀踊子・みつ子・蕉露

席題「目立つ」　樫谷寿馬選

ヨメはんが目立つとロクなことがない　楓楽
目立つ日の疑惑鏡が曇り出す　悦郎
落日の大きさ目立つのはよそう　萬的
騙しよい女が赤い靴をはく　雀踊子
背ボタン一つ外れたのが目立つ　眉水
目立つのが恐く小さくなっている　いわる
目立ちたい男に勘定まかせとき　天笑
生涯を目立つことない母の椅子　藤子
一言居士とにかく挙手で愚見いう　三十四
目立たない主役に今日もある焦り　幸
シャガールが好きで目立っている女　作二郎
目立たない露草が好き秋が好き　みつ子
包丁は研ぐまい目立つから困る　白兎
目立ちたい男に流れ矢が当る　雀踊子
魂胆があって目立った意見出す　三男
目立たない男が爆弾抱いている　射月芳
控え目にするからよけい目立ち出す　白兎
目立たないうちに噂の蓋をする　諷云児
通夜に来て一人離れている女　武庫坊
入園の日から目立っているこども　紫香
師の前でやっぱり目立つ噂もち　与呂志
目立つように別れて陰で手を合す　規不風
目立ち屋のくせに少々小心で　月子
よく目立つ服を案山子に着せてやる　幸
的を射た意見末席見直され　重人
マイク持つとたんに目立つ人になり　与呂志
目立つようわざと遅れて来る男　三男
目立たない母が一番強かった　楓楽
紅一点すこし美人に見えてくる　重人
よく目立つように酌をして回り　眉水
腕組まぬ二人が目立つ中の島　柳伸
めだたない一人どっさり貯めてはる　度
自信あるときは派手目の服をよる　道子
黙ってても心が光るから目立つ　いわる
黒を着て悲しいまでに白い首　文秋
ウイットがまず上役の目に止り　悦郎
目立たないくぼみに埋めて置く情け　みつ子
目立たないけど存在感のあるお方　光代
目立たない子の底力信じてる　寿馬
タレントが目立たぬようになって秋　月子

席題「ストレス」　津守柳伸選

ストレスが溜まると妻は家出する

ストレスの解消離婚考える　笛生
ストレスを取ってあげよう馬鹿になる　道子
名月にストレス少し癒えはじめ　頂留子
ストレスをとばす夜更けの排気音　いわゑ
ストレスを飛ばしてくれる子の笑顔　千賀子
ストレスで禿けたと妻は信じない　規不風
怒鳴るだけ怒鳴って父はスグに寝る　武庫坊
ストレスを溶かすお酒を飲んでいる　太茂津
ストレスを一つ空缶踏みつぶす　凡九郎
ストレス解消ええ加減にしなはれや　愛論
ストレスが溜ってますねん胃が痛い　小路
ストレスの解消ママのレオタード　英子
真夏日のストレスカレー食べている　楓楽
ストレスへ香辛料が利いてこず　洋敏
給料が増えてストレス霧散する　光代
ストレスと共に飲み干す大ジョッキ　寿美
ネクタイを結んでストレス溜めている　藤子
ストレスの木馬転んでばかりいる　与呂志
ストレスをおばはんちゃんと受け止める　天笑
忙しいのでストレスがたまらない　武庫坊
ストレスを気にするような顔でなし　正坊
ストレスの妻バーゲンを買いあさり　楓楽
長電話したらストレス消えていた　萬的
一進一退ストレスたまるタイガース　庸佑
ストレスの原因作っているあなた　外吉
お手当てが途切れマルチーズにあたる　笛生
ストレスを吐き出す夏の山制覇　登志代
カラオケが僕のストレス解消器　満津子
さようならストレス妻と小旅行　幸
ストレスが甘いカクテル飲みたがる　章久
ストレスを流す井戸端蟬が聞く　庸佑
ストレスをゴルフボールにこめて打つ　三十四
ストレスが謀叛の道へそれてゆく　千代三
メランコリーなストレスは秋に出る　射月芳
粗大ゴミ父はストレス溜めている　光代
切り替えが上手くストレス寄せ付けず　紀雄
ストレスがもぐら叩きで晴れるなら　作二郎
ストレスの父よ煙草をよさないか　柳伸
ストレスを捨てる河内の盆踊り　寿美

兼題「筆」　宮尾あいき選

池田寿美子

達筆の返事は電話でおゆるしを　寿美
筆まめな母こまごまとかな便り　白峰
達筆の手紙に返事延びにのび　寿馬
単身赴任へ少し艶やか妻の筆　岳人
恋文の筆の流れにある慕情　太茂津
虫すだく筆が時々弱くなる　英子
あの日から絵筆の紅が消えたまま　外吉
先生は悪筆授業なめられる　はつ絵
筆跡の亡母の温みを形見とす　柳宏子
写経する筆先心の乱れ知る　三男
一筆啓上総理に言いたいことがある　射月芳
筆跡を真似てたくらむ誘い状　柳伸
筆跡は亡父の頑固な右上り　楓楽
高僧の心に染みる枯れた筆　千代三
離婚状書く不運なる筆もある　天笑
人柄が伝わってくる筆運び　勝晴
毛筆でぴしっと書いた借用証　紫香
絵筆持つ秋の構図を溜めながら　寿美
紅筆に女ごころを覗かれる　蕉露
名僧の揮毫の筆が寺を建て　博子
燃えるものあって筆先よく走る　白洋
革命家と思えぬ筆の女性的　吸江
過ぎし日の秘密が匂う古い筆　天笑
短冊にまだ生きている筆達者　みつ子
わだかまり写経の筆も重くなる　重人
目録の筆がのぞいた親心　いわゑ
末筆に本音をすこし入れておき　登志代
命名の朱筆へ願いたんとこめ　敏
書を習う妻にはりこむ奈良の筆　登志代
落書きの筆に本心にじんでる　雀踊子
写経の筆楢山までを計る距離　鬼遊
字の下手な男も筆を選っている　吸江
筆跡をたどれば父の声がする　武庫坊
名人の一筆鯉が跳ね上る　いわゑ
達筆が一割男をあげている　重人
写経する筆に上手も下手もない　萬的
絵筆持つべレーは秋の色が好き　新造
筆作り生業にして筆ぶしょう　智子
雨の日のゆとりで筆を持っている　あいき
筆まめに押しまくられて今の妻　悦郎

兼題「網」　堀端三男選

欲望の網にきらめく海の蒼　ただし
魔力持つ都会の網を抜けきれず　郁栄
はたと風絶えて投網の手を休め　凡九郎
網の目の一つ一つにある想い

法の網潜り生きてる裏の道　光代
網棚に今日の疲れを置いてくる　隆二
縁側の網戸に秋が忍び寄る　白峰
網を干す流人の島に陽が沈む　正坊
網を繕う亡父を瞼に浜に住む　寿馬
網だなにそのままあった忘れもの　年代
網の目の路線が地価を押し上げる　洋敏
悪友の網にときどきひっかかる　智子
落し穴と知らず網の目をくぐる　杜的
天網恢々疎にしてもれるスキャンダル　吸江
あがいても絆の網は破れない　ただし
妻の網抜けるスリルの摘み喰い　章久
挨拶状に商魂の網張ってある　天笑
網を干す網も鱗も陽をはじく　作二郎
法の網潜る知恵者の二枚舌　蕉露
象を獲る網をリースへ電話する　鬼遊
網棚にフォーカスがあり終電車　芳子
網をつくろう喪が少しずつ明ける　郁栄
絵日記へ人より大きい網を画き　杜的
ネット裏金の卵に目が光る　章久
網棚に帽子が一つ終電車　いわる
いつからか妻の網目を抜け出せぬ　千賀子
Uターンする網棚の荷が軽い　英子
網の目をくぐった稚魚は負けていず　小路
網棚に心ころっと忘れてくる　智子
太陽が網にかかっている喜劇　美智子
網の目を抜ける呪文を知らないか　幸
愛不信何度も網で水すくう　楓楽
網干して島の絆は揺がない　重人
網にかかったメダカもさかなの匂いもつ　雀踊子
網越しに世相を睨む仁王様　狸村
妻が居て娘が来て父に網を張る　太茂津
網の目をくぐった数だけある仮面　雀踊子
破れてる網貝殻と仲が良い　健司
赤トンボ網の高さを知っている　三十四
地引き網引くと帰ったなと思う　三男

兼題「物知り」　阿萬萬的選

物知りを困らせているボールペン　悦郎
物知りで嘘も少々まぜている　はつ絵
物知りの前口上が長くなり　洋敏
阿呆になるコツを物知りから習い　美代子
戦前の事なら物知り機嫌よし　花村
物知りの顔で聴いとくクラシック　楓楽
一夜漬けの物知りだった梨を剝く　白兎
物知りで幸も不幸も背負いこむ　緑良
物知りが冬の帽子を離さない　悦郎
ちょっとおっちょこちょいで物知りで　杜的
嘱託という名で残る生き字引　三男
一夜漬さて本題でうろたえる　三十四
物知りも仮名づかいには弱いらし　白洋
物知りの脳ガラクタもつめてある　楓楽
物知りの辞典にはない新人類　弘生
裏の裏知ったばかりにはまる罠　頂留子
物知りが三人もいて座が白け　吸江
職人に手抜きのわけを訊いてみる　鬼遊
物知りでないのに母の知恵が生き　規不風
大阪の生え抜き知ったか振りへ釘　眉水
物知りがだまってちびちび秋の酒　勝晴
物知りが語るは暗い過去ばかり　紀雄
物知りが知らぬ野草も花をつけ　正坊
物知りといわれエロ作家ともいわれ　勝晴
たくあんも梅もそつなす漬けた母　白兎
学歴のない物知りが煙たがられ　白渓子
横文字に弱い物知りだってある　敏
物知りがちょっと洩らした法の裏　武庫坊
物知りが孫にパソコン教えられ　紀雄
出来事を皆知っているトンビの輪　耕花
物知りが出てきて善意ふみにじる　緑良
親戚中物知りの伯父煙たがり　年代

61年本社句会全出席者（9月迄）

森下愛論・宮園射月芳・飯田悦郎・北勝美・山本規不風・桑原喜風・高杉鬼遊・笠原吸江・墨作二郎・二宮山久・玉置重人・黒川紫香・谷垣史好・寺井東雲・川原章久・田中正坊・岩本雀踊子・松下蕉路・長谷川春蘭・吉川寿美・田中隆二・板尾岳人・荻田千代三・宮口笛生・藤田頂留子・松川杜的・稲葉冬葉・小出智子山片紀雄・辻白渓子・林はつ絵・松原寿子・西出楓楽・金井文秋・阿萬萬的・堀端三男・奥田みつ子・斉藤三十四・春城武庫坊・芳地狸村・西田柳宏子・津守柳伸・上田柳影・江口度　（44名）

物知りの夫へこます孫がいる　正坊
嫌われていると知らない物知りで　市雄
物知りで無くても禿げる時は禿げ　花村
物知りがいて退屈な旅になる　はつ絵
物知りの過去は問わないことにする　寿子
物知りの割にお行儀悪すぎる　月子
おじいちゃんはもの知りだけど字が古い　外吉
物知りにされて孤独な咳払い　柳伸
付け焼刃を物知りにされ淋しい日　萬的

兼題「女」　西田　柳宏子　選

すれ違いざまに値ぶみもして女　頂留子
女やからゆるさんと女が言う　栞
自由席女に一つ空けておく　岳人
人類の半分女でよかったな　敏
潑剌と女はリズム波に溶け　どんたく
女くさい匂いは妻のバスタオル　眉水
女には女の意地あり鍋磨く　道子
同等になっても女米を研ぐ　月子
不仕合せな女が作り笑いする　雀踊子
海の神陽の神が聞く海女の笛　美代子
物知りの女で料理音痴です　小路
手切れ金女の方が出してはる　月子
女らしい女になろう塩加減　幸
慰謝料をもらうとお肌見違える　外吉
ここだけの話を女持ち歩き　武庫坊
均等法女上位が攻めてくる　章久
原色が似合う女でよく笑う　三男
横糸の呼吸を知っている女　幸
押入れに女が忘れたお針箱　泰子
しっかりと貯めた女でまだ独り　小路
宝石売場で妻は女になっている　智子
その先は決して喋らない女将　冬葉
産むことに決めて女は強くなり　千代三
ひとり住居女であること忘れがち　満津子
白い花が好きで女は縁遠く　萬的
火を抱いた女が好きな長い髪　武庫坊
均等法されど女は子を孕む　吸江
花散って女幸福だと思う　悦郎
うそを積んで女きれいに生きている　藤子
傷ついてばかり女が堕ちてゆく　郁栄
いつまでも女でいたい紅をひく　いわゑ
その日から女般若の面を買う　年代
女になり切って葱を刻んでる　白兎
ライバルが女と知った雇用法　洋敏
吊り皮の女が降りてホッとする　耕花
梅酒くらいは飲める女と旅に出る　作二郎
子が巣立つそれから女迷い出す　美代子
私も女嫉妬もします恋もする　あいき
均等法女も赤い旗をふる　緑良
輪の中で女は外へ出たがらぬ　健司
もう喪服脱いだ女の瞳が光る　柳宏子

（清記・楓楽）

■**訂正**　9月号76P下段「雑音に馴れて女が強くなる　**規不風**」
77P中段「信号が長くて腹を立てている　**規不風**」

川柳あしなみ会
創立30周年記念

川柳大会

日時　**昭和61年11月9日**（日）11時開場
会場　NTT姫路しらさぎ会館2階
姫路市北条二一四
国鉄姫路駅南口より南へ歩10分
題と選者
「足跡」　植村客遊子選
「涙」　阿萬萬的選
「参考」　泉梨花女選
「渋滞」　松川杜的選
「年功」　行吉照路選
「貴重」　土田欣之選
「燃料」　両川洋々選
各題2句　締切13時
会費　一、〇〇〇円（投句料五〇〇円）
賞　各題3才と総合二十位まで
懇親会　会費四、〇〇〇円
参加希望の方は10月末日までに
〒672 姫路市飾磨区矢倉町一—54
保西岳詩まで
投句　出席できない方は11月5日必着
投句料（切手可）添え左記へ
〒671-12　姫路市勝原区宮田二六三—22
神原拍秋

老地柳壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・清水健司

川柳泉尾　吉川　寿美報

スケジュールの中に病気は入れてない　シマ子
九時からのパート白粉たたきつけ　道　子
五十歳折り返し点を自覚する　恭　子
振り分けの大根見事に並び居り　三　世
すすきのの夜が実年忘れさせ　文　子
からすでもよい赴任地へ飛べるなら　満州子
外航船演歌かすかに波をぬ　弘　子
巻ずしをかぶる恵方取り違え　伴　子
豆まいて守れるならばわがお城　三千代
節分に煮豆食べとく老いふたり　白　水
福は内南南東より美女来たる　敏
天下り新人ですと反り返える　美　子
ところてん新人次に控えてる　淑　子
マンガ字がまだ抜け切れぬニューフェイス　美代子
新人を肴にはずむ縄のれん　シメ子
新人に集まる期待と好奇心　トミ子
しばらくは新人らしくつつましく　義　一
春の音聞きに春のデパートへ　多和子
喋々喃々日足も伸びて蕗の薹　寿　美

川柳ねやがわ　高田　博泉報

今迄に来たこともない立候補者　悟　道
おいけいこがいつのまにやら茶話会に　千鶴子
雨降りて温泉もまた情緒あり　正　坊
同情が恋に変って眼をつぶし　すえ子
同情をこえて好奇の目がささる　なつめ
六十路坂時が一気に流れだす　増　造
七十で初めて知った露天風呂　光　子
この辺が弾む心の塩加減　志余悟
同情と欲とでチャリティショーへ行く　眉　水
雲の表情ちゃんと心得ているザイル　杜　的
末席に坐りたいのが早く来る　白渓子
傘干して話が弾む窓と窓　春　子
表情を変える月から出た童話　広　司
土下座にも同情しない固定票　勝　美
そして十年子の脱け殻を温める　創　吾
泣き顔は見せず背中が泣いている　一　菁
同情へ重い裏印背負い込む　松　庄
ひとり酒味方の嘘は知っている　曲ん手
古本の値ぶみ厳しく持ち帰る　勇　太
分け前の話になると弾みだす　波留吉
青春に弾みをつけるモトクロス　菜　月
法事の席で儲け話が弾みだし　藍　子
表向き同情しておく姑のぐち　と　し
弾みすぎ明日は微熱が出るだろう　君　子
頼りない男が同情ばかりする　まさお
同情をあつめ喪服が美しい　速　水
はや行かな銀行閉まるほどの金　あやめ
表情も豊かにお金をせびられる　かすみ
握手の手きれいに洗ろた議員さん　一　笑
孤独とは自由なものよ花愛す　明　代
断ればセールス玄関開けたまま　光　子
玄関がだんだん狭うなる福祉　一　途
同情が嫌な私の車椅子　章
同情をはねて土管に住む孤独　晴　風
引出しの軽さに余生弾み出す　静　江
雨が降る貴方肩でももみましょか　シマ子
九分九厘勝った男の無表情　光　夫
弾んではくれない毬を抱く女　てまり
開票が進むと一人二人去り　三　郎
同情を拾い集めた金バッジ　博　泉
表情をまたやりなおすロケーション　天　山
ごまかしたつもりの顔がゆがんでる　頂留子
表情はピエロになって泣いている　亜也子
玄関に静かに立った嫁の父　みゑ子
玄関に猫だけが居る夏休み　信　子
政治家が弾むといくさ近くなる　晴　生
表情も変えず離婚の印を押す　右　近
父ある日ごちそうさんと箸そろえ　三千子
同情を四柱推命寄せ付けず　英壬子
なす術のない同情なら知らんふりしとく　亜　成
同情をされると俺の負けになる　度
四面楚歌いびつな顔になってゆく　英比古
また来いよ負けたチームへ甲子園　敬　山
玄関からキリスト教が帰らない　礫
病院の玄関でする言い逃れ　鼓　城
玄関の花が枯れてる倦怠期　あいき
同情はしてもされたくない私　亜　鈍
ボケた振り出来ないまでにボケかかり　小　路
よく弾む毬の行方が危ぶまれ　柳宏子
弾んでる方が切符を二枚買う　紫　香
煙草がうまい煙草を止めた人の前　薫　風

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

八月のドラマを見せる甲子園　佳　秋
孫達の休み八月海の宿　よしつぐ
八月の宿題孫が毛虫飼う　弘　治
八月の暦に神話などはない　牧　郎
貨車一ぱい新米積んで都入り　十四郎
明日だけを信じて走る父の貨車　礼　子
二三輌離して貨車を押している　紫　香
脱線の貨車は恐怖を語らない　貞　夫
不安げに里の母さん駅につく　江　美
目を入れて貰えないダルマの不安　夢之助
盆休み孫達だんだん来なくなり　貞　吉
大文字京の夜空を昔にし　いわお
うっぷんを晴らしたように梅雨が明け　す　み
風鈴を鳴らしてくれる風を待つ　武庫坊

川柳化粧櫓　植村客遊子報

想い出は握りしめてた母の袖　岳　詩
誘ったのを断られたのも喫茶店　大　鷹
身を守る甲羅に保護の色を添え　越　山
テストすみやれやれ元の顔になり　秋　月
首を切る話聞いてた箸枕　紅　月
行書での手紙楷書で返事かく　葉　香
肩書も仮面も捨てた日の名刺　実　男
七人の敵へ握手をしてまわり　礎　石
混浴の旅へ道連れすぐ決まる　白　季
燃えかすの私が迷う青い酒　悲　子
ブランコへ父子仲よく揺られてる　みつこ
お化粧を落とすと年齢の貌となり　サワ子
ジャンボくじ当った心算でプラン立て　遊　光
竿一ぱい梅雨の晴れ間を待っている　と　し
波長合う友と話して生き返る　輝　月
孫抱けば抱かれた昔想い出す　永　楽

梅雨空へ農夫が急ぐ田拵え　みね子
古すだれ花にも吊って共に生き　まさ子
同窓会モンペ時代を語り合い　和　子
だれとでもダンスがしたい酒の酔い　客遊子

菜の花句会　高杉　鬼遊報

目と鼻の手直しきけば美人です　不二夫
その日は影も炎で焼いた原爆忌　白　兎
二人だけの暗号書いてある手紙　郁　栄
場末の灯口は悪いが温かい　恒　明
自分史に綴る半端の人生譜　章
親思う手紙はとても書きつらい　美智子
灯篭流し南無阿弥陀仏ともろともに　眉　水
夏甚平半端な男が鰯買う　勝　美
満開の花影に居て明日のこと　美　幸
夕顔がきれい門灯消しておく　度
眼の奥で半端な男が溺れてる　雀踊子
嫁の味塩一つまみ家の味　シマ子
八月の手紙を坂本九に書く　糸　葉
臆病な恋で半端に炎えて消え　射月芳
石段に影尚残る原爆忌　蕉　露
気やすめの灯がゆらゆらと水子塚　柳　伸
実年を半端の余生くぐりぬけ　春　蘭
納豆の糸にもつれた夫婦の灯　悦　郎
宅急便きっちり母の手紙添え　柳宏子
酒飲みに酒売る店の灯が匂う　鬼　遊
ラブレターごときに胸が痛くなり　冬　葉

西宮北口川柳会　奥田みつ子報

告白へきっと答えてくれる海　天　樹
ハネムーン滑走路の灯が小さくなる　郁　栄
炎天下いりこのにおう浜の風　春　蘭
傷口にふれることない夫婦箸　嘉　矩

厄介な荷物下ろして鬢の白　伊三郎
今ならばも少し上手に出来る恋　て　る
泣く事が下手で冷たく見られてる　江　美
争奪の歴史が重い優勝旗　正　坊
ひまわりの一途さ心奪われる　礼　子
厄介な義理にからまれ足袋をはく　照　子
庭の花切って迎える盆の風　君　子
金魚売り昼寝の夢を奪われる　保　蔵
口下手の言い訳だまって聞いてやり　笑　女
煩悩を断ち切って打つ朝の球　隆　子
片方の耳は聞かない下手な嘘　佳　秋
下手な説教に子は親離れの元となり　千世子
厄介な話になった里がえり　静　子
帰るなり夫が下手なウソを言う　年　代
厄介な病母の涙を眩しく見　〆　女
口下手で近所雀の輪から出る　よし津
届かない距離から吠える負けた犬　諷云児
奪われた心が残る美術館　武庫坊
厄介をまとめてかける盆掃り　紀　雄
中国の地図略奪のあとがある　園　歩
厄介をかけっぱなしの影法師　紫　春
情事には程遠く居る紙コップ　正　一
商売が下手な男の顔の疵　かすみ
厄介な持病わたしの偏頭痛　光　代
奪われたら奪い返せと怒鳴る父　廉
水虫を掻く快感がわかるまい　しげお
耳打ちはひと言だけで事が足る　白渓子
厄介と思わず化粧だけはする　杜　的
旅立ちへ切るものがある夏の花　美智子
四分の一の西瓜で涼足りる　きよ子
甘え下手指輪ひとつもないままに　みつ子

B面を覗くと厄介なこと言うてはる　散歩
世辞下手で帽子まっすぐかぶってる　はつ絵
南海の奇麗な海が父奪う　柳影
厄介をかけずに逝った亡母の足袋　いわゑ
縁切寺のみんみん蟬は深情け　作二郎
お見舞いの花もて余すひとり者　暢子
下手に手をふれるとバラのトゲに泣く　恵美子
ああ言えばこう言う妻でたのもしい　俊子
チャップリンの帽子は僕に似合わない　枯梢
厄介なすわる順序のあるうたげ　文夫
口下手が心で埋め合う夫婦坂　米朝
厄介な話が溜まる母の膝　百合子
身をこがすホタルに似たり夏の恋　美津枝
厄介をかけられに母がやって来る　陽露子
万歩計つけているから歩き過ぎ　新造
華やかに親友かざる一つの訃　静江
言い訳の下手な女の廻り道　良征
柳箋に鳥羽のホテルの箸袋　善太郎
粒よりが揃って私の椅子がない　千秀
厄介な男でまめに動く伯父　ノブ
耳打ちをしている女の罪つくり　曲ん手
ジーパンもはけぬ青春過ぎた歳　一進
氷屋のノコがどうでも引く構え　水声
人妻を奪った真昼の砂時計　伊升
下手から出る善人を侮れず　勝美
厄介な女の業に縛られる　歌子
早口がゆっくり話しかける嘘　芳仙
やさしさに飢え星空が深くなる　美幸
厄介なものに大学出の駄洒落　萬的
船世帯霧の中から明けてくる　紫香

川柳サークル卯の花　辻　白渓子報

船長帽娘が引継ぐ五湖も晴れ　陽露子
昔ならここで脱帽したニュース　散歩
野仏へすげ笠貸している遍路　百合子
鳩の出る帽子で大人まで騙し　鬼遊
草引きに古い帽子が役にたち　よ志子
手品師の帽子に潜む鳩の影　諷云児
背なの子が帽子落としたまま眠り　明代
気疲れの一日でした帯を解く　里子
肩書も気疲れもなし老いの職　伊三郎
お見舞いに行って疲れが倍になる　悦子
若葉マークの助手席で母疲れ切り　佐代子
子育てに疲れましたと走り書き　とおる
逆立ちできょうの疲れを振り切ろう　年代
半分はうつつで聞いている疲れ　紫香
疲れてる父に素直な靴すべり　杜的
良妻を演じ続けてきた疲れ　河瀬芳子
ポケットに叫び疲れた小銭入れ　鼓城
噴水の陰で日雇い昼寝する　満喜
噴水を見てる働き口のない男　井寒
噴水もやれやれ梅雨の中休み　曲ん手
噴水の前だけ人の居るベンチ　松川芳子
噴水で汗を入れてるシャーベット　花代子
アルミ貨を沈め噴水高く舞う　一郎
公園の噴水夏の陽をはじく　笑女
噴水の死角で少年靴磨く　杜的
噴水のベンチ午後から雨に逢う　如洲
噴水を絵にして月が昇りきる　水客
出来心ゆする垣根のビワの色　さと美
台風の気まま天気図もてあそび　求芽
もの言えばお金が遠く逃げてゆく　実男
梅雨明けの空がまぶしい蝸牛　盛男

まだ生きているのに妻は経をあげ　白李
カラオケとゲートボールと医者通い　逸
身内まで敵に回っている落目　白渓子
女とは妻とは強き選挙戦　高子
動揺をおさえきれない影法師　恵美子
冷房電車降りる誰もがむっとする　作二郎
あやめ咲く神の雫の縞もよう　静江
ついて来る妻が無口ですくわれる　いわゑ

久世川柳クラブ　二宗

母の癖そのまま貰って母の齢　保恒
寅の子を放せと旅に誘われる　照山
明日は散る花に別れの水をやり　伊久栄
紫陽花の心がわりを責められず　つゆ草
馬鹿になれ馬鹿になれよと腹の虫　江山
何時までも若いつもりで派手好み　藤江
有線の臨時ニュースに胸さわぐ　雅紅
親切にしとこう過去は過去として　志重
耳うちの中身ほんとに走り出し　虞人
足音をポチが知ってる午前さま　ひさし
百点の足音高く孫帰る　さわえ
足音を聞いて話題が向きをかえ　光水
足音を手真似で止める子の寝息　勝子
松葉杖の足音嬉し試歩の朝　邦人
親切が過ぎて女房チトふくれ　禅心
親切がプライバシーまで入り込み　あき子
玉葱がもらった肥料だけ太り　千代女
親切を杖に生きぬく老年期　種子
隣から借りて親切貸してくれ　つた子
親切は老いを豊かに生きさせる　雪花
交叉点一寸手を貸す白い杖　秀香
タンス屋の出入り娘へよい噂　吟平

吟平報

蒔いた噂相手の顔が眩しすぎ　英峰
口止めをすれば余計に噂立つ　甫正
回覧板ついでに噂置いて行き　知代子
あれしきの噂に負けぬ根性魂　妙誠
ひそひそと買物篭へ噂入れ　山人
けちん坊小金を貯めている噂　半仙
焦げつきも知らず噂に花が咲く　定山
よくお出でなさった貴女の噂中　静香
口に手を当てたい噂聞く柩　ふさえ
噂する方へと耳は伸びて行き　美恵子

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

甘党のうちにしるしをつける蟻　度
甘党の通で京菓子追う茶の間　喜風
甘党のだいご味にする京銘菓　頂留子
甘党も幹事に入れてクラス会　文秋
ポリグラフ針は知ってる嘘の汗　雅風
玉の汗ビールの味を倍にする　勝美
地下足袋で汗したビールうまいこと　愛論
働いて出た汗気持良く感じ　綾珠
退くことを知らぬ男の玉の汗　金太
汗臭い父の大きな背を流す　公一
ぜんざいが好きと酒席をうまく逃げ　柳影
鈴虫が鳴いて浴衣の汗が消え　悦郎
インタビュー受ける力士の玉の汗　美子
炎天に汗を流して鮎の竿　三十四
汗と恥かいて一人前になる　弧舟
手術の汗は祈ってぬぐわれる　弘生
代役の汗を見ている舞台裏　曲ん手
戦争展見てあの頃と同じ汗　作二郎
作業着の汗に男の顔がある　雀踊子
蟻でよし平和の為に流す汗　滋啓

南大阪川柳会　中川　滋雀報

相性より経済力に首を振る　恒明
理由は何もないが上司と気が合わぬ　洋子
不似合な男女で長い旅になる　冬葉
ロン・ヤスの相性が恐い国防費　勝美
相性にいちゃもん付けている八卦　晴風
相性より気立て選んで悔いはない　ハル子
弁当を毎日持ってくる異色　智子
異色やない人のせん事してるだけ　頂留子
変ってるだけで初めは売れました　文秋
我が道を歩き続けている異色　重人
異色から見れば世間はみな異色　庸佑
一瞬のブーム異色を売っている　千梢
発想が異色で法と紙一重　公一
正直な子で真黒な川を描き　慶三
医学部を出て小説を書いている　隆二
破門した異色結構食べている　曲ん手
ふる里は海の色まで変りはて　あいき
沖荒れて港弾まぬ網修理　喜風
海が見たいと言うてた亡母は山育ち　章久
一夏の恋が終った土用波　寿美
母の海汚さないでと赤い潮　広司
海の色空を写して青が冴え　綾珠
炎天にまっ白な歯がふりかえる　白兎
炎天へ犬の鎖は長い目に　度
炎天のトマト太陽の味がする　智慧子
炎天が好き向日葵は空をさし　滋雀
夏の雲大仏殿の鴟尾光る　善信
炎天の南に散りし兄遠く　三恵子
にぎやかな音母が来た台所　浩一郎
音のない夜の怖さを知っている　柳伸

控え目な妻の音から今日がある　久子
鍵束が人間不信の音で鳴る　楓楽
音のした方に耳から寄って行き　しんじ
音なしの構えで聴いとく妻のぐち　悦郎

翠洋会　中西兼治郎報

母の目は泳ぐわが子を見離さず　兼治郎
鉛雲能登にドラマの千枚田　文子
坂道の木々にはすべて恩がある　さと美
こんな坂にひと休みする癖がつき　春子
野うさぎの動きに肝をつぶす坂　君子
あっちこち痛みをくれる五十坂　美津枝
波に乗ることも覚えて沖に出る　良江
坂道で拾った情によみがえる　為子
心ひく出店の香り坂参道　照子

佳句地10選（前月号から）

行吉　照路　選

可愛らしい顔で吹き矢をぷっと吹く　景子
逃げ道を捜して女化粧する　歌子
補聴器を外すと和んだ顔になる　武庫坊
玄海の烏賊漁火は涛に揺れ　朴竜
ふと触れた掌の冷たさよ思慕つのる　祥月
蝶よ花育てた娘すいと翔ぶ　みつる
バランスを崩すと夜叉に落ちてゆく　葉子
眼には眼と女涼しい仇を討つ　冬葉
喝采はなくとも今日のノルマ追う　酉合
舵取りは君だよ白い帆を上げて　まさし

パートして給料貰う汗を知る　光子
かみしめてゆっくりゆっくり老いの坂　綾子
この坂をのぼりつめると何がある　みつ子
汗と泥勝機つかんだ辷りこみ　登志実
泳ぎ上手な河童で舌を二枚持つ　楓楽
お祭りへ莫迦になれないのがひとり　鬼遊

川柳泉尾　吉川　寿美報

ボーナスは家族旅行の足に化け　三千代
一円で百円分の願いごと　伴子
紫の面影ゆれて風の宿　美子
神前で誓う二人の共白髪　広子
退院に医師もナースも神に見え　文子
折り鶴に平和を込めて広島へ　恭子
北前船江戸のロマンの船祭り　シマ子
泣き虫な鬼もいるので面白い　美代子
梅雨三日雨読雨読の日が続き　白水
七人の敵の一つはロボットで　敏
胸張った熨斗だが後で恥をかき　昭子
障害に遭うごと愛は成長し　三世
火祭の炎わたしは鳥になる　弘子
祭り好き後のビールがもっと好き　多和子
夕暮れて祭りの囃子を遠く聞く　義一
蟬時雨並んで駆ける藁帽子　トミ子
高座では世帯道具になる扇子　淑子
横一に扇子を置いて佳い日柄　シメ子
落語家の扇子器用にそばを食う　満洲子
無学でも扇子の要に居る母で　寿美
決断のつかぬ鋏が宙に浮く　保

三幸川柳教室　桜井　千秀報

よく切れるハサミで過失許されず　つゆ子
使いよで切れるはさみで肩がこり　美代子

生業のはさみ哀しい日も握り　靖子
しがらみを切りたい鋏が錆びている　文子
炎天下野良着に汗の地図が出来　幸子
ヘンデルを聞いて水辺で消す暑さ　孝子
八月の暑さよ亡母の白い道　百合子
真夏日や右脳左脳が行きづまる　千秀
夾竹桃燃えて八月十五日　桂香
炎える陽へスコアボードはゼロの列　智水庵
不況風小さい義理に目をつむり　三千子
愛の日は義理チョコもなく過ぎてゆく　啓
仏さま税と坊主にからむ義理　邦郎
バイバイとお義理の様に指を曲げ　一郎
ネクタイを締めて義理とは暑いもの　千香子
ハイハイと返事ばかりで重い尻　千枝子
目尻下げ美人候補と握手する　鉄治
重い尻おだて上手が上げさせる　忠昭
暑いのに巨大ヒップに割り込まれ　愛子
デカイ尻フルに生かして場所を取り　み子
尻軽で気軽で口も軽い人　静
尻軽な女の涙見てしまう　茜

もくせい川柳会　田中　正坊報

ハンカチを忘れないでと母の声　きく子
ハンカチに包まれてきたハジキ豆　英子
ハンカチで鼻かんでいるご隠居　登志実
うちの猫呼べば寝たまま尻尾振る　明
キラキラと光る瞳はあざむけぬ　正坊
キラキラの夜景欲しがる街育ち　登代子
キラキラと白い産着の中の孫　よし子
シグナルの灯りキラキラ雨しきり　〆女
キラキラのダイヤの指に秘める謎　美弥子
旅先の町で薬屋探してる　寿美子

餌をまけばラグビーのよう鯉が寄り　純子
孫が帰ったあとで見つけた蟬の殻　萬的
耳鳴りもごっちゃになって蟬時雨　春子
ラムネ飲む少年の日の顔をして　武庫坊
妻の手をにぎりしめてた万灯会　博史
汚れた手をまたズボンで拭いている　房子
盆の里母はゆっくりしておれず　慶子
母ちゃんはおでこで熱を見てくれる　隆
晩年の迷惑どちらにかかるやら　富子
夏やせの望みも失せて猛暑すぎ　明吉
川筋も柳も絵葉書皆ちがい　花村
うまい酒今日一日は嘘がない　曲ん手
よく響く声でからかうのも女　紫香
良い人と道連れになり時短か　つえ子
母が呼ぶ漬物石が重いから　作二郎
天国も地獄も町の中にある　福一
店の老女高校野球ミニテレビ　洋子
渋滞へそれでも帰るふる里へ　典子

サークル檸檬　田形　美緒報

私から熱を奪ったのは氷　泰子
短きは財布の命月待たず　三四子
夏登山むくむく雲はかき氷　雅子
裏切って氷の刃覚悟する　千代女
氷柱の花になりたい炎天下　美子
許す気は無いのに溶けてゆく氷　智恵子
氷中花眠る自由も許されぬ　美緒
白玉と氷あずきの恋である　美代
教会のステンド賬やかすぎないか　薫風

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

拘りのグラス氷が溶けはじめ　歌子
雑木林のひそひそ僕を呼んでいる　静夢

カド番になるとにんにくよく臭う　良征
アベックとツバメは知ってた雨宿り　す ゑ
子に遺す何もないから迷わない　定 人
ざこ寝する迷信もない北枕　かね子
亡夫の庇護赤い氷が炎えさかる　静 江
住む人は町とか故郷の名無草　伊三郎
噴水の高さに影が吊るされる　はつ絵
迷うだけ迷えば神の手が見える　みつ子
ぼんやりと噴水見てる昼の月　いわゑ
地下道に涼ひとときを貰う夏　一 郎
地下街でする二次会はたかが知れ　白渓子
無賃パス貰って古稀の仲間入り　諷云児
私の部屋です私の色紙吊る　杜 的
鏡の底に人間がいる露天風呂　和 友
雨の日は雨の仕事のプラン組む　正 一
雑草の意地踏まれても踏まれても　梨 枝
地下だけで用足り帰る梅田駅　佳 秋
まだ残る闘志を湧かす夏の雲　嘉 矩
氷屋のノコが処刑を待っている　水 声
地下道の出口で影が待伏せる　天 樹
言いなりにあなたについて行くプラン　紫 香
一冊の本から少女迷いだし　郁 栄
手の届くところに財布おいてある　牧 郎
噂の中でどんどんとけていく氷　かず子
地下道で誰を待つのか傘二本　保 蔵
雑草が時に可憐な花をつけ　みち子
喪の家に夏蝶舞いてなぐさめる　玉 子
かき氷ひとりで溶けて待っている　君 子
何代もひびを切らせた和紙の里　晴 子
地下足袋の出足をくじく俄雨　かすみ
海底トンネル接点でする握手　春 子

待合室ドクター気取りの紅い口　美代子
迷いあり第一ゲート通らない　ときお
地下街のはずれで別れがまだ言えず　礼 子
方向音痴迷ったことに気が付かぬ　年 代

川柳塔きやらぼく　石垣　花子報

みくじ引く願いをどうぞ当るよう　朗 子
病んでいても又確実に春が来た　とも子
確実を問わずにわけるパンの耳　登 栄
確実をうり物にして宅配便　富 枝
確実とそそのかされて泣きを見る　時 子
確実の線へ向かって修羅の子等　千 春
万緑は確実むぎの話し声　てい子
確実に夏が光をためて来る　富美子
確実を希う朱盃へ口をつけ　八重子
確実に胎児が腹をけっている　御 前
確実に涅槃の道へ近くなり　花 子
確実にまあるく渡る月の橋　夕 子
確実に歩いて時計ふりむかぬ　晶 子
確実に忘れはしない花の四季　瑞 枝
確実に減っているのは地の塩だ　田 鶴
実る木をたしかめながら植えている　千 代
確実に釦をかけている少年　日枝子
確実に一日ずつの米洗う　荒 介
確実に水嵩を増す母の壺　伊 都

京都塔の会　松川　杜的報

京料理色に器に魅せられる　達 子
病院へ向けてタクシー無表情　白 李
鼻っ柱強いが涙にはもろく　武庫坊
オムレツの好きな男の母おもい　年 代
一途さをふたつの星に見習おう　幸
能面の昔と変らぬ美しさ　花 村

今にして分った亡夫の小さい傘　花代子
身長を言い合い子供下校する　孝 江
背くらべの差をはっきりと影が持つ　白渓子
背くらべ母だんだんと低うなり　芳 子
葱坊主蝶を迷わす背くらべ　栄
野仏と背くらべしてるトンボ取り　諷云児
雑踏に男の歩幅狂わない　〆 女
雑踏に腕を組みたい人といる　(小)英 子
雑踏が別れを乾いたものにする　葉 子
雑踏でもぐら叩きがしてみたし　水 客
考えのまとまらぬまま散歩下駄　弘 生
散歩するのがまだ怖い試歩の杖　敏 正
許された散歩に微熱のでる不安　陽露子
しあわせな夫婦に見えてくる散歩　飛 鳥
夜の散歩藍の匂いとすれ違う　(福)英 子
散歩から帰ると債鬼待っていた　三 男
山の宿散歩を叱る遺難碑　和 友
散歩またつまらんものを買うてくる　求 芽
阪神が勝った新聞買う散歩　紫 香
本箱の扉は妻の締める役　杜 的

川柳はびきの　田中　隆二報

花菖蒲江戸伊勢肥後と人が行ち　淑 子
西国を地元で廻る葛井寺　憲太郎
コロコロと青梅洗う梅雨の暇　トミ子
男性型の梅で涙がすぐ乾く　弘 子
きびしさを土俵の上で教えてる　葉 子
七色の雨は女を悩ませる　ケイ子
父の日を思案してる小さい胸　シメ子
ただでさえ弱い頭が時差でボケ　清 子
自画像は父にも母にも似ておらず　隆 二
あれこれと欲しい間はまだ達者　久 治

釣り忍風のたよりを待ちわびる　寿美
盆栽の蛙と子供がにらめっこ　司
高齢化耳がいたいぞ八十五　隅谷義一
サングラス噂の影がつきまとい　末一
花鋏リッチな朝を独り占め　吐来
孫の顔贈り物より重みある　三千代
顔で負け足の長さで又負ける　伴子
頭脳指数どうやら孫に追い越され　胡村
雨だれに樋の修理を思い出し　繁男
緊張が解ければ汗のナイヤガラ　美子
夏祭汗が飛び散るギャルみこし　志洋
汗を拭く仕草も魅力美女の鼻　満洲子
翔んでいる女でブームにのりやすい　敏
トキの影又一つ去る北の空　石橋義一
振り向かず去ったおんなの花蘇枋　一屯
核捨てて暮せとほうき星が去る　隆
恋しさも憎さも抱いたままで去り　美代子
頂天を去る桜吹雪のように去る　昭子
チャップリン背なで泣かせてザ・エンド　優
古い地図頼ってコース間違える　昇
神さんの間違い男まさりの娘に育ち　白水
酔う程に間違うカラオケ迷調子　忠宏
間違い素直にみとめ眼が綺麗　比沙子
冷汗の奥に昨日の嘘がある　重樹

川柳塔唐津支部　久保正敏報

新任の女教師ギャルという仇名　四郎
全力を尽した者の空の青　多駄子
一フィート証言沖縄撚り繋げ　朴竜
地下街の迷路出口がわからない　高明
空き缶にみんなで愚痴をタンと詰め　あき
神拝む心が罪を消してゆく　花代
もみじ葉へ一期一会の風が吹く　虹汀
気まぐれに買ったジャンボが大当り　旭恒
信号の無駄を夜明けの道で知り　正敏

わかあゆ川柳会　小砂白汀報

臨床の友を励ます手を握る　翠星
同時選さっきは誰と握ったかな　ヒデ子
赤子の手くい込む程に握りしめ　聖子
下積みの頃は責任軽く負い　世似
握られて舌をぺろりと出しておき　かつ子
握られて握りかえして熱くなり　英子
かくし芸下積みの人と思われず　清泉
ベランダの竿で干される一家族　笑子
中ほどが崩れ下積みらくになり　民子
炎天下ベランダふとんを着せられて　鈴江
下積みの草にも神は花をつけ　歳栄
清潔な少女の脛に恐怖する　天痴人
ベランダの猫はバッタなど知らず　はるみ
下積みになって直撃まぬがれる　白汀

川柳塔まつえ八月例会　恒松町紅報

掛合太鼓が首相誕生待ってます　育子
将来は首相かも知れぬ孫眠る　風子
一度でいい坐ってみたい首相の座　静翁
ころころと変る首相の二枚舌　ノブ
首相の座争う人は刺がある　静江
首相のコメカミ動く米価審　きみえ
三選の首相の眉が又肥る　多賀子
瞳の槍に首相の帽子狙われる　瑞枝
行革が済むまで首相居直る気　代仕男
八月の空平和の像は坐ったまま　寿美子
山の神坐るだけでも箔がある　友子
せせらぎを坐って聞いている不倫　貢範
居座ってからの課長の腕の冴え　美治
ネクタイを外して二次会坐らされ　市雄
どっかりと坐って父の指定席　妻子
上席に坐る意見を持ってない　愚童
正座して頂く酒の酔いが出ず　雄々
幸せは気楽に坐る場所を持ち　芳子
愛されて坐ると風が強くなる　昭二
先代の霊に幸せ供養する　翠星
走馬灯霊は逢う瀬をよみがえり　みえ
花束は霊安かれと海に散る　満江
年一度霊に詫びてる花手桶　鳳人
精霊送り川の流れがきく想い　秀子
霊場を汚す観光バスの列　正朗
本堂の暗さ霊気が身に染みる　ちかし
霊界に旅立つ時はみな善人　三男
霊感を信ずる妻を笑うまい　鶴丸
幽霊も出にくくなったネオン街　由郎
甲虫に綱引きさせて子らはしゃぐ　巡歩
養殖で山を知らない甲虫　与根一
ふる里の樹味を忘れた甲虫　長三
ハンドルを握る夫を信じよう　快哉
ハンドルの操作無事故の免許証　舞吉
ハンドルは女かのろい車間距離　叮紅

倉吉川柳会　渡辺菩句報

広がった核のこわさを知らぬ猫　寿朗
クーラーが好きでも嫌と言う頑固　秋人
地図拡げ終着駅はまだのよう　英治
ふところのクーラー年中鳴りっぱなし　柳風
クーラーを効かせて夫婦無言劇　満春
花火師の命を燃やすナイヤガラ　ゆり子
雨雲を広げ雷顔を出す　寿満湖

人形に喜怒哀楽の紐を付け　かつみ
遠花火男のだまし言葉聞く　雄々
総選挙軍歌広がるかも知れぬ　みなと
マネキンが早目の秋を着て見せる　や え
人形が離婚の種明かしをする　十六夜
クーラーの部屋でゴッホが燃えている　千秋
キューピーさんを買うとマヨネーズが付く　観洋
告白を聞く人形のだんご鼻　瑞枝
広がるとこわいうわさが先に飛ぶ　幸苑
おとぼけが上手になった指人形　とみお
人形がある日私をのぞき込む　文子
藁人形よ米代を上げてくれ　螢
見られてはならぬ花火をひとつ抱く　明
サービスのつもりクーラーききすぎる　由多香
クーラーが嫌いな甲子園の女神　石花菜
クーラーにじんじん痛む古い傷　荒介
クーラーの部屋でローンの風に会う　独歩
花火連続これは孔雀ショーである　菩句

静岡西奈川柳同好会　永倉　僕川報

餌なしで友を泳がせ鮎を釣る　庚子郎
世は変り削る世話ないボールペン　たき
税額で人の値打が決められる　孝平
ニューリーダー互に腹のさぐり合い　喜平
年金で静かに暮す老夫婦　たま
健康食騙されながらついに買い　やす
恋愛は一生やっても税はない　つね
かみなりに起こされ夢は途中切れ　かず
要注意腹が教えるカギホック　みつ
遠慮なくずけずけ言って腹はない　きん
若者の夢ふくらます甲子園　きぬ
野良犬も麦飯好ますささにしき　美智恵
夢と欲発表までの宝くじ　静代
手で合図タクト上手にすべり出し　僕川

川柳ひらい　行吉　照路報

舌先が覚えてました亡母の味　千恵子
上機嫌女の舌に乗せられて　寿子
ソーメンが米に代って幅きかせ　柏峯
参加して人の値打ちを打算する　アヒル
打ちあげる花火の音に戦友を偲ぶ　美代志
非行化のバネの押えが見つからず　トモ子
参加して人間らしさ汗で知る　年子
老犬の舌だけ生きてる夏の午後　方己
母さんの雷だからよくこたえ　かずを
飾られた花よりそぼくな花がすき　博
バネのある椅子で自分を見失う　敏和
波ひとつ立てぬおんなが炎を溜める　典子
老いて尚バネ衰えぬ筆の跡　良一
飛び入りの客ソーメンであしらわれ　孝子
何も彼も忘れて笑いに参加する　幸江
参加せず心は地図を追っている　裕子
一喜一憂無言の日々で通じ合い　志寿子
亡彰子よ語りあかそう夢枕　ともゑ
造成地の葦が必死で巣を支え　胤親
参加者がお互い手を振り笑い合い　せつ子
ぎりぎりの処でバネが反論す　博友
なめらかな舌で毒針吐きつづけ　柳五郎
父のない子に石蹴りは教えまい　草風
参加して割勘要員だと悟り　真備雄
原爆忌舌の乾きにラムネ合う　照路

川柳ささやま（無鬼師追悼句会）　**脇田米朝報**

師のゆかり薫秀のみ寺拝む句座　ゆう也
本当は拝みたいよな妻である　文平
無神論妻の事故死へ香を焚く　百合子
宝塔寺無鬼師の句碑を先ず拝み　素水
み仏を拝む姿を孫が真似　一孟
焼香の済むまで和尚お付合い　エキオ
もう上は向かぬどうしのコップ酒　可住
下心ちょっぴり混ぜたおごり酒　金之助
下宿代飲んでしもたと子の便り　愛子
今日からは敷居を少し下げて会う　法斉
薄幸の女この子がいのち杖　与志
退院を目ざしてはずむ試歩の杖　つや子
心眼を支えて運ぶ白い杖　テル
共白髪たがいの杖で越す峠　まさの
隠しごと持たぬ子の瞳が澄んでいる　和子
隠さずに何でも言える夫がいる　くにの

いずも川柳会　竹治ちかし報

天然の涼を木蔭は惜しみなく　幸一
故郷の木蔭恋しいビルの街　肇
BGに木蔭が欲しい炎天下　軒太楼
公園の木蔭は過去を忍ぶ場所　青湖
木蔭まで誘いこまれて長話　代仕男
アベックのいつもの木蔭指定席　流石
今日も無事貝は夕陽に顔をあげ　水煙
遭難の現場語らぬ貝一つ　ちかし
山眠る鍵は要らない平和郷　為一郎
一つだけ母が離さぬ愛の鍵　辰子
鍵しかと許してならぬ核の夢　律子
それぞれにくらしが違う鍵の穴　舞吉
マンションへ帰る坊やの首に鍵　久栄
幸せの鍵は笑顔と円い月　芙佐子
合鍵に不倫の刑が彫ってある　多賀子
お互いに見通しつけて杭を打つ　房子

お互いにもの言わぬ日の重い箸　桂子
お互いに針の神経疲れます　元之介
面倒な話互いに避けたがり　ノブ
お互いにはげまし合って医者の椅子　智子
お互いが素直になった今朝の飯　勝子
ゴムボート臍までつかり子をあやし　草丘
初恋の女へオールは派手に漕ぐ　弁治郎
オール漕ぐ青春讃歌水しぶき　知恵子
川嵐ボートの若さ妬いて吹く　まこと
それなりのドラマボートにおいて去に　しま子
絵日記のボートに父と母が乗り　寿恵
追憶の中にボートがゆれている　昭二
燈台と句碑つぼ焼きの日御碕　独仙
桜貝少女の夢は海に出る　満江
日盛りは木蔭の人が動かない　清吉
淡水化だまって居ないしじみ貝　巡歩
肥満体誰もボートに誘わない　清子
向い合うボートが妬いた水しぶき　よし子
貝の様黙って居れば馬鹿に見え　春梢
ボートゆれふたりのキスが縁となる　江雲
ボートレース心合せて櫓を返えす　きよし
句碑赤く染めて夕闇へ漕ぐボート　鐘堂
若者の花形ボートセーリング　育子
伝説の池でボートが人を待つ　(迫)秀子
ボートなら任せておけと腕まくり　吉枝
青春のストレスボートで吹き飛ばす　翠星
お互いに虚勢張るから木が枯れる　桜水
お互いが社会福祉の傘の下　崖松
海に来て心の鍵は捨てました　(松)文子
割られても岩にアワビはしがみつき　夢酔
人去って浜辺の月と貝の私語　きみえ
人間のドラマにひと役桜貝　緑之助

岸和田川柳会　植山　武助報

幽玄の世界へ誘う灯の魔力　加代子
何の灯かぽつんと山の中腹に　勝晴
飽食にタイミング良い茄子の彩　寿美子
古写真丸髷結った若い母　ゆずる
遠雷に別れ話は明日にする　一弥
昨日今日明日への夢を科学博　浪速子
心経へ明日のいのちを託す数珠　狸村
時差ボケでやっと遠くへ来た実感　佳生
下駄箱の隅に未練の男下駄　こう
公開録画笑うけいこもさせられる　冨志子
招待に友の返事の軽いこと　希久志
肩書きを離れた父の丸い顔　ひで
お喋りをもう一人の私に叱られる　さよ子
憶い出は遠く世相に流される　春栄
老人クラブ勧誘にゆき叱られる　白光子
孫の植えた朝顔へいい目覚め　武助
明日よりも今日を生き抜く欠け茶碗　甘平
かみなりを連れて大雨戻り梅雨　操子

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

妻の名を呼べば昔の雲に逢い　久仁於
止り木で同じ悩みのある話　邦子
子の名前呼んでもハイと返事せず　今子
イソップが僕の人生言い当てる　多駄子
一線を越えてはならぬ師弟愛　旭恒
天仰ぎ地道へ向う人急かず　朴竜
アドバルーン今日の垂れ幕何と書く　あき
生きている証元気な心電図　虹汀
女子駅伝産土神の拍手受け　四郎
訳あって一軒だけのお付合い　高明
出る杭を叩くと個性が死んで行く　正敏

川柳藤井寺　赤木　和子報

茄子漬けの色をほめてる盆提灯　与呂志
南禅寺名物一つ蟬時雨　清
初心つらぬきびくともしない夫の背　つや
夕立が過ぎて西日が強く照り　須美
揺れ動く世相安定剤がよく売れる　吸江
二枚目の舌なめらかな総選挙　重樹
夕立よ降るな家までまだ遠い　ときお
五大関今日はどなたが負ける番　志津
星空にブランコ一つ揺れている　三郎
揺れているサヨナラを言うその日まで　美代子
中傷に絆ゆるがぬ夫婦愛　作秀
流し雛川面に女の影揺らぐ　治子
皇軍の旗色悪し戦記閉ず　本蔭棒
円高がアメリカチェリーを美味しくし　伴子
風見鶏どこ吹く風と同日選　祐二
紫陽花の前で記念の厚化粧　ふみ
ニューリーダー文殊の知恵も霞みかけ　たかし
絵日記に藻が揺れている金魚鉢　正人
夕立は嶺より先に走り来る　秋園
揺れ動く首相発言間接税　清心
縄のれん次つぎ揺れて稼ぎ時　繁男
山里の日の丸律義そうに揺れ　うめ
のど自慢河内音頭が風に乗り　末一
壺坂は妻同伴で来るところ　みのる
夕立が洗い流した空の碧　麻雄
兄ちゃんと比較したのが悪かった　昭子
緋を少しこぼして女捨て切れず　正枝
くちなしの蕾かぞえて梅雨に病む　彩
縦揺れも横揺れもあり世を渡る　雅美

余震なお続くベッドで身構える　和美
濡らしてはならぬ書類と軒を借る　和子

川柳ひらい　行吉　照路報

むだ花へまだ意地通す瓜のつる　敏和
思いやり母の蔭膳鉄かぶと　良一
思いやり有る娘の順に姓を変え　幸江
軽口がとびかい田植の手も進み　裕子
ファッションに似合わぬ袋もてあまし　孝子
母の手を通れば温い風になる　典子
枕辺に淡い望みの花言葉　志寿子
人肌の思いやりある母の笛　千恵子
思いやる親の心に背く子ら　栄翁
好きだった袋帯〆めて亡母偲ぶ　ともゑ
土の香がむんむん老いをなぐさめる　胤親
高望みメロン夢見る瓜の蔓　方己
思いやりお先に通す白い杖　寿子
垣根とれ軽口言える嫁姑　せつ子
軽口だが使い走りになる男　柏峯
友もしゃと思えば手が出る足が出る　アヒル
軽口の男バスツアーの人気者　美代志
友が行くところどころに酒があり　トモ子
軽口を一口もらしたにがい味　年子
耳掃除すまして雨の音を聞く　かずを
腹割った言葉の裏にある友情　博
軽口に根が生え葉が出てくる怖さ　美佐保
思いやりあたため合うて老いの春　やすえ
軽口にのせられ本音出てしまい　青銅
ライバルの不振ちょっぴり思いやり　柳五郎
着飾って女は病院の門へ消え　博友
瓜の種吐いて言いたいことがある　草風
形より気立てを買うてうまい瓜　真備雄
軽口の男が旅の宿でもて　照路

聴障川柳　稲田豊作報

兎小屋さえ建てられず借り住居　豊作
老いた親名誉家長で在らせませ　行江
カラフルな甍の並ぶ丘の家　文古
家中の知恵を集めてクイズ解く　和江
正信を得てから吾が家笑い満つ　鉄火
ふる里の家に大きな声がある　三香
鯉のぼり泳いで我が家五月晴れ　みつる
家に居て耳は聞こえず役立たず　健太郎
家中の給料ママにあつめられ　珍顔
新築の安堵か夫は逝てしまい　承平
外遊で家のおむすび欲しくなり　八重子
家に居る夫を気づかい旅に出る　たみ
家付きの女に恐いものはない　一晄

城北川柳会　野呂右近報

子供より親を教師に要る躾　倫子
まろやかさ熱いワインに足す果汁　佐津乃
母の無い子は泣かぬもの蟬の声　静子
マッサージしみじみ老いの坂を知る　静歩
七夕に願いを書いた票もあり　敏子
同窓会遠い思い出老いを知る　よし子
吉報を伝える足はリズム持つ　綾珠
定退で意地を捨てたが欲捨てず　白峰
会報に計の欄一番先に見る　ふみ
どしゃ降りに女将が招く猫になり　祥恵
かるがもの一家団欒波の上　カネ
なき人に殉じ逝きし娘忘れえず　久留美
筋書のない顔ぶれにうろたえる　悟郎
休日は手足使わず甲羅干し　晃世
熱さめて我に還った日の夜明け　満津子
時勢とは京の仏もつらかろう　文子
海越えて感じる親のありがたさ　明美
愛されて居る自信から出る気儘　右近
青い目も天神祭りに威勢添え　達子
思い出が又よみがえる旅の宿　八重
親切のあと一筆が書き足らず　ただし
豪邸の壺本物に見えて来る　道子
プレゼント子はそれぞれに父思い　純子
一筋をつらぬき通した父の道　公一
保証印断る言葉に汗をかく　登志代
嫁にだけは残して置きたい家の味　温子
病む身には妻の力の有難し　弘生
サボテンの花の一生短かすぎ　ふさ子
酔った人ハイハイハイとあしらわれ　繁子
つばめの子今日はお立ちか左様なら　米子
岩田帯締めて母なる自信湧き　陽子
母の幸娘喜び涙ぐみ　寿美礼
ちぎれ雲已が心を置いて見る　新一郎
嫁選びスタイルよりも顔よりも　有佳
私にもどる机に戻る雨の午後　テルミ
盃に大文字写す京舞妓　祥恵
大阪をアッと言わせた百万票　市郎

川柳駒つなぎ　里小路報

握手して腹の奥まで読まれてる　真砂
着こなしで地味な着物も粋に見え　壮之助
温めた言葉が喉を突いて出る　隆二
追いつけ追い越せと発展途上国　文秋
人妻と揺れる吊橋渡ろうか　新造
ダイアナ妃握手出来れば死んでよい　東雲
定年後自画像地味ないろに替え　国公
地味かしら鏡へ少し背を向ける　志余悟

滑らかな喉に本音を乗せて居ず　章
凄まじい意見を吐いて四面楚歌　庸佑
冒険心かきたて夏山そこにある　潔
人妻と長い握手を誤解され　八重野
世間から忘られ地味な職に生き　柳宏子
のど仏ごくりと鳴って負けを知る　美代
すさまじい全権ぶりを見せられる　恒明
一寸した冒険不倫の恋育つ　萬的
握手して腹で畜生といっている　克己
円高を地味に耐えてる父明治　勝美
嘘も出る喉へワサビがきき過ぎる　柳右子
鬼の面を夜店で買うている女　作二郎
おもちゃ屋の冒険母に叱られる　雅風
握手から首を抱えてキッスする　幸治
知能犯見かけまったく目立たない　節子
喉ごくり何を連想しているの　史好
運慶の作凄まじい慈顔かな　重人
冒険をしながら夫婦丸くなり　曲ん手
握手したあの日の思慕がまだ疼き　甘平
ストレスをためて動かぬのどぼとけ　柳影
愛してる男へ女鬼になる　弘生
冒険はしたし命もまだ惜しい　春蘭
誘惑の握手と知って逢いにゆく　美津枝
生涯を地味で通した母の下駄　美幸
嘘をつく喉がピクピク動いてる　健司
顔のことで奥サマ同士ケンカする　外吉
冒険がしたくて白い地図を塗る　冬葉
欲しかったのは握りかえしてくる力　白兎
弾んでる心を包む地味づくり　凡九郎
嫉妬する女に逢わぬ方がよい　雀踊子
冒険の手記が途切れたままの雪　浩一郎

ただならぬ握手を女から受ける　規不風
地味づくりしてても過去の匂うママ　頂留子
死を越える愛キリストの喉ぼとけ　英一
丑の刻参りの背なに鬼が棲む　信治
冒険は木から落ちてから止める　千代三
くやしい日喉に押し込むコップ酒　射月芳
冒険に満ち足る髭の山男　笛生
雷鳴に閉じこめられている写経　柳伸
握手した途端敗れたなと思い　小路

熊本川柳会　**有働**

流行をけなして老いの殻に住む　百骨
脳炎で一あばれして世を去るか　丹青
応援の小旗と雨に濡れている　市雄
古傷の向うに男の影が揺れ　哲翁
ファミコンでお伽話が風化する　昭代
遮断機を見上げて拾った昼の月　俊子
靴脱げば素直な僕になる砂場　宵草
定年の歳を過ぎても小商人　緑
席順に苦労している案内状　幸子
矢印と案内板でひとり旅　謹爾

川柳わかやま　**堀端**

今風に生きる女にある奢り　照子
つまずいた夜はまくらを裏返す　信秋
口惜しさの身を横たえる夜の底　白光子
父となる産声待っている夜半　三千代
夜の闇を視点の合わぬ目で見つめ　隆積
夜稼ぐ女の素顔見ぬことだ　正博
背かれてからの女に長い夜　克子
看護婦のあわただし音無情の夜　千寿子
迷信に逆ろうてみる夜の蜘蛛　信子
夜が明けて決心鈍るのは男　佳秋

女子寮は起きてるらしい夜鳴きそば　紫香
仮眠所の月にやすらぐ深夜便　たつお
娼婦溢れてとってもさむい熱帯夜　狂虎
匿ったおとこを逃がす夜の木戸　帆船
夜が明けて男を許すおみおつけ　月子
錯覚の愛の絆へ釘を打つ　寿子
握り返す手が錯覚の恋を生み　萬的
錯覚が生んだ噂が風に乗る　登志代
夜が明けて見たらなんでもない木の葉　静生
黒を白という錯覚だってある　武雄
錯覚をカバーし合えるのも夫婦　輝子
図太さが生んだ錯覚ものにする　忠
錯覚は或る日女を強くする　公子
錯覚も知らぬ顔して喋ってる　つる子
蜃気楼琥珀の酒に溶けていく　康勝
錯覚に落し込まれた壺の中　文代
錯覚を頑固一途に押し通す　茶の子
見抜いてる裏の仕掛けへ乗ってみる　光代
春夏秋冬母の仕掛けは愛で盛る　忠雄
だんまりの仕掛け女の目がしらけ　きみ
夜叉菩薩女の性にある仕掛け　緑良
仕掛けなどある筈のない道化服　幸
仕掛人の部屋に首桶置いてある　栄美子
色仕掛けに弱い男が多すぎる　柳宏子
石一つ吾が田へ仕掛ける水の音　裕美
たわいない仕掛けに今は乗っとこう　桂香
深夜待つ妻爆弾を仕掛けてる　紀久子
仕掛けのある枕が二つ置いてある　雀踊子
星と月天の仕掛けはあどけなし　道夫
愛情の仕掛人なら買うて出る　稚代
大自然の仕掛けをこわさないように　天笑

落ち着いているのはきっと仕掛人　英子
玉手箱の仕掛けは誰にも明かせない　正子
筆跡に愛を仕掛けた父の遺書　太茂津
人生は仕掛け罠との戦です　三男

堺川柳会（八月句会）　**河内月子報**

母の枕に涙のしみがついている　素灯
先祖の地に子の汗しみた曼珠沙華　金三郎
しみ一つ熱き思いのよみがえる　春香
失言を認めて父のいさぎよし　妻子
実力を買われ異郷で鳶の職　雅風
大臣の椅子ひと言で棒に振り　公一
コンピュータなどはいらないシェフの舌　五月
失言も小物のうちは放っとかれ　新造
舌出しているとは知らぬ保証印　あか里
実力は女房だけが知っている　笑痴
失言を責めず首輪を外される　曲ん手
台風一過缶詰ばかり食べさされ　月子
四つには組ましてくれぬ力の差　天笑
べんちゃらに不慣れで舌がもつれだし　青舟
台風が近づく夜の鳩時計　甘平
いつまでも取れないしみを持って生き　天鳳
指先を都会のしみが染めて行く　紀美女
失言のテープは容赦なく廻る　千万子
箸口で割り実力の差を嘆く　一二三
実力のないのが前を歩いている　真柳
実力はたかが煮物がうまいだけ　半銭
逢えない女のしみがついている夏背広　幸子
しあわせになって心のしみも消え　かりん
ネクタイに頑張っている汗のしみ　小雪
巻舌になって凄味の出る演歌　東雲
氷あずきのしみが喪服の胸元に　作二郎

堺川柳会（夜市川柳大会）　**河内月子報**

老いて尚声を磨いてたゆまない　天鳳
声一つ出せぬ病がにくらしい　真柳
戦争反対乾いた声をくり返し　素灯
すんまへん大きな声は地声だす　金太
キャプテンはつぶやきにまで気をつかう　隆積
一心に祈れば届く天の声　射月芳
カンバンとカバンが民の声となる　一二三
霊柩車横切る声は金魚売り　岳人
民の声聞く宰相の左耳　楓楽
風鈴の下でやさしい声がする　智子
入道雲の中から父の声がする　正子
鑑識はタイヤの土を見逃さず　荘之助
こぼれ種やさしい土に根をおろす　紀美女
長いこと暮した土へ帰る蟬　澄子
どん欲に墳墓の土は夕日吸う　薫風
陶工の目に土の肌妻の肌　寿馬
喪の明ける女の胸で土鈴鳴る　夢成
陶工の舌にはまろき土の味　桂香
高野山に涼しい土の風がある　幸子
あなたですか土になりそこねた詩人　藻介
よその子を叱る勇気がありますか　史好
叱られてわくわくしてる何故だろう　いわる
叱らない妻がだんだん怖くなる　泰子
叱られたあの日の父があたたかい　東雲
叱られてからちょいちょいと顔を出し　天笑
母さんにいくつになっても叱られる　秋風
叱られているうち心通じ合い　千万子
叱りつけた生徒に慕われています　景子
一喝をくれたお医者に賭けてみる　輝子
仏の花を忘れ仏に叱られる　千代美

職のある足はいそいそ駅へ向く　鬼遊
転職を親はだまって案じてる　半銭
トラキチがみんな無職にみえてくる　幹斉
職安で軽い演技をした疲れ　正子
職歴は一つつぶしのきかぬ父　かりん
後継ぎのない職ですと手を見つめ　小雪
寝ころべばリズムに乗って走る雲　肇
わんこそばリズムに乗って若いのど　英壬子
手拍子の揃うリズムはあたたかい　柳伸
男を乗せるリズムを持っている女　三男
いくさから帰って小皿たたき合う　完司
シーソーのリズム夫婦はこのように　かずお
CMに腰を振ってる0歳児　春香
故郷で食べると美味い団子汁　緑良
汁かけが好きな夫で情なしで　あいき
味噌汁をつくる天使が居てくれる　はつ絵
鯉こくよ私にお乳くださいな　月子
むつかしい訳は聞かないお味噌汁　妻子
お喋りなスープ男は水くさい　太茂津
一椀の汁に漂う愛と憎　甘平
とろろ汁家族は多い方がいい　藤子
切れそうな男をつなぐとろろ汁　たつお
味噌汁におんなの長い旅がある　幸
ラブレター小さな嘘も書いておく　道女
花束の替りに抱いている手紙　英子
落日の島から母の手紙くる　作二郎
人恋しつづる宛名のない手紙　彗梢
亡母に出す手紙のように日記かく　五月
一行は心に書いて置く手紙　笑痴
恋文はいま海峡を渡るころ　あか里
さようなら手紙の中は風ばかり　狂虎

川柳後楽　井上柳五郎報

スタミナの料理の奥にある野心　たけ志
スタミナは一番スッポンの生き血吸う　桃風
百万票にびっくり西川大眼玉　佐加恵
円高もどこ吹く風ぞ我が世帯　拓治
圧勝をすれば鎧が見えて来る　鮫虎狼
公約を逆さに読んでいる驕り　草風
意地悪が気弱を殺す鬼となり　紫峰
意地悪な奴ほど傷口突いてくる　玉水
意地悪な姑初夜へまだ寝ない　秋月
意地悪ね満更でなき頬を染め　番茶
母となる兆しの電話の長話　博友
上昇の兆しかおみくじ吉と出る　健一
巣立ちする兆しに仏間が長い母　照路
愛犬の死骸を埋める白い丘　中建
人柱埋めた哀話の築城史　柳五郎
タイムカプセル埋めて子孫へメッセージ　進
幕合いを埋めるピエロの泣き笑い　哲郎
飛んで火に入らねば義理が埋まらない　美智子
許す気になればなんでもない報せ　恒洋
過疎の村スットントン節生きている　吟平

川柳たけはら　森井菁居報

夏休みしゅくだいいっぱいいやだなあ　少三晶美
わすれもの家からそっととってくる　小三晴美
夏休み早くプールで泳ぎたい　小六純平
あさがおはおなかすいたらみずをのむ　小二昌之
クラブでは夏はしんどいでも負けぬ　中一美保
てるてる坊主しんよう出来ない梅雨の天　中一鉄二郎
雨雨雨　空も心も雨雲が　中二早代
部活から帰れば宿題待っている　中一亜貴子
カルガモの親子しんみり見るテレビ　中三恵子
巻頭言書きあげ白い旗を焼く　菁居
ままごとのお客にみんななりがたり　富司枝
たくましい中二の孫の丸坊主　雅恵
ゴザ売りの声さわやかに夏を連れ　栄恵
ストレスがたまったらしい娘の電話　寿満子
運動員の割りになかった票の数　キヨ
遂に来た敬老会の招待状　千年枝
閃いて消えた句を追う雨の窓　静佳
朝星夜星今日も戴く果報者　八重美
子と同居ただそれだけで羨まれ　喜美子
忘れない八月六日の生地獄　勲
喜寿過ぎて少女に還るクラス会　なぎさ
靖国の森とヒロシマどう違う　静水
時は流れて少女の夢に遠く居る　笑子
雨宿りさせてもらったお賽銭　房子
子を抱けば土の匂いがしてならぬ　蘭幸
人目にはさらすに惜しい恋百句　こうじ
みち潮へまるで少女のような夢　敬子
忙中閑万年青の虫を見つけたり　鈍舟
雷がひらめき一つくれました　比呂子
食べるだけ食べて娘のダイエット　汎美
砂山へ夢を盛ってる小さた手　康子
満たされぬ私を知ってるレース針　淑子
口下手でよし五七五の詩を詠み　節夫
両の眼をあけても見えないことばかり　礼子
一休みそれから列が乱れ出す　令子
ふるさとはいいなかしわ餅が出る　貞子
反対はしないが賛成とも言わぬ　一路
生き甲斐はくたびれた辞書めくる　春恵
行ってはならぬところへ足が向いている　清水
煙ひとすじ明日の命をふと思う　白狐
そこまでは言わず返り血浴びるから　酉合
人生の続編を書くボールペン　博子
スローテンポながら歩みはまだつづき　シゲヨ
役得はグルメの旅のリポーター　有情
傾いた船を漕ぐのもよしとする　臣子

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

一大事恩師の知恵を借りにゆく　舎人
想い出のアルバム恩師の黒い髪　白峰
報恩を忘れた心怪我をする　幸枝
恩着せの態度に背を向けて見せ　亮二
少しずつ恩給の水のんで生き　康子
恩人の其の後を知った地方版　弘生
恩は恩貸しは貸しだと悪びれず　佳女
これだけの事だが恩として返す　早苗
恩を説く講師ホームに親預け　柳風
先代の恩へ薄給のまま耐える　紫映
君の恩新人類は何んと読む　善政
叱られた記憶の恩師の便り読む　孝美
いただいた恩あり並ぶ献血車　規仔
恩着せるだけの縁談持って来る　節子
恩のある人が古傷知っている　道子
押しつけの恩にも笑顔もつゆとり　雄々
報いたい恩があるから張りがある　弘朗
流れ雲恩師を訪うてみたくなる　美智子
親亀の甲羅で恩が風化する　とみお

◇

大阪文化祭川柳大会は11月15日(土)

宿題＝**近い・巧・望・音・時事雑詠・懐**
（詳細次号）

10月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
川柳塔 まつえ	11日(土) 午後1時半より 古墳・くぼみ・網	慈雲寺　松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅 句会費 300円　投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	12日(日) 午後1時より 谷・押す・ゼロ	和歌山県民文化会館4F8号室 〒640 和歌山市鷲町15　野村太茂津 句会費 300円　投句料 60円切手3枚
西宮北口	13日(月) 午後1時より 独り言・都合・自由吟	西宮中央公民館　阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5—25—17　春城年代 句会費 300円　投句料 60円切手4枚
堺川柳会	14日(火) 夕6時より 全身・責める・先手・背中	堺青少年センター3F　阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2—9—2　河内天笑
南海電鉄 川柳会	16日(木) 夕6時より 道標・頼母子・右	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道㈱不動産管理部管理課　広井季雄 句会費 無料　投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(木) 午後1時より 欲張り・片言・自由吟	高槻市民会館301号室　阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻 白渓子 句会費 500円　投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
南大阪 川柳会	19日(日) 夕6時より 細心・死角・吸物・制度	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1—5—2　金井文秋 句会費 500円　投句料 180円(郵券可)
川柳 ねやがわ	19日(日) 午後1時より 隠居・決心・大阪	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9—9　高田博泉 句会費 500円　投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	20日(月) 午後1時より 冗談・切る・そわそわ・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒560 豊中市島江町1—3　5—801　田中正坊
駒つなぎ 川柳会	27日(月) 夕6時より 微笑・頼る・トップ・記憶	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19—28　里 小路

菜の花・富柳会・東大阪川柳同好会等は市民川柳大会のため例会はお休みです。

★特に記載なき場合　句会費 500円、投句料 300円（郵券可）、各題3句以内

原稿送り先（〆切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒596　岸和田市荒木町1—29—1　宮園射月芳

61年度二賞表彰本社10月句会と

同人総会は**10月5日**（日）

（詳細は表紙裏に掲載）

◇

11月本社句会は**7日**（金）

兼題　「握　る」「ふところ」

「水　面」「勇　気」

近畿文字放送作品募集

題「好　き」　橘　高　薫　風

3句　締切　**10月10日**

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい。

〒540　大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送　川柳係

「夜市川柳」募集

第5回「島」　墨　作二郎　選

3句・締切　10月末日

第6回「指」　岩本　雀踊子　選

3句・締切　11月末日

投句先　〒593　堺市堀上緑町二―九―一

河内天笑方

堺　川　柳　会

●募　集●

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾　栞　選

水煙抄（10句）黒川　紫香　選

愛染帖（3句）橘高　薫風　選

課題吟（各題5句以内）

「鍵」　田中　叶　選

「将来」　都倉求芽　選

「贈る」　竹内寿美子　選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾　栞　選

水煙抄（10句）黒川　紫香　選

愛染帖（3句）橘高　薫風　選

課題吟（各題5句以内）

「奪う」　納　糸葉　選

「議論」　二宗吟平　選

「火」　新家完司　選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。

★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

10月の常任理事会は1日（水）

定価　五百円（送料50円）

半年分　**三千二百円**（送料共）

一年分　**六千三百円**（送料共）

昭和六十一年九月二十五日印刷

昭和六十一年十月一日発行

編集兼発行人　西尾　巌

印刷所　藤原童心社

〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所　**川柳塔社**

電話（06）六二九―六九一四番

振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆路郎賞、川柳塔賞発表の季節が来た。路郎賞の方はベテランの高橋千万子さん。この方は女性には珍らしい批判の眼で句を作られる。個性的な作家を育てた麻生路郎の名を冠した賞の受賞にふさわしい作家である。川柳塔賞の方は熊本の永田俊子さん、三名の選者が推したのは初めてのこと、それだけずば抜けた句なのであろう。本社句会は多数のご出席で賑々しい授賞式にして頂きたくお願いします。

☆西日本川柳大会に参加した。弓削には駅前に路郎句碑、山の上の公園に生々庵句碑がある。公園への山道は、残暑の厳しさのせいもあってずい分草臥れた。大会では、新家完司さんが気鋭らしく総合二位の岡山県議会議長賞を獲得、水粉千翁さんが続かれた。両先生も新しい時代の推移を見守っておられたのである。

☆中国友好の旅も近づいたので、この後記も早目に書いているのだが、今回は、栞主幹の不参により、私が団長に推された。到着の夜が仲秋の名月なので北京で（仲麿は長安からだった）感銘深いお月見をしたい。

☆万里の長城も見事だろうが、かつて路郎先生が立たれた雲崗石窟の石仏の膝下に立ちたい。九月七日には弓削駅前の句碑と対面したばかりである。芭蕉は尊敬する西行の古蹟をしばしば訪ねた。吉野もそうだし、奥の細道の途次も、遊行柳に会うためずい分遠回りをしている。私も、詩歌の心は、こういう奥深いやさしさから胚胎するものだと思うし、尊敬する故人からは勇気と力を与えられる。

☆無事故第一の有意義な旅を願っている。

☆私事で恐縮だが、還暦を沢山の方から祝って頂いたことから、句集出版の時期を早くした。裏表紙の広告の「愛染」を、あなたの机辺に一冊お備え下さい。

☆栞主幹命名の女性コーナー「茴香（ういきょう）の花」欄へのご投句、規定通りにどんどんお寄せ下さるようお願いします。（薫）

▼「外交官とは女性の誕生日をけっして忘れず、女性の年齢は常に忘れることのできる紳士」という定義があるらしい。わたしは紳士でも外交官でもないからと言うのではないが、女性の年齢は常に忘れている。まして誕生日などを覚えようとしたことがない。

▼女性だけのグループはまとまりにくいと、よく聴くことだがそんなことはない女性にも賢明な人もおればそうでない方もおられる。個人的資質の問題で性別には関係のないことだ。あることを除いて、男と女を区別すること自体おかしい。

▼スポーツ新聞などに〝売りたし〟〝買いたし〟とあってゴルフ場の名を連記した欄がある。これは会員権の売買広告で、これが商売になるほどゴルフが盛んなのである。ゴルフは戦前からあったが特権階級の資格のようなものだった。それが戦後急に流行して猫もしゃくしもゴルフバッグを担ぎ出した。一番いやな顔をしたのは、特権階級とわたしではなかったかと思う。できないからいやと言うことそっくりが、一億一心がいやなのである。

▼自民党の衆議院三〇四議席プラス新自由クラブ。それもわたしはいやなのである。

▼短歌・俳句・現代詩もあるのに、なぜ川柳なのか、血のなせる業もあるだろうが、川村好郎師との出合いと人間関係だろう。（き）

☆行きつけの市場の魚屋に夏休みの間、ときどき小さな女の子が来ていた。魚屋夫婦の一粒ダネで、今年、小学校にあがったばかり。クリクリッとした瞳、前歯が二本欠けていて、とても可愛い。本人は、いっぱしお店を手伝ってるつもりでチョコマカ動き回っているのだけれど、どうも邪魔になっている方が多いように見える。

☆もちろん魚の名前は、まだよく知らない。「これなに？」と聞いたら

「甘いタイ」

「んー食べたら甘いの？」

「だって、そう書いてあるモン」

なるほど値札に〝甘だい千円〟とある。二枚におろしたその甘鯛を父親から受けとると、それを新聞紙に包み、ビニール袋に入れ「ハイッ」と渡してくれた。

「いくらですか」私はわざと改まった口調で訊ねた

「ワカンナイ」

「〝千〟ちゅう漢字はまだ読めないんやネ。数字なら分るけど」—傍から母親が助け舟を出した。

☆昆布やかつお節を商う店では小六と小三の男の子が二人、手伝ったり遊んだりしている。この兄弟の父親は数年前に亡くなり、母親ひとり店の切り盛りをしているのだ。

☆こんなことを書きながら今はあまり使わなくなった〝市井〟という言葉を、懐しく思い出している。

（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十一年九月二十五日　印刷
昭和六十一年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七一三号　川柳塔　十月号
定価　五百円（送料五十円）

橋高薫風著
句集『愛染』

著者の還暦を記念しての第四句集が発刊になりました。処女句集「有情」第二句集「檸檬」第三句集「肉眼」からも抄出された三十年の足跡八八〇句を掲載。皆様の机上に一冊お備え下さい。

■作品

労働歌蟻が歌えば凄かろう
恋人の膝は檸檬のまるさかな
人の世や鳴呼にはじまる広辞苑
睡蓮は万丈光の光源よ
こおろぎのように泣けたら涅槃かな
亡母の闇この世は雨が降っています
還暦は実年の花弓始

頒価　三、〇〇〇円（送料共）
発行所　川柳塔社

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!
豚饅・焼売・焼餃子

なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

551 HORAI
ほうらい
蓬莱
TEL641-0551

雑誌　05703－10